

艦 これでチートってこ
ういう事を言うので
は？

文才皆無。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

先に言います。戦闘はほぼ無しです。

主人公が宇宙船艦ヤマトをもとにしていますので完全にやり過ぎ使用になってしまいます。

本気で戦いがあると跡形もなく消し去っちゃいますよ…。

何事もホドホドが一番です！

チートだめ！絶対!!

で、いこうと考えてます。なので、あんまりチートの意味無いじゃん…です。ある種のタイトル詐欺だな…。

だが敢えていおう。抑止力としてはこれ以上に無いってぐらい効果的ですよ。やっ
たね！電ちゃんこれで深海棲艦とも戦わないで済むよ♪

ヤマトを主人公に物語が進みます。ですが、作者の気分次第で奇行に走るのもそれと
なく理解しつつ温かい目で見ることを推奨します。

ですので、それでも構わないという方以外は回れ右して下さい。

ご期待に添えるよう、誠心誠意込めさせて貰います。

目次

先ずは水平線を沈めよう！ | 1

撃ち抜くは、己の心なり | 8

架け橋への第一歩 その壱 | 15

架け橋への第一歩 その弐 | 24

架け橋への第一歩 その参 | 32

これは夜戦ですかね？…奇襲じゃないか | 41

なあ | 41

深海の生態系、彼女らの祈り | 48

月の灯りと星の瞬き | 56

???)さんの（非）日常1 | 63

新米提督さんの（非）日常2 | 73

新米提督さんの（非）日常3 | 83

襲来！ヤマト、出ます!! | 93

襲来！ヤマト、出ます!! | 102

襲来！ヤマト、出ます!! | 110

遂に…念願のアレを… | 117

番外編 クマじゃないクマ | 124

マシンガンと繊細な心 | 136

砲撃音のその先に | 145

襲われ、襲う…ヤマト、壊れゆく。

153

沈黙の鎮守府、恐怖染まる二人 | 170

静かなる悲しみと賑やかな喜び その1 | 186

静かなる悲しみと賑やかな喜び その2 | 186

静かなる悲しみと賑やかな喜び その2 | 186

先ずは水平線を沈めよう!

とある所で一人の青年が寝ていた。

なんの変鉄もなく只横になつて寝てるだけ。だが、そこにいた者は誰も目が離せなかつた。喧騒からはかけ離れた青年の行動。それはただただ静かに眠っているだけなのにそこにいた者達はまるで首筋に抜き身の真剣を突き付けられている錯覚さえ覚える。

青年が寝返りをうつ。

回りの者は何故か動く事すら出来ない。

いや、動かすことを許されていないようなプレッシャーをかけられている。

重くのしかかる重圧に押しつぶれそうになる者まで出てくる始末だった。

ここは海上で戦場。何時もならそこでは艦隊達がぶつかり合う場所なのにソイツは無視出来ない存在感を放ちながら呑気に寝ている。それはまるで相手ではないと侮辱しているかのように。

だが、それが事実であるように感じてしまうには、その存在感とその大きな態度が証

明しているようだからだ。

静かな海の上で水面を揺らすことなく青年が始動する。命の胎動でもあるように、ゆつくりと、ゆつくりと…

青年は静かに体を起こす。

身構える者もいれば、この世の終わりのような顔付きで懺悔を始める者もいる。その反応と見た目は十人十色だが心の中は一つだった。

青年は口を開く。

「ふあ〜…ん？…ん、何処？」

（「誰え!」）

綺麗にハモる心の声と見ていた者達の心情とは裏腹に青年は首を傾げていたのだ。た。

3 先ずは水平線を沈めよう!

とある場所、とある部屋にて。

「これは？」

「はい。今日の作戦で起こった全ての詳細を記したものです。」

「ああ、聞き方が悪かった。ここに書いてある青年は何だ？」

「分かりません。ただ、そこにいました」

「はあ……」

「あの……提督？」

「あのなあ、霧島。疲れてるならそう言ってくれ。俺は別にブラックな鎮守府を目指してる訳じゃないんだから」

「事実です！」

「じゃあ、なんだ。海……てか空中で横になれる人間がいるとでも言うのか？」

「知りませんよ！私だってあんな非科学的なモノを見ちゃったら信じざるを得ないんです！」

「で、結局戦闘も行わずに両者引き返して来た……」

立派な無精髭を蓄えた白い軍服を着る男性は霧島と呼ばれた少女の前でお手上げとでも言いたいのか手を上げて疲れた顔をしていた。

少女も少女で理解が追い付いてないともいうように困った顔を続けていた。

そしてあの会話も実は既に二回目である。

ふざけている様子のない少女を真剣に見返す提督と呼ばれた男はついに諦めたのか。現実を放棄するように机に頭を落とした。

「勘弁してくれよ……こんなの上にどう説明すりゃあいんだ……。不幸だ……」

「あ、でも向こうもあの領域での戦闘を行わないなら敵対する意思はないって深海棲艦と私達に言ってきました。」

「……そりゃアンナ化け物も裸足で逃げ出すシロモノをお持ちで敵対しないなら良いんだけど……つたく……どうすりゃあいんだあ……!!」

「…金輪際、あの海域に近づかなければそれでいいかと」

「変な問題持つてきやがって、それでいてなんでそんな真面目な解決法を思い付く!…どうすんだコレ…ブツブツ」

提督はその日から胃薬を常備したとか。

そしてその鎮守府内ではこの話題で持ちきりとなることは目に見えていた。噂が噂を呼び、その海域は後に提督達の間で魔の海域と呼ばれることも遠くない未来であった。

開いた窓から一枚目のレポートが風に乗って飛ばされる。

その紙にはこう書かれていた…。

本日未明、艦娘…ならぬ艦息あらわる。

更にはその艦息は自らを宇宙艦 ヤマトと名乗った。

その名の通り、宙に浮いており自由に空を飛んでいた。更に彼についていた主砲からはびいむらしき物が発射され、暁の水平線が割れるという威力。更に彼の漏らしていた言葉を鵜呑みにするならば充填100%あの威力。全力では地球すら砕けると予測さ

れる。絶対に敵対してはいけない。

彼は言った。静かに：そして平和の為なら滅ぼすことも辞さない。（追伸、何をとは言っていない。）

この領域での戦闘は一切として禁ずる。

破る物いれば、我が主砲が火を吹くことになる。（それはしたくないとその様子から窺えました。）

両者、手を取り合い仲良くすることを望む。（微笑んでいました。）

話し合いでどうにかなるなら、それでいい。だが、出来ないと言うなれば前世の記憶にある通り目の前の敵を打ち砕くのみ。（無表情でもしもの際には必ず実行するという意思を感じました。）

らしい。

目的は言葉にある以外は全くといっていいほど分からず、更にそのパワーはどの艦隊でも叶わないと予測される。その体にも耐久力が大きく、主戦力ですら傷付くか否か判断が付かぬ程：次元が違うという言葉が当てはまります。

見た目は推定、身長165・8cm、横幅は艦装込みで100cm、ゴージャルのような物が頭にあり、主砲発射時にそれが降りてくる。ヤマトと名乗るだけあり、艦装も大

7 先ずは水平線を沈めよう!

和にかなり類似している。

髪は毛先一寸程が赤色で、根元側が黒という不思議な髪でショートカット。

これが、青年 ヤマトの情報だった。

撃ち抜くは、己の心なり

どうも、この度地球に帰ってきた我、ヤマトです。

我：うーん、なんか合わないんだよなあ。

一人称って難しいよね。もう、俺でいいか。

俺は宇宙戦艦ヤマトです。

誰だかに急げヤマト!!地球は病んでいる!!って言われたような気がしたんだけど…

「うーん、だとしたら不味かった байна。あの時は訳分からず言っちゃってたけど完全に寝言に近い何かだったよなあ…。年端もいかないような女の子もいたし…寝惚けてやったにしてはやり過ぎたし…うああー…やっちゃったよー!!」

なんで波動砲撃っちゃったんだろう…あれって間違いないく駆逐艦とか、戦艦だったよな…まあ、見たこと無いから俺より後に作られたであろう最新型とかだとおもうし…アレ? 詰んだ?

…よーし。もうしらない。俺しーらないつと。

「アハハ、ソラガアオイナア…違和感がパネエ」

「ナンデ？」

「なんでってそりゃあ、俺は宇宙戦艦であの空の向こう側の位宇宙を駆ける戦艦だからかなあ…って！」

「ヲ？」

「あ、どうも…ヤマトです。」

「ヲっ！空母ヲ級ダヨ。ヨロシク」

空母 ヲ級と名乗った生物はポカッって音と共に外れた。
外れた!?

「えっと…どつちが本体？」

「コツチダヨ。コレハカブリモノケンブキミタイナモノサ。」

少女だった。黒いクラゲみたいなのが話しかけてきたのかと思っただけどまさかの被り物だった。

というのも、近い上に視界の高さの関係で大きなクラゲの被り物しか見えてなかったからだろう……。てか、それが真実。

「宣戦布告した時はヲ級は居なかったよね？まさか俺の話聞いて俺を殲滅しに来たのか？」

ええ、内心勿論ビクビクしてます。だって起きたら海の上。更には人になってる。分からないことだらけだよ。でも、この人の形でも波動砲が撃てたのはビツクリだったぜ。流石に口径が200cmじゃなくなってるけど威力は変わらないとみた。

惑星撃ち抜くって人類の技術力ってすげえよな！

「チガウ。」

「ん、アラ？違うの？」

「港湾ガ偵察ニイツテホシイツテ土下座シタカラヲ級がカワリニシニキタ。」

「あー、いきなり押し掛けた上にあんな事までしちゃったもんなあ……」

領地に侵入。発砲。うん、完全に駄目な奴だ。怯えられて当たり前だな……。

その港湾さんには悪いことしたなあ…直接謝りたいけど逆効果っぽいなあ…

「アノ砲撃水中カラモ光ツテミエタ。キレイ。」

「そうかあ？当たつたらつておもつたら普通怖くなるんじゃないか？」

「今コウシテ話シテ分カツタ。オマエハソンナ奴ジャナイ。タタカイヲトメタカツタダケ。故ニ無意味ニ戦カウ必要ハナイ。アト話シテ面白イ。」

「信頼してくれてありがとう。」

「モット撫デテホシイ。」

「はいはい」

ヲ級は何て言うか無邪気だよな。

たぶん弟のユキカゼが居ればこんな感じだったのかもしれないな…。アイツ、直ぐ死んじやつたから…。

撫でる力が入らないように気を使いながら撫でてる訳だけど、水底を見るような引き込まれてそんな瞳は嬉しそうになってる。ヲ級はさつき戦うって言ってたけど何で戦うんだらうか…。

「ヲ級に聞きたいんだけどいいか？」

「構ワン。何が聞キタイ？」

「戦うって言ったけど、ヲ級達はえっと黒と白の軍団なんだよね？」

「…？タブンソウ。艦娘達ハ深海棲艦ト呼ブ。」

「じゃあ、その深海棲艦達は艦娘？と戦ってるってこと？」

「ソウ。」

「何で？」

「守ルタメ。向コウガ私達を脅カスカラ、ソレヲ防グ為ニ抗ウ。」

ダガ、ムコウモ同ジヨウニ守ル物ガアルノダロウ…結局ハ負ノ連鎖デ恨ミアイ、戦イ

ヲ終ワラセルコトガデキナイノダトカンガエテイル。」

「…そっか。」

どこも一緒。戦う理由は虐げられないようにするため。

どちらから始めたのか分からない戦いは次第に大きくなって殺し合いに変わっていく…それは俺がまだ艦だったときも変わらない。1戦争の道具として最後は使われるのか…。

俺、本当は輸送船のような役割だったはずなのに…

「ナクナ。」

「はい?」

「才前ハ優シイ。コンナ争イヲ…無意味ナ殺シ合イヲ止メサセテクレタ。誰モガ齒止メノ効力ナクナツタ矛先ヲ納メテクレタ。深海棲艦トシテアリガトウ」

「…褒められた事はしてないよ。俺は結局、力で押さえつけただけ。本当に戦いを止めたのなら話し合つて和解する必要があるんだ。ヲ級だけじゃ駄目。全員がその殺されたつていう恨みの矛先を折らなかつたらまたいつの日か戦いは起きる。…だから、俺がここにいる意味があるとすればそれはきつと深海棲艦と艦娘が手を取り合える世の架け橋になる事なんじゃないかな?」

「…ヤマトなら出来るよ。あの世界で、地球を救うことができた兄さんなら…」

「…っ!!?」

「ドウカシタカ?」

「今声が…いや、やつばいいや。」

それは沈んだはずのユキカゼだ。俺はそう信じる。

だつてその方がロマンがあるから!俺は架け橋になつてやるさ!だから見ててくれ、

ユキカゼ。

「…モウ行カナキヤダ…マタ来テモイイカ？」

「喜んで。俺は此処に居ると思うから好きなきときにまた話そうよ♪今度は他の子も呼んで、さ」

「ウン。アリガトウ、ヤマト。ワタシモミンナガ笑ツテイラレル世界が見タイ、ガンバツテ！」

ワタシモ深海棲艦ノ仲間ニ声ヲカケルヨ」

「気をつけて帰れよ」

沈んでいく夕日と潜るヲ級、この世界で何が起きてるのかも何となく分かった。

俺が平和への道筋になれると信じて、知識を、力を使っていこう…。

それが、初めての友達 ヲ級との誓いだから。

架け橋への第一歩 その壱

去らばく 宇宙よく 旅だくつ…は？もう見られてるだつて!?

どうも、失礼。

こちら、上空2000フィート…はい。ジョークです。

昨日はヲ級と話して分かったのは白黒こと、深海棲艦の皆さんは海に住んでる生き物
(生物) だった。

敵方の艦隊コスプレ少女達は艦娘とよばれてるそうです。

だが、俺はまだ知らなかった…これからの生活を…。

ボツチ決定な俺が孤独と戦う事を!!

「あーあ、暇だ…」

「…ツヲ!」

「はい、おはよー」

「何ヤツテル?」

「ん? いや普通なら宇宙エネルギーで動く俺のエンジンってどうなってるんだらうっ

て思つてバラしてる。」

「…ソウナノカー？端カラ見タラ、自分ヲ傷付ケルマゾヒストニシカ見エン。」

「そうだったの!?!だから遠くでこつちをチラチラ見るくせに近付いて来てくれなかつたんだ!!」

「…ソレハチガウヨ。単純ナ怖イ物見タサジヤナイカナ？」

「グスン…」

えーはいはい。分かつてましたとも只現実が厳しすぎるんだ…。俺が膝を抱えているとクラゲの足が持ち上がり、頭にやってきた。

え、なにこの感触!?!プルプルとも言えないけど、プニプニとも違うゼリー質な滑らかなさ…これは新発見だぞ!?

「ヨシヨシ」

「…すまん。」

そうそう、点検の結果波動エンジンは不可思議な事に宇宙エネルギーからタキオン粒子を作つて動力に変換するんだけど、宇宙エネルギーが届いてるのか少し薄い状態で常

に供給できてるっぽい。

…っぽいというのは俺が元戦艦だから詳しくは分からないっていうだけ。

でも、これなら確かに次元波動爆縮装置が万全じゃないが問題なく使えるってことが分かった訳で問題無かつたってことだ。

充填率は100%までなら溜め時間が長くなれば使えそう。でも、それ以上となると不可能って辺りかな。

…10%でもオーバーキルなのになんでそれ以上の出力出そうとしてンだろう…アホか！

それからはお昼少し前まで戦闘方法から戦術、この海のこと、俺が体験した事の話をしていった。その時に一通りの整備は終えていた。ヲ級も最初は興味が無かつたみたいだったが、俺が白熱しているのを横で見えていたのが原因か段々と一緒になって黒くなっていた。

「ま、これなら食事も必要ないってことが分かったし、人形とつても人外確定な訳で……んん？ほう ああの通り、こちらに興味を示してるけどどうするのが正解だと思う？」

「捕獲。」

「……………」

「コホン。冗談ダヨ。」

「まあいいか。おーい!!」

こうも一緒にいると何を考えてるのかを段々と分かるようになってくる。だからなんだというものは無いが……

あえてどうであるかの判断の為にヲ級を膝の上に乗せて頭を撫でる。その逆の手を振ってみる……すると！

ガシャコン！

こつちに向けて砲撃用意です。酷いんじやね？

「アレハソノママデ良イノカ？」

「ん……折角ヲ級先生にレクチャーも貰ったことだし、試しにやってみるかあ。ブラックタイガー発艦」

ウィーン、バシユン!!

するとデフォルメされたブラックタイガーが空に飛ぶ。

今の人の形になって初の動きは気になることだらけだったが案外飛ばしちやつてからは何もしなくて良いようだ。

もし、自分があの騒動の時に意識があつたら古代くん達や沖田艦長は必要なかったのでは?と思つてしまうと、あの時沖田艦長の病気は…。

考えれば考えるだけ深くのめり込んでしまう…

「ヨソミヲスルナ!!」

「っと、撃ち方止め! ブラックタイガー、帰還せよ!」

もし、ヲ級が注意してくれなかったら俺は何をしてしまつていただろうか…?

オーバースペックの武器らしい(さっきヲ級に聞いた)ブラックタイガーは全ての魚雷を撃つて近づく前に爆発させ、飛んでいる艦載機は飛んで火にいる虫とでもいうかのよう簡単に無力化してしまつていた。

後は本体を叩くだけ…

ヲ級がいなかったら気付かぬ内に沈めていた…かもしれない。

…そこにいた艦娘の女の子も気高に振る舞ってはいても足が震えていた…。

あの恐怖は知っている。俺も宇宙で何度も危ない橋を渡ったから…

あんな思いをさせてはいけない…もつと、慎重にやるべきだった…軽率だった。

「…艦娘の皆さん」

「ヲ?」

「すまなかった!!」

「おっ!!」

「なのですか?」

「こりやあ、驚いた!」

「ひえっ!!」

「どうしてですか?」

「でち?」

目の前にいた六人は全員驚いた顔をしていた。これは女の子を驚かせた俺が全面的に悪い…

どれだけ言葉を取り繕おうが許されたものじゃない。大和魂に反する…。
誠意をみせようと思う…。

「まず、確認させてくれ…ケガはしてないか？」

「速きこと島風の如し！全弾避けたから被弾はないよ！」

「被弾ゼロなのです」

「はっはー、まあもとより装甲は薄いからね、小破程度だし、大丈夫だぜ。でもどうしてもつていうなら今度お酒でも奢ってくれればいいよ」

「気合い！入ってますから。」

「ええ、榛名は大丈夫です。」

「怖かったでち…」

水着と水兵服姿の女性だけ異様に疲れたような顔をしていたが概ねケガは紫髪の癖つ毛の女性以外は無かったらしい…。だが逆を言えば一人にケガをさせてしまったという事だ…。

これからは身の振り方をもう少し考えなければいけない…当面の課題は加減を覚えることだな。

「良かった…ヲ級のおかげだよ、助かった。」

「おっ!!」

「ヲ級なのですか!？」

「どういふことだい?」

「あはは…さつすがですねえー」

「ほ…本当に空母のヲ級です…」

「もうやでち!!帰らせてでちい!!」

ヲ級は深海棲艦で彼女たちは艦娘…敵同士つてことになる。だが、そこは関係なく感謝はしてほしいと思う。

仲良くなれるなら共通の敵にでもなれば良いんだろうか? そうすれば話し合い、協力しあえるきつかけ位にはなるだろう?

「…ダメ。ソレヲヤツタラワタシダケジャナク、皆ガ許サナイカラ」

「…分かったよ。えっと…実は考え事をしながら戦闘しちゃったせいで君達を沈めそうになってしまったんだ…」

「「えっ？」」

まあ、そりやあ命の危険に陥らせた相手が不注意だったのが原因と言われれば呆れるだろう…受け入れるが。

それを指摘してくれたのがヲ級と知らせれば関係の改善の目処にはなるか？…なればいいなあ…。

「ヲ級は昨日この海域で俺が宣誓布告した後に色々話してくれたんだ…。艦娘のこと、深海棲艦の事を…だから、俺は知ってしまったからには両者に幸せになつて欲しいって考えてる。」

これは、一重に爆弾発言というものだったと後に身をもって知る事になるのはまた別のはなしである。

だが、六人は気が抜けたようにポカンとしていたとだけ言っておく。

架け橋への第一歩 その式

で、あるからしてコスモ・ゼロとブラックタイガー、それからワケわからん機体が入ってるっていうのはどういう事なの!?

いや、コスモ・ゼロとブラックタイガーは理解出来るんだけどさらに入ってないはずの新しい機体があるっていう事象がそもそも間違いだ!

そこ、一体全体どうなってるの! ハッキリしてくれよ!

ツハ!?

ご無沙汰してます。俺は宇宙船艦ヤマトです。

…この一週間で色々変わったんだよ。

先ずあのあとで起きた事を簡条書き風に説明させてもらおう。

- ・朝起きると何故か子供たちに囲まれています。
- ・ヲ級のおかげで深海棲艦さんの方々との交流する機会がありました
- ・襲われました

・艦娘の方々については一度大きな戦争になりましたが主砲が火を吹いた＋ブラック
タイガー、コスモ・ゼロを30機飛ばしたら終戦。

・提督さんに会いました

・なのです口調のちっちゃい子と友達になりました

・襲われました

・現在俺は幸せです。

と言うように、非常に濃い一週間だったのさ…

ハハハ…まさかぶちギレて波動砲充填率20%で更地を作る羽目になるとは思っ
ていなかったよ。

でも、まあそのお陰で共存の道が作れたなら安い犠牲だと思う。クズ一人の命が蒸発
したが…

で、今はゆっくり出来るからゆったりしながらちよつとずつ教えるよ。

「ヤマトさーん」

「はいはい、ここにいます。で、どうしたんだ？」

「ちよつとしゃがんで欲しいのです！」

「ん？構わないけど、肩車かな？」

「ふふ、内緒なのですよ？チュツ」

「……………」

「…青葉、見ちゃいました…」

「波動砲発射用意！」

「何も見てません！ジョーダンです！青葉まだ死にたくありません！」

「それが遺言で良いのか？」

「あのお…データ消せば許してくれますか？」

「……………」

「ちよっ!?主砲に光が集まってますって!!消えちやう、死んじやう、笑えません!!」

「オールグリーン、波動砲発射」

「ああ…短い人生でした」

「ペアアアアアア!!」

「…あれ、痛くない？」

「ふわあ…キレイなのです」

「…まあ、俺も手加減できるようになったからこの祝いの席に華を咲かせたんだよ。」

「…ふっ」

「お、おい青葉!?!倒れるな!」

「青葉さん!?!青葉さん!!倒れちゃダメなのです!」

深海棲艦、艦娘達鎮守府の皆さんが手を取り合う世界はより一層に輝いて見えた。それはまるで俺が地球に帰還したあの日のように…色付き、世界が大きく前進した日となりましょう。

騒がしい喧騒の中にいる俺は今、とても幸せです。

「―ツテイウ夢ヲ見タンダ」

「俺が主人公の夢だったね。それと随分と長かったね。」

「ナンデワタシノ夢ナノニ出番ガナカッタノカ問イ質シテヤル」

「そ…そうか…。って、その不憫な青葉って誰なんだ？」

何か黒い靄がクラゲの口から排出されてるのをみて不味いと感じた俺は一旦会話を途切れさせ、会話の転換を図った。

結果から言えば成功。だが、お通夜みたいな雰囲気にはチェンジされてしまった…。

「ヤマト…世ノ中ニハモット不憫ナ艦娘モイル。名前ハ不幸サン」

「不幸じゃないですよ!?!それ絶対扶桑さんの事だよね!?!」

「ドウシタ、イキナリアラワレテ」

「放置されただけでずうっとここで待機させられてたんだけど!!」

「ま…まあ、比叡姉さん落ち着いて」

うん、ヲ級が話してる間ずっと律儀にそこで一言も話さずに待っていてくれたんだよね。決して空気が薄いからじゃないんだよね?比叡さんが憤るのを抑える子が比叡さんの妹らしい。格好も同じで武装?が同じのだった。

「ヲ級の話面白かったよ!!」

「アリガトウ、シマカゼ」

「イエエーイ!!」

「ヲオ…イエーイ!」

「島風ちゃんとヲ級ちゃんは仲良しなのです。電も仲良くしたいのです」

「おっ!!」「ヲッ!!」「なのです!!」

ちみつ子sは何かの儀式なのか口癖?らしきものを言い合って互いに絆を深めていくし…

だが、今の混沌とした状況では一番ほのぼのとした風景と言えるでしょうね…。

「ハハハ…良いさ。帰って来なかったあの子を弔わせてもらうからさあ…」

「泣き上戸!?!…ああ…艦載機についてか…落としてすまなかった」

「全く…こんな日は飲まなきややってられないぜ!一緒に飲もう、ヤマト!」

「今度は絡み酒…誰かこの酔いどれ女性を止めてくれええー!」

「でち。」

「ふぎやあ!?!」

「…あ、ありがとう。助かったよ」

「…気安く喋りかけんなでち」

「この子も酔ってらっしやるう!?!」

「みたいに飲んだ暮れるは唯一小破した紫ツンツンさん。長いので紹介があるまでは小破さんとよぶ事にする。」

さつきまでオドオドしてた筈の水兵水着さんは完全に酔ってるのか目が死んでいた。それこそいつだか見た何処かの宇宙人のような光があるのかどうか疑わしい瞳だった。

「…あ、榛名さん。あは、ははは…俺の癒しは貴方だけだ。」

「え、えええー!!?!?そ、そんな…榛名はまだ…でも、そんな事言われちゃうと…」

「えつと?榛名さーん、榛名さあん」

「子供は三人が良いです!」

「いきなり何があつた!?!」

「さあ、あちらで一発…」

榛名さん比叡さんの妹（向こうで比叡さんがそう漏らしていたのを聞いた）はこういう会話に極端に弱いらしく暴走していた。目がグルグル巻きになる程度には混乱して

いたんだと思う。

みた感じは奥ゆかしそだが混乱で積極的過ぎる変態一歩手前になっている。
なんだろう…地球が病んでるってこういう事だったのかなあ…

「ていつ!!」

「きやつ」

「あ…比叡さん。もう、もういいんです…何も言いません…」

「や、ヤマトさん!」

俺の心も折れてしまったらしくもう立ち上がりがりたくなかった。

昨日までの俺よ…グツバイ。

架け橋への第一歩 その参

やあー皆。ヤマトだよ♪

今回は真面目にやろう。だつて進んでなかったんだもん。気が付けば日が傾き出そうとしてるし…本当に笑えん。

で、ヲ級についても俺だからで納得しちゃった面々がいたのでその事についての説明は要らないらしい。

解せぬ…。

「…まあ、つてわけで一人ここの海域に気付けば落ちてたつて訳なんだけどそこで宣告布告でああなつたつて訳なんだよ。で、俺はそのあとヲ級にあつて会話をして今の両者の現状を把握した。そこから更にこうして色々教えてもらうようになってから試しに俺の艦載機のこれ、ブラックタイガーを射出したつてわけになる」

「…それで現在にいたると」

「どう思いますか？ 比叡姉さん」

「嘘は…言つてないと思うわ。だけど…」

「良いと思うのです!!電はその停戦協定を結ぶべきと考えるのです!」

「私も賛成かなあ〜でも、実際は難しいと思うよ?」

「:戦わないで済む、なんていい言葉なんでちか!今すぐ結んでほしいでち!!」

「島風も賛成。だけど鎮守府はあくまで軍だよ?提督や元帥クラスの人達がOKしないとダメなんだよね」

「はい:話してみれば深海棲艦さんもこうして普通に生きてるんだって分かりましたし:出来れば無駄な被害はだしたくありませんよね:。」

「:だから、これは今:ここでは決められないわ。鎮守府でも皆に聞いてみますけど芳しい結果は出せるかどうか怪しいですからね:でも、ヤマトさんがここで何をしようとしているのかだけは理解しました。

艦娘としてその平和へ向けての志は見習えます。お互いに気合い!入れて頑張りましょう!」

「ありがとう、比叡さん:あ、なら自己紹介しませんか?」

仲良くしようって事で:知ってる通り宇宙戦艦のヤマトです。」

「巡洋戦艦、比叡です!よろしく」

「比叡姉さんの姉妹艦金剛型の榛名です。ふつつかものですがよろしくお願いしますね」

「おっ!! 駆逐艦島風です。速さには誰にも…負けたくなかったです…」

「暁型駆逐艦の電なのです。よろしくなのです!」

「商船改造空母、隼鷹です。よつろしくう」

「伊五十八、ゴーヤってみんなには呼ばれてるでち。是非ともこの戦いを止めさせましよう…でち。」

「深海棲艦、空母ヲ級。ヤマトノ許嫁デス。」

「!?!」

「ヲツヲツヲ、ブラックジョーク。」

ヲ級はどれくらい本気だったのか分からないがあの無表情でのブラックジョークとか笑えない…。ましてや初めてあった人だと表情から読み取れないだろうから…あーうん。

「ヤマト発進!!」

「…現実逃避ハ良クナイ」

「チクシヨウ!!」

エンジンをバレないように静かに稼働したはずなのにヲ級のクラゲに捕まっていた。そう、あのプニプニ感触手だよ。絡めとられるとでも言うのか、最早これは被り物じゃなく生き物だろうというツツコミは心の奥に留めるだけだった…。

「はわわわわ!!お二人とも近いのです…」

「ふう〜ん…なるほどねえー」

「こ、こら隼鷹興味深そうにジロジロみるものではありませんよ」

「案外戦争のない世界は近そうでち！」

「さっきの榛名への発言は何だったんですか！妹を悲しませたら怒るよ！」

「島風も〜」

「二人もくつついたら流石に…」

ボチャン…

ええ、そりやまあ…アイデンティティ的に只の戦艦になつちやうから常に宙に浮くようにしてたよ。でもいきなり二人ものし掛かられたら落ちるよ…

ヲ級も冗談半分真面目半分でやってるもんだから叱りづらいし、はあ…ビツシヨリだ

…

「ヤマトさん!？」

「島風ちゃん大丈夫なのですか？」

「綺麗に落つこちたでち」

「そんなこと言ってる場合じゃないんじゃないかい？」

「だ、大丈夫だ…島風もヲ級も…」

「ご、ごめんなさい…」

「あはは、まあいきなり飛び付くのは島風が危ないから気をつけような？」

「うん！」

落ち込みそうになってた島風を慌てて撫でる。：現在進行系でヲ級のクラゲだけは張り付いてる為に格好はつかないがそれでも悪い気はしないのか素直に撫でられる島風。

駆逐艦は素直なのが一番だ。純粹に、真つ直ぐな所が可愛いと思う。

「で、ヲ級はいつまでコレくっ付けてるんだ？」

「逃ゲヨウトシナケレバソモソモクツツカナカッタ。」

「はい…全くもってその通りです…」

「ヨロシイ」

俺とヲ級のやり取りが面白かったのか比叡さん方は笑っていた。

それにつられるように俺とヲ級も二人で顔を見合わせると一緒に笑いあうのだった。

「では、私達はそろそろ鎮守府に戻りますね」

「そうですか…ま、俺は常にここにいますから暇なときにでも話しましょう。鎮守府でヲ級と会うのは出来なくてもここでなら敵である事も忘れて一緒にいられますから。」

「ヲっ!! マタ会オウ。アノ話モ提督ニ進言シテクレテルト嬉シイ」

「勿論です! ヤマトさんがイイ人だつて分かったのでお姉さまや皆に話して賛成の仲間を増やしてみせます!」

「島風も駆逐艦の友達達に話してくるよ!! ヲ級と友達だつて!!」

「島風…アリガトウ」

「バイバーイ」

「潜水艦子達もきつと喜ぶでち! 戦争反対! オリヨクルは嫌!」

「うん、またおいで。ゴーヤとおんなじ考えの子が増えればきつと戦争は無くなる筈だから」

「絶対でち！約束でち。じゃあね〜」

「ま、これで永遠の別れつて訳でもないし今度は飛鷹もつれてくるから一緒にお酒でも飲もうよ〜」

「あんまり羽目外しすぎるなよ？愚痴程度なら幾らでも聞いてやるから」

「あんがとよ〜」

「電ももう行くのです。雷ちゃんや暁ちゃん達にも仲直りするよういつてみるのです。

電の夢は平和で誰も傷付かないことなのです。だから絶対にあの話を実行してみせるのです！」

「うん。お互いに頑張ろうな電。俺もユキカゼに誓ったんだ。きつと幸せにしてみせるつて…だから難しくて苦しくて諦めない。あの時とおんなじように…」

「ふわぁー…はいなのです！」

「…榛名はヤマトさんのことを全然知りません。そしてヲ級ちゃんや深海棲艦の皆さんも…でも今日一日話して分かりました。きつと、知らないから怖い。戦うしかないつて考えてる子もいっぱいいるはずなんです。

救つてあげましょう。榛名もヤマトさんに救つてもらつたように、皆の平和のために

「頑張ります!」

「これがきつかけになるなら俺は幾らでも手を貸すから。俺は深海棲艦さんの方を説得してみるから、榛名さんは鎮守府をお願いします。」

「…榛名」

「え?」

「榛名って呼んでください。」

一瞬何を言っているのか分からなかったが彼女なりの決意がその強い瞳から見とれる。

きつと、対等な立場で、手を繋いでいたいという事なんだと思う。…俺は架け橋になる大きな一步を踏み出せたんだって思ったら嬉しかった。人を運ぶだけだった俺が平和を築く一步になれたんだから。

「…榛名、頑張ろう。」

「ええ!!」

頑張れじゃなく、頑張ろう。俺はまだまだ進んでいく。止まらない。

それが俺の使命であり、願いだから

これは夜戦ですかね?…奇襲じゃないかなあ

…ZZZZ

ううーん…そこは駄目…痛い…那珂ちゃんつて誰やねん。知らない子ですね。

「何でそんな事言うのお!!」

「ビクツ!!」

え、何?何が起こった?敵襲か!?

おかしい、敵意もないから寝てた筈だ…まさかそれすら気取られずにここまで接近したというのか!?!貴様…もしやガミラス帝国の手先か!!

ガシャン

「ヒイイー!?!那珂ちゃんのせいなの!?!」

「我が前に敵はなし!あるのは的だけだ」

「わあー待った待った!敵じゃないよ!!寝ぼけないで起きてえ〜…」

その声を聞いて何か異変に気付いた。よし、落ち着こう。状況を冷静に判断できない事は死を招く。以前沖田艦長は大体常に冷静に対処してたはずだ…。

うむ、俺は数日前にひょっこり此処に存在してたヤマトとして意識のある生物。で、俺の存在また宇宙での出来事は無かったことになっている。

仮定をたてるなれば、同じ地球だが違う世界…だろうか。もしそうなら現実は小説より奇なりつてものだろう…。

だが、現に俺が人の形をしている事が証拠では無かろうか？…謎は深まるばかりである…。

なら、今の俺は海の上に居て寝ていた事になるな…。で、声の主は島風に似ていたよ
うな気もするけど違うな。

なら…あ、アイマスクしてたらなんも見えないのは当たり前だった。
構えた砲身そのままに対閃光防御用、ゴーグル（仮）を頭に持っていく。

黒く覆われていた視界はだんだんと鮮明になっていく。まっ暗になれていて明るい星たちの光が眩しく、直ぐにはその声の主を見ることは出来なかったがもやっとした像はニョロニョロしてた。

…訂正、手を上げて涙目になっていた。

「…こんな状況で悪いが先ずは自己紹介をしよう。俺はヤマトだ。」

「か、艦隊のアイドルの那珂ちゃん…です。」

「では、どうしてこんな時間にここへ？」

「明るい時間だと皆にバレちゃうから…」

その事を聞き、視界に皺が寄るのを感じた。

…やっぱり軍隊ともなると一筋縄じゃいかないという事か。勝手な行動は軍法ものだが、己の危機に対して過敏になる姿勢は敵ながら天晴れでもある。正しい判断でもある。

「気にいらなかったって事…なのか？」

「え、い…いきなり言い当てられた!？」

「詳しくは話さなくても分かる。今の見た目はこれでも、俺は歴戦の艦だ。」

「へえ、そうなんだあ。それは知らなかった。」

やはりいきなり現れた俺があんな不遜な物言いをすれば反感を買うのは自然の摂理

と同じ、当たり前的事。彼女はそんな身勝手な行動が気に入らなかつたのだろう。たぶん、それ故にこうして深夜の時間に暗殺を企てた。

そんな所が妥当だろう…。

戦いが好きな人間や、規律を遵じる軍人、彼らには俺が邪魔な存在に映つたのだろう。

「…いきなり現れた上に要らぬ刺激を与えた。無為な行動だつたと反省してる。だから互いに話して蟠りを無くそう…。互いに知れば出来た誤解という痼は直せる。歩み寄る精神が恨みや復習を切り止めるきっかけになる…そう、俺は考えてる。」

「へえ…なんか凄いい！那珂ちゃん難しいことはあんまり分かんないけど凄いいカッコいい事いつてるつてことは分かるよ。流石歴戦の艦!!伝説の艦!」

「…伝説の艦だなんて大それたものじゃないさ。今は皆と同じ、考え、間違い、壁にぶつかる存在だよ。だけどそれでも進み続け、もがき続ける姿勢は俺は大好きなんだ。…人間は過ちに気付いたとき直す事ができる。間違いを認め、突き進む糧にすることができ

る。

俺はそんな皆の未来を守る手伝いをしただけに過ぎないんだ。」

「…その気持ち、なんだか分かる気がする。」

「あはは、そりやそうさ。君たちは俺と同じ、皆の期待と希望をその身に抱えて守る方々

なんだから。」

「うん。艦隊のアイドルの名は伊達じゃないんだから!」

「ああ。応援してるよ那珂。」

「ふえ!?!ちよつ、アイドルは恋愛禁止なんだよお…なのにあんな顔されたら…」

今の那珂は凄い生き生きしてるように見えた。出会って間もない俺達だけど、ヤマトとしてそして戦い抜いてきた者として大切な志は伝える事が出来たような気がする。

若い子らはこれからもきつと進んでいく。

どんなに辛い壁にぶつかっても乗り越えていくだけの力を持っている。

嬉しくなるのと同時に誇らしい。

俺も沖田館長も、担う事になる全ての者達の未来を救う事が出来たんだ…

「…ヤマトは…ヤマトはこれからどうするの?」

「ん?もう用事は良いのか?」

「目を見れば全部分かってる癖にちよつと意地悪だよお。」

「ごめんごめん。そうだね、お詫びにしつかり言うさ。」

那珂の瞳は濁っていない。綺麗で透き通るような純心な瞳で俺を見ている。間違いをただしたのだろう。

「俺はこの世界を……いや、皆が笑っていられる場所を守りたいんだ。それはずっと変わらない俺の心だ。」

深海棲艦の人、艦娘の人、……皆が皆生きている。考え、もがき、一生懸命に各々の幸せに向かつて苦しんでるんだ。俺はそれを救いたい。その手伝いをしたいんだ……。だから、互いによく知りもしないで傷付け合うこの悲しい戦いに終止符を打つ。先ずは対話させることで両者にとつての架け橋になればいいなって考えてるよ」

「うんうん。ヤマトなら出来るよ！皆笑っていられるつてとつても、とおつても良いことだよ♪」

「だな。だから、那珂はずつと皆の笑顔の象徴、アイドルで居てくれ。」
「まっかされた！より一層頑張つていくよー!!」

アイドル、それは見ている物を笑顔にさせる人の事。

形は違えど、俺と同じ夢を掲げる凄い人達。俺は言葉にしなかつたが、笑顔にそして元氣づけるその姿は眩しく美しいって思っている。尊敬すべき人だと思っているんだ。

「…頑張つて!」

「うん、頑張る! だからヤマトは私の横 特等席で私の姿、見ててね♪」

「ああ!」

この世界も地球。守るべきもの。俺は本当に色付いたあの世界を救えたんだっていう実感が沸いて泣きそうになったのだった。

深海の生態系、彼女らの祈り

今俺はなんとなくぼんやりしている。

たしか日本に雪に関する歌で「犬は喜び庭駆け回る」というものがあつたつけなくとか考えていた。

因みに俺は猫と一緒に炬燵でヌクヌクしたい派の艦です。

元気はある。だが、おこたの魔力はそれすらを上回る…というのが持論なんだ。

波動砲一回分のエネルギーと炬燵で交換したいぐらいだよ。

…で、回りに回って誤魔化したけどまた起きたらなんかいた。

昨日は夜に叩き起こされ、今度は邪魔されなかつた代わりに目の前に正座（おすわり）待機されてた。

一瞬寝惚けてるのかと思つたが違つた。さらに寝起きの人がいるのに前で暴れるのもやめてほしい。…いや、暴れるっていうのもアレだけど走り回ってる。

そして何匹かの一匹が俺の膝に手を乗せて遊べどもいうかのような感じで見てる。

走り回る黒い奴ら（ゴキブリにあらず）は四匹たぶん駆逐艦

見てるのが一匹と俺と同じように地平線を見てたのが二匹 計三匹は軽巡洋艦

そして後ろでドドドドドとか口で言ってる変な立ち方をしてるのが一人。

最後の一人は唯一で人の形をしていたがなんか個人的に変な人には関わりたくないのが本音だ。

「よーし、じゃあ行くぞ？そりゃあー！ー！！」

たまたま見つけた流木を全力で太陽の方向に向けてぶん投げた。

あーら不思議、流木は星になりました。いや、実際はスコープで見てもキツイぐらいに見えない小ささになって遠くに飛ばされたってだけなんだけどな。

走り回ってた四匹は知能も犬並みなのか追いかけて行っちゃった。そして見つめた一匹も数瞬の戸惑いを見せながらも駆逐艦達の後ろを追いかけるようにあっちの方に行った。

残った軽巡二匹はお茶でも飲んで日向にいそうなお祖父ちゃん位の無関心を突き通している。

いわば、敢えて無視したはずなのに結果二人（お祖父ちゃん二名はどうしようもないので数に入れない）の空間が出来てしまう。

いじける一人は無視された事でガツカリしていた（みたい）だったが、その事によ

やく気付いたみたいで生き生きしながら話しかけようとしていた。

「ヲ級、カラキイタ…ヤマト」

「あー、ヲ級関係か。なら自己紹介は要らなさそうだけど一応ヤマトです。」

「ヲ級。重武装巡洋艦 コチラハタタカウイシハ…ナイ」

「…それは深海棲艦全体の決断？それともヲ級だけの意見か？」

「ワタシ ト ワタシ以下ノ全体の意見。」

総じて深海棲艦の方々は皆、ポーカーフェイスなのだろうか？いや、声のトーンの微妙な上がり下がりですべて全く分からない訳ではないのだが、それでも少し分かりづらいのは否めない。

ヲ級はフンスっ!!とでも言えば良いのか自信満々に返してきたのだが、顔色はあんまり動いていない…てか仮面みたいなのがついてて見えない。

「以下？位付けがあるのか？だとしたら群れみたいな感じって事で間違いない？」

「アアソウダ。位ワケ ハ 級デ判断サレル。シタカラジュンニ、イ ロ ハ ニ ノ 順番デ分ケラレル。ソレカラ番外 トデモ言エバイイノカ、『鬼』『姫』ナドモイル。後

ハ ソノ級ノ中デ、フラグシップトイウ特殊ナ存在 モ発見サレ、タ」

「そういう所は艦娘とは違うつて事か。より生物らしく生きるつて言えば良いのか、純粹な縦社会なんだな。」

「ソレガ 全テダツタ」

子級は落ち着いた様子で諦めたような顔をしていた。本当にそれが全てであるように。

だが、何か違和感を感じる…何か大切な何かを見過ごしたような そんな小さな違和感。…青色に光る瞳は揺れている。何かに期待するように、新しい玩具を貰った子供のようなそんな無邪気な揺らぎだった。

「ワタシタチ ハ チカラデ 続ベルノガ 無言 ノ 掟。強者ハ正義。ダカラチカラ
ニハ集マル。今ノヨウニ」

「…？…今？」

「…気付イテナカッタノカ？ 駆逐ハ単純ニ 気ニ入ツタノダロウガ、ワタシヤ、ヲ級、人ノ形ヲシテル者 ハ シツカリシタ意識ヲモツテ イル。ヤマトニ引キ寄ヨセラレルノハソノ大キナチカラガ原因。」

「へえく…え？じゃあ、これからはチ級やヲ級みたいな賛成派も寄ってくれば、逆に反対派の戦闘狂な深海棲艦さん方も引き寄せるって事か!？」

「チカラハ言ツテシマエバ 光。光に寄ルノ 生物ノ摂理。」

「…問題は山積みってことかなあ。戦闘にならなきゃ良いけど」

「フフ、頑張レ。下ノ者ニチカラヲ示スコト 王ノ定メ」

…王!?

少し待て、王ってなんだ!?!初耳だし、戦艦が王様って変じゃないか?考えすぎならいいが言い回しが何か外堀を埋められてピンチになったときの感覚に近いぞ!?!

「フフ、ジョーク。反応イイッテイウ、ヲ級ノ話ヲキイテ 試サセテ貰ツタ。ワカラナイ気持チダ ガ、ナガラク忘レテタ物ガ甦ルヨウナ…ソナ気持チニサセテクレル。」

「…困らせて楽しむのは止めてくれ。心臓に…があるかは分からないが悪いんだよ。」

「フフ、イヤ♪」

「…つたく」

今までで一番嬉しそうに言うもんだからこつちとしても強く言えないだろうが…。

そういう所は反則だと思っ：

遠くから駆逐の：一つ目の奴が俺が投げたと思われる流木（波に衝突したのか幾分か小さくなってる）をくわえて泳いできているのが視界の端に映った。

「：ワタシタチ ハ 弱イ。戦イデハ ソレコソヤラレルダケ：ダツタ。デモ、ヤマトハソレ以外ノ道 オシエテクレタ。幸セニシテクレルツテイツタ：私達は信じていい？」

声は相変わらず片言。だけど、流暢に聞こえてくる：一つ一つの言葉が染み込んでくるように：広がる。

信じていいのか：幸せにしてくれるか。

「只やられるだけなんて、そんなかなしい事言うな。

そんな未来は来ない。来たとしても俺が打ち砕く：。戦いは奪うものだ：だが、守るための争いでもあるんだ。

戦いで、誰も傷付かないで住む世界を作ろう。誰もが笑える、誰もが救われる、そして誰もが幸せになる権利があるんだ。だから、今は俺を信じてくれ」

俺は、只不幸と思つてゐる人に幸せへの渴望を忘れてほしくない。

求め、足掻き、手を伸ばす…それが生きることだつて信じてゐる。それを忘れてしまえばそれは生きる意味を見失ない、色は失われてしまうようなきがするんだ…。かつてがそうであつたように。

「共ニイルコト ガ 出来ル事ヲワタシハ誇リニ思ウ。

シンジテルカラナ…ヤマト」

「おう、任された。」

足元で流木をくわえる駆逐が誉めて誉めてと見上げている。それが微笑ましくて持ち上げ、胸に抱く。

そして頭を撫でる。

なし崩し的に流木追いかけた子らが駆逐を羨み、次々にくつついて撫でるように言ってくる。それを苦笑しながらも撫でまくつた。

少し疲れたが、これも良いなと思えた。

俺はそんな中ち級と共に、いつか世界が平和になる事を祈り傾いていく太陽を眺めた

の
だ
っ
た。
。

月の灯りと星の瞬き

今日は楽しかった。

チ級には弄られたが、イ級達駆逐と仲良くなり遊んだ。

ホ級と俺で横になって日向ぼっこして寝てたり、ヘ級とト級と水平線上を眺めてボーツしたり、チ級が何処から持ってきたのかお酒を一杯だけ飲み、駆逐艦に揉みくちゃにされる。

そんな感じで夜を迎えれば、その喧騒も急に静かになる。

皆と別れた途端に名残惜しくなってしまうのは楽しかったが故だろう。

「あー、全くもって月が綺麗だね」

「なっなあ!?!」

「はい?」

月は煌々と光る満月。海の上は星や月以外の光はないため、より一層と光輝いて水面に反射させる。

辺りは真つ暗で何も見えなく、只只星が静かにその光を放ち続けるだけだった。

…この声の主は一体誰なんだろうか？

昨日に引き続き那珂がやってきたのかもしれない。丁度ほんやりと見える輪郭から察するに那珂位の背丈だった。

「(ハハ)、(ハ)…こんばんわ！となり大丈夫!!」

「なにをそんなに焦ってるんだ？今という一瞬は刻々と過ぎているが、月は直ぐには逃げない。落ち着いて心を静かにして見ればまたその情緒を深く感じれる。

…まあ、好きにしたらいんじゃないかな」

「そ、そうか…失礼するな？」

「…いや、確かに隣良いとは言ったが近くないか？」

「お前の見る月と同じ月が見たいんだ…。」

「…そう。」

うん…近い。どれくらいかという肩と肩が触れ合ってる。触れ合う位近いじゃないくてぶつかつちやつてる。意識したら余計恥ずかしくなってきたぞ…。心なしか、いい匂いが…この話は止めよう。変態みたいじゃないか、婦女子に対してこの愚行は我が大

和魂に反する。けして照れくさ過ぎて顔が真っ赤になってるのを隠したいという訳でもないからな

「…確かに綺麗な月だ。星が燦々と輝くのはまた一風違う落ち着いた光は趣があつて良いものだ」

「…いや、そうなんだがなんでそんなに早口で捲し立てるような喋りなんだ？」

「恥ずかしいなら離れようよ。俺だつて何も感じない訳じゃないんだぞ？」

「ふふふ、そつか…。」

「ああ。俺だつてここに来て幾らか経つが感傷的な気分になりたい時もあれば騒ぎたい時だつてある。俺は波動砲を撃つただけだけで特に何かしたわけでもない。一緒にするのはおこがましいかもしれないが君達と同じ人だよ。」

色々やらかして誤魔化しても抱えている物が軽くなる訳じゃないさ。全てを投げ出して楽になりたいと思つて思う。だが、放棄したくも無いと思つてしまう自分がいる。誰かの不幸を背負い込んででも救いたいなつて…結局人つていうのは傲慢な生き物なのかもしれないなあ。」

「…なんか意外だよ。貴方みたいになんでもできる人つて理解者がいないからこそ孤独になつていくつて思つてた。孤独つていうのもなんか違うような気もするけど、そうい

う感じって孤高?とも言い替えられるのかな?

自分から茨の道に進んで成功を納めてるんだって勝手に考えてた。」

「そんな大層な物じゃないんだよ。結局は自分が好きな物を突き詰めていったが故に無我夢中で突っ込んでいって、気付いたら一人になってるっていうのが真実なんじゃないかな?」

バカと天才は紙一重ってね。愚か者は嫌いだけど…俺は愚直で真っ直ぐなバカな奴は大好きなんだ。」

「バカが好き…」

「バカって貶す時に使われる言葉だけど一つの事に一生懸命になれて周りが見えなくなる位に打ち込める人の事をいう誉め言葉でも有るんだよ。…まあ頭が悪い人をバカというけど違うことをやらせたときに天才的な位に熱中する人ばかりで、一緒にいると楽しいんだ。才能のない奴なんていない。きつと、それを気付けないだけで自分にあつた物があるんだ。それに気付けるかどうかは分からないけどな。」

…長くなつたけど俺が言いたいの、バカっていうのはカッコいい言葉ってことだ
!」

あれ、そういうばなんでこんな会話になつちやつたんだろう?確か、俺が波動砲撃つ

て後悔してたつてぶっちゃけ話をしたただけなのになあ……。なんでバカと天才の話になつてたんだろう……。話すりかわつちやつてるじゃん！

隣に座る彼女はそんな話を真面目に聞いてくれている。だが饒舌になつてゐる事から察するに一杯だけしか飲んでないのに案外酔いが回つてるのかなあ……。つて感じてる。正直隣の子にも悪いなつて思うよ？でも真剣に聞いてくれるから嬉しくなつちやつて思はず語つちやつたつて訳。

「……俺が話すだけで悪かつたな。月が綺麗なんだ、嫌なことや些細なことなんて忘れるに限る！」

「だね♪私も鎮守府内でよくバカにされるんだけど、貴方の話を聞いて良かった。ここに来て正解だった。

綺麗な月も見れて、悩みも丸つと解決！貴方にも出会えた。」

「ううん？ま、君がこうして良かったつて思えるなら話して良かったよ。」

隣の少女は嬉しそつだつた。微かな星の瞬きで笑つてゐるのがうつすらと見えた。

俺が彼女の心を救つてあげられたのならそれで全部良いんだよ。細かいことは気にしないに限る！

あー、こんな時は一先ずお酒がのみたいねえ〜

「君って言うの止めない？ 私は川内。川内型の長女姉で那珂の姉よ、よろしく」

「ヤマトだ、そうか…那珂のお姉さんだったのか。うん、那珂姉妹っていうだけあって綺麗な笑顔だ」

「も、もう…茶化さないで！」

「はは、すまない。」

「ふ、ふんつだ。…でも許してあげる。」

「こんなに素晴らしいものを見せてくれたんだもの。たぶん私は一生この日の月をわすれないかな。…だって、ヤマトにプロポーズされた月だもん」

「……………？え、あ…うん、そうか」

「…もう、私は鎮守府に帰るけど貴方も気を付けてね♪」

「…バイバイ？」

川内は行ってしまふ…。

あれは何て言う爆弾だ？それとも魚雷？プロポーズってなんの事だ？えつと…俺が誰にプロポーズ？

川内？ん、なんで？

よくわからないけど、混乱してる頭では何を考えても無駄だろう。今日はもう寝よう。きつと、疲れてるんだろう。

明日考えよう…うん。

???さんの（非）日常1

side???

え、なにこれ？

何がどうなってるんだよ…

電あー!!ちよつと、電ああー!!

heip me!!

居ないならこの際誰でもいい！誰かあー！

「うっさいです。少し静かにしてもらえませんか？今いつたい何時だと思ってるんですか？いい加減にしないと島流しにしますよ」

「ちよ、不知火さん!?僕、仮にも上司。」

「なるほど、パワハラですか…。」

「なんでっ!？」

不知火がすっごいご機嫌が斜めです。何故ですか？天国のおばあちゃん教えてくだ

さし…。

「…貴方のお婆様はこの前元気に長門さんと腕相撲して勝つてたじゃないですか」

「え!!なにそれ初耳なんだけど!!」

「本当に静かにしないと流しますよ」

「それだけで流刑!」

「ツチ!!」

「すいませんでした!!」

皆さん、提督である僕が何故か土下座させられています…。最近妙に例の爆弾ことヤマトについて多大な噂が流れはじめて胃が荒れに荒れ、2日で三キロも痩せこけた僕はなんやかんやで鎮守府での力関係が最下層になりつつあります。

頼みの綱の秘書艦さんの電は何故か部屋から出てこない。霧島も最近姉とかが気になる人が出来たとかでそっちに付きつきりで扱いが雑になってきてるし、目の前の方は現在ゴミを見るかのような目で見落…見下していますし…。

不機嫌を隠そうともせず殺気立っていて、今にも僕という存在の命の灯火が消えかけてます…。

もうやだ……。おばあちゃんは人外に足を突っ込んで、問題を上官に報告すればやつれた様子で君が対処するんだとかいって煙を巻いて逃げやがった。元帥に相談に行けば疲れてるんだよねって優しい顔して無言で胃薬とか睡眠薬とか持たせるんだもん……。僕頑張ってるよね!?!なのに扱いは清掃係と変わらないパシられっぷり……。

「アハハ……泣いて良いかな、僕」

「何ですか、藪から棒に……気持ち悪いので止めてください。」

「……………」

るーるー

泣いてなんかないやい！これは心の汗なんだ!!

部下に気持ち悪いって言われたー、しかも真顔で!!冗談とかそんな雰囲気じゃなくてマジな奴だよ……これ……

「何か不知火に落ち度でも?」

「もうやー!!お仕事したくない!おうち帰るうー!」

「なるほど……新米である貴方がボイコットですか提督。なら私にも考えがあります。え

え、準備は既に整っています。是非とも船に揺られて、好きなかだけ旅に出て癒して来てください。何、大丈夫です。鎮守府内のことは私や妹達、霧島さんや大淀さんで回しますので。」

考えがあるって言われた瞬間ボコボコにされてフン縛って中庭の木に吊るされるビジョンがよぎったが、そんなことなかった。旅に出て良い？それも手配済み？癒してほしい：うわーん。嬉しい！嬉しい。

落として持ち上げるってこういう事なんだ！感謝で心がいっぱいです。

「…え!?そんなに僕の事を親身に考えてくれたの!?!」

「…親身かどうかは分からないですけど、最近よく考えていたのは本当ですよ!」

「…うんうん。僕は良い部下を持った…幸福者だよお」

「で、どうするんですか?提督自信が決めなくては行けないので、覚悟が決まり次第お願いします。…私の気が変わる前でしたら構いません。」

「…うん。お言葉に甘えさせてもらおうよお不知火♪」

「そうですか…では、これをお願いします。」

一瞬親の仇を見るような険しい顔をしたような気もしなくなっても無いんだけど見直した時には何時ももの無表情になってたしきつと気のせいだよね！

それで渡されたものは白い襷だった。

「これは…？」

「はい、サプライズなので見えないように目を覆って隠して下さい。とって良いと言いますのでその時に外して下さい。」

「なんか本格的だね…。うん、ワクワクするよ！」

「そうですか…。ではどうぞ。」

そう言われた僕は渡された襷で目を覆い、更にぎゅつと目を閉じる。より楽しむために耳も閉じておく。と言ってもそんな芸当人間である僕には出来ないんだけどね♪でもそれぐらいに聴覚からの伝達情報をシャットアウトしたんだ。

…イラッ

そんな擬音が聞こえたような気がしたけど気のせいだよ、きつと♪

手を引かれて、引つ張るようにドンドン進んでいく。全く聞かないようにしてたんだけどさつきより一層に潮の香りが鼻の奥をツーンとさせる。ザザーなんていう波の音も聞こえる。

きつと、豪華なクルージングとかじゃないかな？

まだ日が出てくる前の早朝で、早い時間だけど船を態々出してくれるなんて…手間がかかったんだろうなあ

さつき見たまるで木が飛んできて刺さったみたいなお跡なんてどうでも良くなるね！

そして不知火に前へ三步ほどお願いしますと言われ、指示に従う。

足元が揺れているのを考えるに此処は港で、やつと船に乗り込んだという事でしょう。ええ、心が踊るようです。さつきまでの嫌なこと全部が水に洗い流されたようです。

「…ありがとうございます、不知火。」

「いえ、私は実行しただけに過ぎませんから！計画してくれたのはなんと摩耶さんです。」

「ええー!!あの摩耶が!!いつもボロクソ言ってくるからてつきり嫌われてると思ってただけどー！」

「…だからじゃないですか？」

不知火の言葉に驚きが隠せないよ……。悪口だけで敵棲艦を沈められそうなあの摩耶が私の為に計画を立ててくれるなんて……

ジーンって来たよ！もう、纏着けてるけど涙が出るよ！

「あ、何か動いた気がする！どうなの、不知火？」

「ええ、動き始めました。……もう少しだけ外さないで下さいね？」

「うん、まだ何かサブライズが在るんだよね♪」

「ええ、勿論です。大切な大切なのが……。フッフッフ……」

自信満々だ、凄い！何時もはいつやられるかってビクビクしてたけど仲間に取り入れるとこんなにも心強いなんて！流石不知火だよ！！

「……もうそろそろですね。ではどうぞ。」

「分かったよ！ふんふふーん♪って、え!?!」

「では、どうぞ好きなだけ揺られて下さいね♪」

ちよ、えええー！?!何で？今までで一番の笑顔だよ!?!確かに船だよ？船だけど此は

どうなの!?

摩耶が計画して不知火が実行したってこういうことだったのぉー!!? 確かにあれだけ普段からちよんけちよん(死語)に悪口言つて、嫌つてたらそりやこんなぶつ飛んだ計画もたてるよ!

疑いの余地すらなかつたよ。でも誰がこんなの予測できるんだよぉー!!?!

「…大丈夫ですよ提督。流してるこの海域は戦闘が一切禁止してるあの提督さんが毛嫌いしてるあの魔の海域ですから♪それと秘書艦の電ですけど、これやるって言ったらヤマトさんよろしくなのです…とおっしゃってましたよ」

「え、電もグルなの!?!僕ってその実艦娘の皆様に嫌われてた!?!」

「何を今さらですか。アレだけセクハラしておいて憲兵さんにつき出されないのが不思議な位です。…チツ、使えねえな。」

「ちよぉー!!? 不知火さん!?!今女性がしちやいけない顔をなさってましたよ!?!」

「…不知火に落ち度でも?」

「不知火つてその言葉で全て済むと思つてない!?!」

「やかましいです。…もし帰ればその時はヤマトさんについての話も聞かせてくださいね」

「え、今もし帰れたらっていった!?」

そう言つて踵を返す不知火。え、待つて!?冗談デスヨネ?これ冗談ですよねえ!!!

ちよ、宿舎に戻ろうとしないでええー!!!!全て僕が悪かつたですうー!!!!なので返つてきてえ。c o m e b a c k ー!!

「その時たま、流暢な英語を言うこともイラつてします。」
「それだけ!」

振り替へつてみれば冗談でよかつたとホツとしたらそんな御無体な事を言われても興味がないとでも言うかのように後ろ髪を引かれる様子が一切合切なく見えなくなつてしまふ不知火。

「……………ぐすつ…ひつく…うう…」

僕はただただ泣いた。

ドラム缶で丈夫に作られた大きな船…いかだよりは頑丈そうだけどその真ん中にポ

ツンと存在してる座布団の上でさめざめと膝を曲げ、袖で涙を拭う…。

…セクハラはダメ絶対。そう気付いた時には海の上で流刑…温情は一つもない結果でした。

女性は強く、厳しく、時に冷酷なのだど心に深く刻まれました。

落として、持ち上げて、地獄に落とす…君ら…本当にDSだよ…。

波の音と僕の啜り泣く音だけが早朝の海に静かに響くだけだった…

新米提督さんの（非）日常2

side 提督

あ、海猫だ…可愛い鳴き声だね。

うふふ…ウフフフフ…

一体どれだけの時間がたったのだろうか…一時間？二時間？それとももっと？逆にあんまり時間経ってない？何もないと時間の感覚が狂うんだよね…

懺悔を繰り返す僕には知る術は何も残されていない。

そして、このドラム缶式船だけど屋根は付いてないからこれからの生活が心配です…。雨も風も日差しも防がないんです…。やることもないので空を見上げてたらその余りの大きさに余計に惨めになった。

「…ああ、なんて大きな空何だろうなあ…。ソレに比べて僕はなんて小さな人間なんだろう…うふ、うふふふふ…」

…このドラム缶って態々溶接してあるし海上分裂の心配もないし、浮力も最大まで引き上げられてるし沈む心配もないよね。ホント、一体いつの間にこんなに無駄なレベルで回りくどい計画立てたんだろうね…摩耶ってそこまで頭良い子じゃなかった筈なのに…そんなに僕は彼女を傷付けたんだろうな…うん。最低な屑だったなあ…僕。

もう絶対にセクハラなんてしないよ…。

ああー、胃がキリキリするなあ…。だけど海水で胃薬飲む訳にも行かないし…脱水症状が出ちゃうよ…

「あはは、これは死ぬね僕。」

もう一層のこと深海棲艦に捕虜として捕まれば食事とかその他色々なるとかなるんだけどなあ…。失うのは自由だけってね。

自由一つで生きられるならそれこそ問題ない！

プライドなんかで飯が食えるか！

…って、思ってた時期が僕にもあります。…これがまさかフラグになるなんて思って

なかつたよ…。

「誰かたすけてえ〜!」

「ヲツヲツヲ!!」

ええ、船を後ろから押されて絶賛ヲ級に運ばれています。

…きつと僕は死ぬでしょう。

最後に一つだけ言わせてください。セクハラしてすいませんでした!でも、その感触はたまりませんでした!

…2つになってるんだけど、まあいいか〜

いや、良くないよ!何落ち着いてるの、僕!?!諦めたの?早くないかな!?!死ぬ、食べられるよ、きつと…

「…すいませんすいませんすいません…僕は食べても美味しくないのので許してください？」

「…フ？」

「あーうん。いいや。そうだよ、もう任せるようん。」

「フツフツフ〜♪」

嬉しそうっすね。これはほのぼのする光景だ…身の危険がなければただけどね！

どこにつれてかれるのかも分からない、言葉も通じない。お手上げとはきつとこういう事を言うんだらうね…

僕って身をもって、弱り目に祟り目 踏んだり蹴ったり 泣きっ面に蜂 絶体絶命、
弱肉強食を体験するなんてね…もう、さ。諦めたよ…

僕の心にはフ級の鼻歌だけが虚しく響き渡っていた。

side ヤマト

ここ最近は何かと忙しかった。夜には那珂と川内が現れたためにゆっくり眠る事が難しかった。

日が出ている内はヲ級と話したり、深海駆逐sと遊んだり、じゃれあたり、チ級がSつ気をだして弄られたり：兎に角何かしらあつた為にボーツとしてる時間は思いの外少なかった。

そして今日は朝の時点で誰からの奇襲もなく心置きなくグータラできるといふ訳だ。人である以上怠惰に過ごしたいという願望は誰でも持つているだろう…。

「お日さまが温かい…良い二度寝日和だ」

「今夜ハ寝カセナイゼ？」

「今は朝なのでお引き取りくださいませ」

「：ヲオ…。ヒドイ、アシラワレタ…」

「ええええー！！？」

何時もの冗談を言い合う俺達の間には知らない顔がある。白い軍服に白い帽子、色は全く違うが沖田艦長の着ていた物に酷似している。さながらコスプレだろうか？

「…その人はどうしたの？」

「拾ツタ。食用デモイケル。タブン、キット、メイビー」

「やつぱり食べるんだ!!僕に酷いことするんだね!エロ同人みたいに、エロ同人みたいに!!」

「…なんか残念だな」

「…マサカコンナ奴ダト思ツテナカツタンダ。」

面白ソウダツタカラ話題ノタネ位ニハナルカナツテ思ツテ押シテキタノニ無駄骨ダツタ…」

「ええーつと…?」

「同情するなら助けてくれ!はい、ちよーしきました、すいません。本当に助けてください!…まだ死にたくありません!」

「おいおい…これってヲ級の冗談だぞ?そんなに律儀に真に受けなくても良いからな?」

「そうなのおー!?!」

変な人だった。まさか本当に信じてるとはヲ級も思っていなかったのか、申し訳なきようにしていた。…無表情だが。

少しズレているのが原因なのかやりづらいのだと思われる。

「深海棲艦ハ人間ナド食ベナイ。普通ニ食事ヲスル！女ノ子ヲバケモノ扱イスルノハ失礼ジャナイカ？」

「ええ…そ、そうなのかな…？でも…うーん、確かに女の子であるね」

「おい、お前はオヤジか？なんで胸の位置を見ながら会話してやがる」

「失敬した！なのでその艦載機を向けないで！」

「…変態ガイル。ドウシヨウモナイ変態ガ。…駆逐スレバイイカナ」

疲れる。…だが、悪ふざけするくせに低姿勢っていう消極的なのかアグレッシブなのかがよくわからず、ちくはぐというのか、アンバランスともいうのか…兎に角会話の節々に違和感を感じずにはいられなかった。

「…そのしゃべり方は元々なのか？なんというかおかしいというか、無理をしてるよう

に感じるんだ」

「フ？」

「…凄いな。」

何かを諦めるような表情、ヲ級を見ている目が嘘で固められた物だとすれば今の顔つきは真剣そのもの。

もしかして地雷でも踏み抜いたのではないだろうか？

「じゃあ、本来の話し方で話させて貰うね？」

「…好きにしたら良い。俺は君のしたいようにしたらいいと思うぞ？もう関わってしまった以上、見て見ぬふりは我が信条にも反する。相談を解決できるとは限らないがそれでも誰にも言わないで抱え込み過ぎればいつかパンクして壊れてしまう物だ。俺でよければ聞くとよ」

「ありがとうね…。僕は普段提督という立場にいる。」

「…フ」

ヲ級が一瞬、睨み付けていたが俺が少し小突いたら止めてくれた。敵どうしだった者

がいきなりあらわれれば慎重になるのも分かる。だが、それは話を聞いてからでも遅くない筈だ…

「うん。ヲ級ちゃんが言おうとしてる事も分かるよ？でも、縦社会なんて上の命令を聞くしかできないんだよ。」

上が戦えと命令するならそれに従うだけ…僕らは汚い大人の道具かっていうんだ。」
「…そう」

「私は艦娘の皆が笑えればそれでいい。…最初はそう思っていたよ。でも、一度深海棲艦との戦いを初めて見たときにその壮絶さを耳で聞き、目で見て、肌で感じて…そんなこと言ってられない、戦争という事がどういう物なのか…自分の小ささを知ったんだ…。」

優しいだけじゃダメ、時に非情でなきや駄目だ…」

やっぱり、心で平和を願う心は皆同じなんだと思う。形は違えど目指す終着点は幸せという結末だ…。

だが、平和で、幸せでいてほしいと願う人は自分の性で傷付いていたと知って挫折してしまっただと思う。それでも進まなきやいけないと、壊れる寸前の心を押し留めて

己を偽ることで誤魔化し、自らを欺き道化を演じる事にした…んだらう。いわば、仮面のようなも。

それがその違和感の正体なんじゃなからうか？

新米提督さんの（非）日常3

side ヤマト

前回のあらすじ 提督さんはどうやらいろいろ抱えてる以上。

…なんだこれ？これだけしか書いてないのだからどうしようもないなあ…。追求は受け付けないっていうことだろうか…。

「…非情になれ、か。」

「何カ思ウ所デモ？」

「ああ…昔ね。…艦隊としての意見はそれが君の考えならそれに従うだけです。つていうのが一つじゃないかな？」

「…だよ、ね」

悲痛な面持ちな所を見るに、心を鬼にしきれてないのだと分かる。

いくら仮面で隠していようと、本来しないやり方をし続ければ無理が出てくる。無理が無茶を起こし、無謀な作戦指揮を取ってしまったえば提督さんは自分の失態を責め、今度

は壊れていくだろう。

儂く、そして脆いのもまた意思ある者の定めだ…。

だからこのままじゃいけない。俺にできることはたぶん、経験談を語るだけだろう…古参の戦艦として、沖田艦長に救われたあの時の話をすれば幾らか間違いに気付いてくれるだろうか？

「…でも、変わるきっかけはよくわかった。それで何を思つての行動なのかもね。」

「うん…。」

「まだ分からない事はある。…なんで君はここに居るんだ？」

「うん…？それ関係無くない？」

「いんや…たぶんあるよ。俺が君の鎮守府の艦だったとしたら同じ事をしたと思うからね。」

「艦隊ナラソウ考エルノハ当たり前ダナ。ワタシデモ同ジ」

「ヲ級ちゃんでも？…なら話すね」

事の顛末を聞いた俺が知ったのは不知火さんの落ち度だろうか？

心配なら心配で、そう言えばいい。提督さんの周りの人も言っても分からないからつて意固地になってたんだと思う。解決の糸口は思っていたより簡単だからな。

摩耶さんって人がどんな人かは知らない。不知火さんがどれだけ不快な気持ちにさせられたのかも分からない。でも、芯の部分は結局同じなのだ。

「…それだよ。今回流した理由は」

「流刑が理由？」

「ソモソモソレガ間違イダ。流シタ理由ハ君自身ノ問題。」

「えっと…だから不知火が言っただようにセクハラに耐えかねての行動でしょ？」

「違うな。それは違う。」

「なんで？だって本人が言っただんだよ!？」

訳が分からないという提督さんは己の罰を分かっている。でも分かっているからこそ見えなくなっている。

昔の人は『人間は考える葦である』っていつていたが、俺はそれだけだとは思えない。考える事が出来ることが何かを得る事に通じるとは思うが、知ることは理解する事と

は限らないとも思っているからだ。

分かつていても、その奥の真実に辿り着けるかまでは確約されている訳でもなく、そのきつかけになるだけだと思う。

「…なあ、俺は鎮守府の皆は君が好きなんだと思ってる。どれだけ言葉では素直になれなくてもそれは何があっても変わらなかつた。変わったのは回りじゃなく、君自身だよ。…ここまで言えば理解して貰えるんじゃないかな？」

「…………あ……」

気づいてくれたようだ。

そう、鎮守府の皆は提督さんの己の意志を掲げて好きなんだという思いを抱き、気遣うその姿勢が大好きだったんだ。

提督さんがそうであるように、艦娘である彼女らもまたそんな姿が好きだった。

でも今の姿は無理をして、盲目になつてその思いは無くなつていて…誰もが傷付いてしまったんだ。

辛そうにしているのを近くで見えていた彼女たちは全て分かっていたんだらうな

「じゃあ……」

「ソウ。摩耶ト不知火ハ辛ソウナ姿ヲ見テイラレナクナツタンジヤナイカト思ウ。

ダケド、提督サン自身ニ氣付イテ欲シカツタカラ：ワザト辛ク当タツタ。又、自分達ヲ頼ツテクレルヨウニ」

「……う……私……私……皆に……」

「……泣くのは帰ってから仲直りしてからじゃないかな？まだ誤解は解けてないだろう？それにそのドラム缶舟って食料まで完備してあるし、わざと俺の居る海域を選んだのだって解決してくれると思つたからじゃないかな？」

「食料……？は、まあいいや。それにしても解決つてここまで全部見越しての行動だったの!？」

「流石にここまでじゃないだろうな。……でも、君がした勘違い通りなら、わざわざ俺が氣付く位に派手な船は作らないだろうし、食料も入れない。……で、現にこうして俺の前までやってきた。だが、誤算であるヲ級の事まで計算に入れてることはないだろうね。」

……俺と出会うように仕向けた理由も最初の君は戦いが嫌で傷付く彼女らを見たくなくて頑張つてたんだろう？なら、出会えば俺が宣言したあの言葉を思い出させられるからって事じゃないかな？」

「っ!!？」

「そういう事だよ。俺の言葉はこの海域では戦わせないっていうのだ。

だから、もし俺の意見に賛成してくれるなら戦いはしないでもいい。だから提督さんの願いだった艦娘さんを傷付けなくて済む道が開けるから問題も解決。艦娘さん達は戦わないで済むし、大好きな提督さんが胸を痛める姿を見ないで済む未来が開ける…ほら、これで全部まるっと解決しただろう？」

「…本当だ、私はなんでこんな事に気付けなかったんだ。皆に謝らないと…」

泣きながらまるで憑き物が落ちたように清々しい表情をするようになった提督さん。俺はそれを最後まで見届ける義務がある。ヲ級にも…

なら解決策は簡単だ。

「善は急げ、今すぐにも謝りに行きましょうか」

「だ、だけどこのドラム缶舟じゃ…」

「じゃあ、その船を捨てればいい。何せここには艦『ふね』が二人もいるんだからね」

たぶん俺は今、笑ってる。ヲ級も笑っているから…。

提督さんは驚いているけど、謝罪したいという気持ちがそれを上回ったのだろう。落

ち着いた様子で頭を下げたから

「ごめんなさい…。私の我が儘なんだけど最後まで付き合ってくれますか？」

「勿論最初からそのつもりだよ！」

「フオ〜♪モツチロンサア」

ヲ級の某ピエロの真似は気にしない。

そして俺はヲ級を持ち上げ体に強くくつつくようにさせると、ドラム缶の上に飛び、静かに着地し一礼する。

「では、レディ。エスコートさせていただきます」

「れ、レディって…!!?」

「ノリが悪いなあ、なら俺は今から悪い魔法使いにでもなってお姫様をさらわせてもらおうかな? ふふ、どうでしょうか? お姫様」

「ひ、姫様なんて…」

俺は真っ赤になる提督さんの腰を持つと膝の後ろに手を回しヒョイって感じで持ち

上げた。そして足に力を入れ高く飛び上がる。エンジンには既に宇宙エネルギーも貯めてあり、タキオン粒子に変換も終わっている。

静かに光を放ち始めると直ぐに身体中に力が巡り始める。

「では、艦長発進の号令をお願いします」

「はい……。お願いします、出発!!」

沖田艦長の号令ではない。だが、それでも懐かしくて胸が熱くなる思いが駆け抜けた。

光を放つと同時に勢いよく飛ぶ俺達三人は互いに笑い合いながら短い飛行時間を楽しんでいた。

side 提督

僕は……うん私は今日全てから解放された。

上司の悪意から、部下からの辛い風当たりとか、抱え込んでいた物全てから。

最初のを除き、全部あの人が決してくれた。

笑って全てを見通してるかのように話すあの人は深海棲艦とも仲良くしている。たぶんあの人が鎮守府内で最も噂になってる宇宙戦艦のヤマトさんなんだと分かった。彼は本気で幸せになってほしいと願ってくれていた。

…あの宣言の後はどんな化け物なのかと思つてたけど会つてみれば私達と同じように生きている人間で、尊敬できる人。

噂や法螺に流されず、真実だけを見ているあの人の生き様はまるでお父さんのような温かさで私を包んでくれた。

普段だったら夢物語で片付けられちゃう私の夢を叶えてくれた人。

そして私の初恋の人。

男のように振る舞う私を救ってくれた笑顔がかっこよくて可愛いあの人。

その笑顔にやられたんだと思う。純粹に楽しんでる姿は誰よりも眩しく見えた。

…ねえ、あの時貴方は艦長つて言ってくれたけど私は貴方だけの艦長になれるかしら

？

ふふっなんてね♪

…そして、その数日後に一つの鎮守府が独立し深海棲艦との共存を目指すという異例の事態を呼んだ。

だが、その背後にある一隻の艦を目にした人物達はその鎮守府に手を出す事は絶対にないとその場で契約をしていたとか。

実質、鎮守府は未来に続く限り平和で幸せになった。

その鎮守府は他の鎮守府所属の艦娘達の間ではこう呼ばれることになった

幸福湾鎮守府…と

襲来!ヤマト、出ます!!

やつほー、うん。なんか違うな。

どうも…うむ。しつくりくるぞ挨拶はこれが一番ってことかな。

今日は少し異例の事態になってる。

それは…

「この人が最近できた私の恋人です。」

「ふえ?…えええー!?なのです!!?」

「…神は死んでしまいました」

「…榛名を傷付けた報いはしつかり!!きつかり!受けてもらいますよ!」

「は、榛名?!倒れちゃダメネー!!」

「……………」

「ハラシヨー…」

「折角提督とまた仲良くなれたのに…雷が提督のお世話をするって思ってたのに…」

「…ふーん、貴方が提督の言ってたしん!?」

「睨い、後でドツグね♪」

「も、もがぁー!!?」

…ものスツゴいカオスな場所に来ています。

あの…提督さん? そのちっちゃい子顔が真つ青ですよ? 手離さないと死んじやうんじやないかな?

「…その、大丈夫か? なんかヤバそうだったけど…。あと、直ぐに気付けなくてすまない」

「…し、死んじやうかと思っただわ…。ううん、仕方無いから良いのよ、ありがとうね♪」
「うぐつ…私が悪いから割って入れない。」

提督さんはどうやら既に鎮守府内で謝ったらしく険悪な様子は全くない。むしろ仲も良くて明るいイメージ見れる。

たぶん誤解や行き違いは全部取り払えたんだと思う。

これならあの時(そこまでじゃないけど)頑張った甲斐があったというものだろう。

「…それでヤマトさんが恋人ってどういう事デスカ?」

「そ、そうですね金剛お姉さまがいう通りですよ!! 一体いつの間にか!」

「榛名がこんなに取り乱すなんて考えられませんでしたね…」

「…榛名が可愛そうですね。ヤマトさん! 覚悟して下さいね!」

えっと、それよりも自己紹介してくれないと誰だか分からないんだけど…この四人が榛名と比叡の姉妹である事は服がそっくりなことから予想出来るけど残りの二人…活発的な印象の片言な日本語の女性と理知的な印象の眼鏡の女性は始めて会う筈なんだが…

「…ヤマトさん、聞いてますか?」

「…うむ。それよりも自己紹介してくれろと嬉しいかな?」

「仕方ありませんね…では紹介します! 此方の完璧超人! 容姿端麗!! 美人過ぎて眩しいぐらいに只者ではないオーラを放っているのが我らが長女、金剛お姉さまです!!」

「…比叡が言ったのってどういう意味デスカ?」

「金剛さんを褒め称えていたんです。綺麗で美しく、パーフェクトな凄い女性だって言ってたんですよ?」

「オー、そうだったんデスカ。パーフェクトトウなんて…それは褒めすぎだよ！ヤマトさん、金剛デースよろしくネー！」

「ヤマトです、よろしく。…あと、比叡の褒め言葉は褒めすぎなんかじゃありませんよ。貴方は立派な女性で、綺麗ですよ♪」

「オオウ…成る程、英国紳士もビツクリするぐらいに紳士デス！…あんなに真つ直ぐに言われちゃうと恥ずかしくて直視出来ないじゃないですか……。」

「そう、なのかなあ？でも、金剛さんがそう言うならそうなのかも知れませんね」

金剛さんが元気で明朗活発な清々しい人物である事はよく分かった。…でも、最後の方に口がモゴモゴ動いてたような気がするのだけど女性の言いたくない事は聞いたらダメだよな。

親しい間柄でも無いんだから無礼に当たるだろうし…。

「…何お姉さまとラブコメってるんですか！…でも、お姉さまの良いところをよく分かってらっしゃる!!後でゆっくり語り合いましよう！」

つと、それで此方の眼鏡の…」

「マイクチェックOK…。榛名とは双子なんですけど霧島です。妹と姉共々よろしくお

願います」

「うん。よろしく、ヤマトです。…榛名と双子ってだけあるなあ。しっかりしてて回りを気遣える…たぶん霧島さん達姉妹が上手くやっていけるのは霧島さんのおかげなんじゃないかな? せめて俺で良ければ大変だったらお手伝いさせてもらおうよ」

「…ふふ、大丈夫です。私が好きだからやってるんですよ。でも、ありがとうございます」

「ああ、喜んで。確か一番あの海に来た最初の時に会ったよね?」

「丁度彼処にいるはずだからもしもの時は頼ってよ。」

「覚えてくれていたんですね!! ええ、ええ! 是非!」

なんでかは分からないが、二人の視線が変わったような…そんな気がした。てか、マイクチェックって何だろうか…?

ま、無視ですかね、それで視線についてだけど例えるなら興味本意からくる見極めようとする視線から、圧が抜けて仲良くなりたいたいっていう純粋な視線に変わった…みたいなのかなあ? でも、自信はない!

ヲ級がいたら「ソソナコト自信満々ニ言工事ジャナイネ」とでも指摘されそうだな。

「…で、提督の恋人ってどういう事デスカ!!」

「ええ、なんでこのダメ人間なんですか!!」

「あの、霧島？一応この人は提督なんですよ？言葉使いダメですよ…」

「お姉さまもさつきと言い方の雰囲気変わってます…」

俺はどうする事が正解なんだろうか…金剛さんは怒ってるみたいで霧島さんは独占したいって顔に書いてあるような気がしたし…

え、提督さん？そこで膝から崩れ落ちて“orz”やって落ち込んでるぞ。霧島さんがダメ人間って言った辺りからだったかな？

それまでは「私の存在って…」「無視って酷い…」「私がいるじゃない」「うわーん、雷いー」とかやってたんだけどなあ…。

提督さんは美人なんだけど中身が少しオッサン臭いっていうか…いや、艦娘さん達が可愛いってつい可愛がっちゃうのは分かるんだけどやり過ぎちゃってるっていうのかなあ…印象が残念美人って感じになっちゃうてるんだよね…。

「…？」

「……………」

「……………」

「あの…響達?なんで無言で会話してるのよ…。」

一先ず現時点でこの場で一番マトモそうな青、水色?銀?とにかくそんな感じな女の子と接触を試みた所、何かいい解決策は無いらしい。

一連の会話の流れを言おう。

← 俺が提督さん及び金剛さん等に指をさして首を傾げる。

← 青い子、首を振って駄目だという意思表示

← 残念に思っ、項垂れる

← 暁ちゃんのツツコミ一丁入りまーす

だった。

余り積極的な方じゃないらしく響と言われた子は落ち着いた様子で戦況(俺の現状況

の感想)を見守っている。

…この子とは仲良く出来そうだ。

「自己紹介が遅れてすまないね、ヤマトだ」

「特型22番艦、響。第二次世界対戦では最後まで戦い抜いて沈まなかった事から不死鳥との通り名もあるよ。ロシアでは〈信頼できる〉という意味でヴェールヌイって呼ばれてもいるよ。よろしくね」

「そういう事なら長女でレディでもある私も名乗らなきゃね！私は暁よ。立派なレディになるのが夢なの」

「あ、私は雷よ！妹の電の夢の為に頑張ってくれてるんでしょ？私も出来る事があったら手伝うわ！まっかせておきなさい!!」

どうやら駆逐sはどこでも元気なようです。自由に元気に、が製作者の意図なんだろうか？うむ、神のみぞ知るってことだろうか？

というか、雷ちゃんは提督さんの頭を撫でながらも片方の手をブンブン振ってます。提督さんや…貴方雷ちゃんに精神年齢負けてないかい？

そんな姿は見たくなかったなあ…。

今日はあのドラム缶船の事についての事で鎮守府に訪れた筈なのに何故こんなことになっているのだろうかと俺は自身に小一時間ほど問い正したくなった…。

…別に迫りくる二人組から逃避してる訳じゃないんですよ…？

その心の眩きも虚しく、詰問にあうのはそれから直ぐの事だった…。

襲来！ヤマト、出ます！！ 2

気がついたら同じ面ばかり…あ、これ違うやつだ。

どうも、ヤマトです。今日も空気が上手いです

「…で、あんな事言つて皆を掻き回して提督は何を考えていたのですか？」

「びっくりしたのです!!それと、嘘はいけないのです!!」

「提督の冗談は大抵笑えないネー」

「全くですよ。それにヤマトさんは渡しません！」

「もう！また暴走してる!!榛名は一度落ち着いて、ね？」

という光景が前で繰り広げられています。俺は一旦こちらにかけててくださいと言われたソファアに座ってるんだけど、これはヤバい。蕩けるといふか柔らかさがメーターをふりきってる。もはやここまできたら駄目になりそうな位座り心地が良いんだ。心なしか眠気を誘われてるような気もする…

「はい、これ。」

「ああ、ありがとうな響」

「ふふん♪そのお茶、私と響で淹れたんだから!」

「立派なレディへの一歩ってことかな?人を気遣える人はもう立派なレディじゃないかと俺は思ってるんだけどな」

「そ、そう?」

「勿論。」

あのあと直ぐに言い寄られた俺は提督さんの冗談だと教えるところとして提督さんへの尋問が始まったという事になりました。

金剛さん姉妹の四人と電での五人は手慣れた手付きで提督さんを縛ると吊し上げていたよ…。

縛り慣れてる女性っていうのはどうなのだろうか?

世間一般でいえばアウト…なのかなあ。なんてボーツとする頭で考えてお茶を一口

おー…お茶美味い。

ありがとう、と言って美味しかったと素直に褒めると当然よ!と胸を張る暁。

良かった。と安心したような表情の響は撫でると猫みたいに目を細めていた。

「いや、俺も最初は女の子の頭を気安く触るのは如何なものかなとは思ってたんだけど、誉めたあとに帽子で見えないけどつむじを向けてきて、チラチラ視線をくれるものだから……つい。」

そのあとと暁にも撫でたら当然の如く怒られました。

曰く、子供扱いしないで！レディの頭には気安く触らないものなのとの事。

「響には撫でたのに暁は撫でないっていうのは何て言うか響だけを特別扱いしてるように見られるんじゃないかと思つて撫でちゃったんだ。嫌なら今後はしないように心掛かせてもらうな？」

「すまない」

「……嫌じゃない。」

「え？」

「もう!!嫌じゃないって言ったの!」

レディとして扱ってくれるなら撫でられてあげても良いの」

「……………。そう、なら俺は君をレディとして扱う事をここに誓う。」

だから、今後も撫でさせてもらつても良いかな?」

「…仕方ないわねえ!させてあげるわ!」

パアアっていう擬音が耳に聞こえたような気がしたのはたぶん俺の勘違いだろう。なんとなく暁の背中から光って見えたような気もした。

だが、気のせいなんだ。

「…ヤマトさん!」

「酷いのです…」

「助け船出してくれても良いんじゃない!?しかも私達は放置な上、自分はお楽しみって
どういう事かしら?」

「…目を離してる隙に」

「浮気はナンセンス!!ヤマトはワタシだけ見てれば良いネー」

えっと、皆さん…?なんで俺は呆れられてるのでしようか?

霧島さんに至っては俺の母親みたいな態度何でしょうか?

分からないことだらけだ…。

あと提督さんは自業自得だからちゃんとこの機にしっかり反省してください…と、念

を押しておこうかな。

「…あ、そういえばなんで今日は鎮守府に？」

「聞いて無かつたんですか!？」

「聞いて無いのですか!？」

「提督…私が居ないと何にも出来ないのかしら？」

「じゃあ、いきなりあの馬鹿をやったという事ですか!？」

「流石にこれは弁護出来ないデスヨ…」

「あはは…レディとか云々の前に人間としてそれはどうかと思うわ」

「これは私も驚いたよ。ハラシヨ」

あ、ほら皆で一気にバツシングするからまた落ち込んじゃったよ…。

遅れながらの助け船としてではないが直ぐにその用件をいうことにした。

「ドラム缶船についてとあの中に入ってた食料について聞きたかつたからだよ。」

「あー、あれね。帰って謝った後に聞いたんだけどドラム缶船の名称はドラム艦らしいわ」

「…提督、それって今関係ありませんよね?」

「…ぐすん。」

で、ドラム艦だけど貴方に持つていて欲しいの。私達が仲直りするきっかけをくれた貴方に…。最初はまた同じように抱え込みすぎないように戒めに私の部屋に置いておくことも考えたんだけどそれよりも貴方が直接顔を出してくれたほうが良いかなって思ったのよね。だから、手伝ってもらおう事にしました!」

「…急に真面目になりましたね」

「きつと、誤魔化したのデース」

「なのです!」

「う、うるさい!」

「…だが、宣言した時にやらかしたせいで怖がってる人もいるはずだ。」

そう簡単にはいそうですかという訳にはいかないだろうよ…。だから此処で暮らして手伝うつていうのは無理だ」

「…駄目?」

「それには女性ばかりだ。俺には肩身が狭すぎる。」

「…そっちが本音では無いのよね?…:…はあ。なら仕方ないわね。なら等価交換って事でドラム艦とその中に入っていた食糧をあげるのでたまにで良いので私に会いに来て

くれないかしら？」

「…会いに来る位は全然構わないのだけどその場合、しつかり鎮守府内の方たちに連絡を怠らないようにしてくれ。問題が起こってからでは対処が遅れてしまう。だから、連絡する事。及び有事の際は鎮守府で誰かをあの場所まで来させてくれ…その時はすぐに駆け付ける…こんなもので良いかなあ？」

「なら！手伝ってくれるの!？」

「ずっとは駄目でもたまにならいつでも良いさ。それに手伝わないとは言ってなかっただろう？」

俺は大切な人達の為にだったら力は惜しまないつもりだよ。」

「…卑怯だわ」

「反則なのです」

「回避不可の範囲攻撃…榛名はもう駄目です…。今のを榛名だけにいつて欲しいです！」

「…轟沈しちゃうようだよ。不死鳥の私でもこれには…」

「…大人だわ。もしヤマトが女性だったらレディとして勝てないわね」

「えっと…これは私やお姉さまもって事で良いんですかね？…何か照れ臭いですね」

「Oh…これが本当のバーニング ラアブって事デスネこれには私でももう落ち

「ちやうヨ…」

「いっそ、貴方が提督をやってくれませんか? 私だけの提督でも良いです。ええ ええ。…はっ私は今何を…//」

「霧島がデレマシタ! 積極的なloveコールだったヨ? でも、幾ら妹と言えど渡しマセーン!」

状況を報告します。我が発言により目の前の八名は俯いたり、くねらせたと思つたら怒りだしたり、顔を隠したり、隠れてた本性が露になったり、ガツカリされたり、暴走し始めたり…兎に角色んな事が起こってました。

「恥ずかしい事でも言っちゃった? 怒るような事を言つた?」

「兎に角訳が分からない事になってしまつていた事だけは一先ず分かつた…。」

「私が間宮さんにお茶菓子をもらつてきてあげたわ! って、なにこれ?」

ポカンとする雷は部屋を見渡して俺を見てくる。

そして肩には届かないからなのだと思うが腰をポンポンと叩くと「私がついてるじゃない…」と言つて全て分かつてるとでも言うかのような優しい顔をしていたのだ…。

襲来！ヤマト、出ます！！ 3

あれから雷の誤解は案外簡単に解けた。

最初はあんなこと言われたのでどうしたら良いのか分からなかったが、話してみるとお母さん（？）みたいな感想を持たれていた。てか、お母さんだった。但し見た目にあらず

雷曰く、部屋の様子を見たらてつきり俺がナンパをしてやはり俺も男の子なんだねと
か思ったとのこと。何があったのかと心配してしまったじゃないかと注意されました。
だが一つだけ言いたい。俺がそんな軟弱者なこと出来る訳がないじゃないか…。

「あ、このお菓子美味しいな」

「間宮さんの所のどら焼きよ。緑茶に合うお菓子をお願いしたらオマケって事で貰ったの。本当はこっちのおまんじゅうを皆に食べてもらうつもりだったんだけどヤマトにもここの事を好きになってもらいたいもの!!」

「…ありがとう、雷。君達がいい子ばかりだ。そんな君達がいるこの鎮守府を嫌いになるなんて事は絶対じゃないよ。」

大切な人達のいる場所を守りたいって気持ちにはよく分かるからね…。それに健気に、そして精一杯努力してる雷が好きなの場所だ…。俺が好きにならない道理もないさ」

俺にとっての大切な場所…それはやはり美しかったあの地球だ。それをガミラス帝国などに壊される姿を見ている事がどれだけ辛かったか…その記憶は今も目に焼き付いていて、フラッシュバックする事もある。色を、幸せを奪われていく世界は絶望に飲まれていくような壮絶な物があった。

俺はあの光景を忘れない。

たぶん傷付いた世界は活気を取り戻してそんな事がなかったかのように薄れていき、記憶と爪痕は修復されていくだろう。それは時間が経つにつれて寂れてしまう諸行無常という事だ。

でも、だからこそあの姿を誰かが凄惨な姿を鮮明に、詳細を記憶しなければならいんだ。

それは俺じゃないかもしれない。

でも、俺は辛かったからこそ同じ鑑を踏まないように覚えていたんだ…。

「…きゅん」

「誰だ、今変な声出したのは」

意識した訳ではないが声のトーンが底冷えるように下がっていた。

真剣に考えていただけにふざけられたような気がして嫌な気分になった。まるで俺の想いを冷やかされたような、そんな風に感じた。

ここでは俺しかあの地球の姿を見ていない。それを感じとれという方が酷なのは分かっている。でも、大きかれ小さかれ大切な想いをバカにされれば怒りを抱いてしまう。

「いやいやヤマト…自分が今どんな顔してたか分かる？」

何か考え事してたのは分かるんだけど今のは言わなきゃいけない流れだと思つての行動なのだけどうだったかしら？」

「すまん、全く分からん。分かりたくもない。」

「榛名もその意見に賛成です！」

「榛名は提督の方に賛成って言ったんですからね？因みに私も賛成です」

「モツチロン私もネー!!」

「お姉様がそういうなら私もそう思いますよ」

「…ヤマトには悪いけど私もそう思うよ」

「ふふん、その黄昏る横g…もがあ!？」

「すこし暁ちゃんも黙ってほしいのです!最後になんて言おうとしたのかワカラナイのですけど抜け駆けはさせないのです!!」

「…電?その気持ちは分かるけどそろそろ話さないと大変なことになるわよ?」

「はわわわっ!?!」

「…さつきからこんなのはっかりよ。今日は厄日かしら?」

パニックになりすぎてなのか、それとも二回目という事で慣れたからなのか暁の回復速度が格段と上がっていた。

そして、分からないのは俺だけで全員分かっているらしい…。げせぬ…。

気付けば怒りの矛先は自然と収まっていた。

そして落ち込んでたら雷が慰めてくれました。

この子…いい子だ。提督さんが抱き付いてたのもよくわかったような気がする…。抱き付かないが。

お礼を言うと、照れ臭そうにしながらまた頼つても良いのよ！つて言つてたから頭を撫でておいた。

雷はありがとうつて返したが、ありがとうは俺の言葉だよつて返せば「じゃあ、おあいこね♪」との事。うん、天使だ。実に良くできた子である。

そんな俺と雷をグヌヌと悔しそうにしたのは提督さんで、何時もなら雷と仲良くするのは私なのに…とか考えてるんだと予想する。

というか、俺も本題からドンドンそれてるが本来はドラム艦についての話し合いだった筈なのにな…

「あのドラム缶が艦か」

「提督の話しに戻りますけど、たしかに仲直りの印がドラム艦っていうのもシニールです」

「そういえば以外と大きかったはずですけど、アノ中に食料が入ってたんですか？」

「お姉様はもしかしたらバラしちゃうかもしれないからつて事になってたんです」

「そうだったんデスカ!？」

金剛さん姉妹は仲がいいのがよく分かるなあ。まるでコントを見てるようなテンポの良さを感じる。あの詳しく全てを言わなくてもある程度でわかり会える感じは見ていて楽しいと感じられる。

「…あ、私もそれずつと気になってたわ。私が乗ってた時は座布団以外何もなかった筈よ? 一体何処に有ったのか、それでどうしてそれを一発で見抜いたのかも教えてくれなにかしら?」

「ん? 座布団の下に戸があつてそこを開けた収納の下に食料が入ってたんだが知らなかったのか? 俺はてっきり知ってたと思つてたんだが…戸の存在に気付いた理由は座布団が他より少し浮いてたからで、食料が入つてると分かったのは微妙に右に傾いてたからだな。」

「私の心配つて本当に取り越し苦労だったってわけね…。なんで直ぐに気づけなかったのかしら…:そしたらあそこまで後悔して深海棲艦に捕まりたいとまで考えなかったのに!」

提督さんは叫んでいます。

いや慟哭してゐるんだけど、ちよつと関わりにくい雰囲気が出てゐるんだよ…。あの謝る決意を決めた時とは別人みたいで…。ちよつと、ね…

だけど、やっぱり謝る前よりもずつといい顔をするようになったところを見れば良かったと思える。

それは心から楽しんでゐるからなのだろう…。気負い過ぎず程よくバカをやる。それが人の日常というものなんだと今日、実感できた。

これが俺が鎮守府に来て本当に良かったと思えた瞬間だったと思う。

遂に…念願のアレを…

やあ皆！え？別の世界の住人に気軽に話しかけるなつて？そういわないでくれよ泣
いちやうぜ？

…なんだろう、疲れてんのかな…最近なんか知らないけど段々ブレてきてるんだよ
なあ…。

で、あの日から翌日だ。

え、何があつたか、だつて？

そんなの色々だ。鎮守府を見学させられたり、鎮守府内で仕事を覚えさせられたり、
手伝わされたり、襲われたり…まあ、力仕事は男の仕事とは言うが鎮守府で仕事して
人は女性ばかりだったよ。手伝いをしたのだからって妖精さん達が鎮守府内で一番忙し
らしくててんやわんやだったからつてというのが大きな理由だな。

手伝つて手伝つて身を粉にして働いたら妖精さんと明石さんに気に入られたけどそ
れはまた今度にも話そうと思う。

そして紆余曲折あれど俺はついにやってやったんだ！アレを…墮落させる例のブツ

を手に入れたんだ！

正直、俺個人としてはコスモクリナーDより優先順位が一つ上のアレだぞ？ 人類の希望より一つ優先順位が高いんだぞ？

あ、いや…コスモクリナーDが大切じゃない訳じゃないんだが、前の姿じゃなく今の姿の俺にとってはこっちの方が大事なんだよ！

ほら、何時だか話したじゃないか…波動砲一発分のエネルギーとでも交換したい位つて言ったアレさあ〜♪

私は猫になりたい！

「…でも、多摩は猫じゃないにやあ」

「…猫じゃないけど猫みたく釣れる!?!」

「どうも、多摩です!」

「ヤマトです…え、いや…何で暢気に自己紹介してるの!?!」

「宅急便みたいな名前にや」

「そつちも猫だったね…」

「そんな事より炬燵にやああー!!」

そんな事とか言われた!?!

でも、コイツは…俺と同じ考えの艦娘だ。コイツ…いや、その特大の炬燵愛に敬意を表して多摩先輩と呼ばせてもらおう。多摩先輩は炬燵を愛している…俺と同じように大切な何かを捨ててまでその不思議と心温まる温もりを熟知しているとみた!!

「フっ、やるな多摩先輩!」

「ヤマトの方だつて険しい修練、そして極寒のお空の下をひたすらに歩み続けてしてそのアルカディアを手にしたのが見てとれるように分かるんだ…にや。」

スゲエ…炬燵愛に不可能はないようだ。全てお見通しのようだった。

俺は取って付けたようなニヤの語尾なんて目じやないぐらいに圧倒されていた。かつてない程の敵が見方になったように心強い!ガルマンガミラスすらこの時にしてみればお遊びだと思える…(乱心)

この俺が恐怖に足が震えるなど…いや、それは相手方も同じか…

妖精さん方の手伝いという労働の末妖精さん方がくれたこの炬燵の入手方法を回りくどい言い方をして指摘していたのだから。

「…」で争えば互いに只ではすまないという事か。」

「にやらば、同盟を組むまでにやん」

「…そういう事か。」

「そうにや」

互いに顔を見合うと不敵にニヤリと口角を上げる。そして声高々に宣言の言葉を発する。

「炬燵様な忠実な僕同盟の友よ!!」

綺麗にハモると、俺たちはガシツと抱き合う。仲間…そんな言葉では言い表せない存在が今この場をもって友となったのだ。

これを後に遠目で見ていたヲ級に写真を撮られ、まだ見ぬ青葉さんにそのネタを売られ、鎮守府内及び深海棲艦の話題のタネにされ、御乱心なされた!?瞬間ベスト一位へと輝く事となる事を誰が予想出来たのでしょうか。大会形式で行われたソレは懸賞金が出るらしく、その一割を青葉さん、ヲ級がもって帰りソレ以外の八割を俺と多摩先輩で綺麗にファイブファイブに山分けしました。

…因みに、その際の分けた俺の恩賞は全てミカンへと変わりました。

現状況では関係ない事なんだがな。

「でも、どうやってこのおこた様の温か力場を展開しようか…」

「…あ、これ電気炬燵にや。プラグがついてるのに電源がない…となると…」

「使えないな。だからと言って掘炬燵に加工したら今度はドラム艦が不味い…どうするか」

「…折角の炬燵なのに温まらない炬燵なんて只の卓袱台に布団しいただけだにや！…暖かいけど」

「確かに…。でもそうなると解決策か電気を此処まで持つてくるかしないといけないんだよな」

「逆にここで作っちゃうっていうのもいいにやあゝ…出来るものじゃないけどにや」

「…作る、か」

多摩先輩の炬燵案は少し意外だった。作る…言い換えればエネルギー変換か………あ…

昔の俺って確か普段艦の中でもライトがついてなかったか？

このエンジンだつて宇宙エネルギーをタキオン粒子に変換して動力にしている訳だ

し理論上出来ない？」

「俺の身体って一応全身がヤマトなんだよなあ…だったらどこかしらにコンセントでも造つてみるか。いやいや…でもいつだかヲ級にも言われたように端から見たらマゾヒストに見えるんだっけ…それは嫌だな…。」

炬燵をとるかプライドをとるか…ここは迷わずプライドをとるのが正解だ…。

流石に魂までは売ってはいけない。踏み越えてはいけない境界線は此処にあるのだろ…。

だがこうしてワザワザ俺と同じ炬燵に入り、同じ時間を共有する目の前の多摩先輩がガツカリしている姿は精神的にクる物がある。

「くっ、プライドなんて捨ててやる！」

俺は目の前の幸せのためなら炎の中にだって、ガミラスの艦隊の中にだって飛び込んでやるぞおー!!」

「ヤマトが燃えている…多摩の為に、多摩とヤマトの幸せのために…。多摩もやってやるにゃ！炬燵様の為ならこのヤマトと一緒に沈んでやる覚悟ができたにゃん!!」

「ああ逝こう多摩。」

「いくにや、ヤマト。」

俺と多摩はガツシリと手を握り合い、覚悟を決めた。

これも勿論ヲ級に撮られていて、以下略 だった。一位と二位を奪取した瞬間であった。

俺は多摩の手伝いをされながら無事、艦装の一ヶ所を改造しコンセントを作り上げた。そのあとは二人でのんびり炬燵に入りながら和んでいましたとさ。

番外編　クマじやないクマ

どうも…海の上でクマと出会って現在は一緒に炬燵で和んでいます。

え、何があったのかって？それは俺にも分からない。

気付いたらそこにおいて一緒に炬燵でミカンを食べていた。恐ろしい物の片鱗を味わったような気がします。

その熊野：間違えました。クマの特徴を説明するならクマのぬいぐるみのようなデフォルトされたかわいさの熊で何故か白衣を着ている。

そして艦装っぽい奴は盛大に訳が分からない。

艦というよりトラックに近いそれはとてつもなく派手で、海を渡って此処まで来たというの信じられない容姿をしている。…それを言ったら艦娘じゃなくて艦熊なのはどうなんだと言うことなんだが……。

「ざつきからクマクマ連呼してんじやねえよ。食うぞ？喰うぞ、コラ!!」

「もしかした幻覚かもしれないし、気にしてたら悪いから口には出してなかった筈なのだが…」

「口には出てなかったぞ。だが、雰囲気でわかんだよ!」

「…そうだったのか。すまなかったな…熊って思っ…名前を聞かせて貰ってもよろしいか?」

なんでか分からないけど話していることに違和感を感じないというのが既に変なだけだな…。でも、これで綺麗に収まる所に収まったって感じるから不思議だ。

「別に構わねえよ!お前の誠意はしつかり伝わったからな。俺はレオナルド…レオナルドveryだ、コラ!!」

「宇宙戦艦のヤマトだ…。ところでそのYというのは何なんだ?」

「夜逃げマシーンだ」

「夜逃げ!?!なんでここに居るのお!?!」

もう訳が分からなさすぎて冷静を保つのが不可能だ…。もう、どうせだからハツチャケてしまう方が正解なような気がしてきたぞ。

「総統の奴がバカだから夜逃げすんに作ったんだよ!…ここに来たのは宇宙に行つてた

らここに落ちて来ちまったんだよ!!」

「トラックで宇宙って!ぷっ、アハハハ!」

「バカ!トラックじゃねえよ、バカ!夜逃げマシンだ、コラ!で、宇宙へは大家を振り切るのにフルパワーにしたら宇宙に行っちまったんだよ!」

「大家、大家って…しかも夜逃げマシンのフルパワーにしたら宇宙に行っちゃうとか…つく、腹が痛い。腹筋が割れる!」

「もとから割れてんだろ!」

面白い人だった。

レオナルドさんはどうやら博士…又はアーティストらしい。普通じゃありえない出力がでるトラック改造とか俺以上にオーバースペックだな!

あ、艤装の夜逃げマシンが光ってる。

「アンタ、面白いな!エネルギー代わりになる物を見付けるまでの間だが一緒にいさせてもらっても構わないか?」

「レオナルドの話をもっと聞いてみたいし、全然構わないよ。

宇宙でなにやってたかとか聞いても?」

「別に大した事はしてねえよー」

そこからは炬燵に設置してあるミカンが全て無くなるまで面白おかしく談義に華を咲かせていた。

レオナルドは悪の組織の団員でその名も鷹の爪団。その前までは竜の爪団って名前だったらしいが、デラックスファイターとかいうヒーローらしからぬヒーローと日夜たたかっているらしい。

今までやって来た話を聞いてても、総統さんの話は悪の組織としては間違っているような人物だった。

世界を破壊する計画を打ち破ったり、ヒーローにお金を貢がされたり、環境破壊に合う故郷で川に放置されるゴミで破壊兵器と戦ったり…兎に角悪の組織としては間違っているのに人間としては人徳のある、イイ人だった…。

なぜそこで悪の組織になってしまふのかと疑問に思う事もあるが、バカで、面白く、真つ直ぐな人たちなのは良く分かったのだった。

ここに来た経緯だが、宇宙での話だが夜逃げしすぎて宇宙に行った後、餓死寸前に助けられた所で死んだ筈のヘンダーミラーのクローン培養施設で世界の破壊を企んでいたヘンダーミラーの計画を阻止して無事世界を救ったら此処に来ていたとのこと。

各国のミサイルを全て打ち落とすぐらいの兵器とか、百均で武装を作るなど…技術的な面ではこの世界よりも、俺がいた地球に近い物がある。という事はたぶん俺と同じなんだと思う。

「…そのエネルギーっていうのはスペースデブリでなんとかならないか？」

気付けばそんな事を呟いていた。

何故だか放っておけない…俺がそうであったように、誰かがそこで一人でいるなら力になってあげたい。そう、思ったからなのかそれとも似た境遇だったからなのか…兎に角俺はレオナルドを元の世界に戻れるようにしてあげたいって思ったんだ。

「…ここは海の上だぞ！そんなもの準備出来る訳がねえだろ！」

「否定はしなかったって事は出来るんだな？」

「おい…まさかヤマトが宇宙戦艦って言ったが!？」

「おうとも!!俺は今こんな成りをしてるがこれでも宇宙を駆けてきたんだ。スペースデブリの一つや二つ持つてくるのなんて朝飯前だからな。」

「人の形をしてても大気圏突破出来るのか!？」

「問題ない！…で、持ってくれば全ての問題は解決出来る？」

「…出来るな。むしろ、もっとスゲエのが出来るぞ！」

上等だ。なら、いっちょやってやりますか！レオナルドの為、俺の好奇心の為、宇宙のゴミ拾いにやってみますか！

炬燵から這い出すと力を蓄えていたブースターに火を付け、宙に浮き上がる。今回は提督さんの時とは違い底いながらの飛行ではないために全力での飛行も出来る。

飛ぶ時位は自由に飛びたいからな。波動砲も出力を出せず終いで不完全燃焼が続いてたからか心なしか気分が高調していた。

そして俺はレオナルドが面白いぐらいに呆然としてる顔を見て笑った。そして、気付けば大気圏は真下にあった。

「…艦娘と深海棲艦どうして争い続ける世界でも地球は青く輝いている。まったく…綺麗だなあ。」

あの色のない世界が来ないことを祈るばかりだよ。

…そんな考え事をしながらの飛行だが、心は楽しくて仕方なかった。やはり地球はあ

あでないとな。生命の息づく場所でも有り続けてくれよ？なんてな

大きく丸い地球の回りに漂うゴミ、スペースデブリ。これが綺麗な地球の回りに点在し続ける限り完璧な世界とは言えないんだろうなあ…。

宇宙衛星のおかげで確かに気候や状況を常に調べる事が出来て便利にはなったんだろうがゴミが増えるばかり…：どうにかするにも今のこの地球じゃそんなこと出来る技術もない。

「本当、ままならないな…：どこの世界でも…。」

なんか、イラつくな…。一層出来るんだしやっちまおうか。

一先ず一つ有れば十分らしいからこれでいいか。

近場にあつた比較的綺麗な形で形の残っていた衛星の残骸を後ろに置くと、俺は外から何時も眺めていた船員のかげ声を口にする。

「ヤマト、波動砲発射用意。エネルギー弁閉鎖、充填開始！

セーフティロック、解除。ターゲットスコープオープン。電影クロスゲージ明度20。エネルギー充填120%

対ショック防御、対閃光防御。最終セーフティ、解除。
波動砲、発射！」

波動砲は綺麗な直線を描き視界に入る全てのスペースデブリを飲み込む。

本来の力よりも大きな力を出したという事もあり、反動で動けなくなつたが問題は無い。そして、なによりスッキリした。

久しぶりの宇宙に、久しぶりの波動砲の感覚の余韻に浸りながら宇宙を後にしたのだった。

そして、ゆつくりとドラム艦のある海上まで降りてくるとレオナルドは笑っていた。

「バカ、お前バカ！バカは死んでも治らない。…でも、ヤマトみたいなぶつ飛んだバカは嫌いじゃない。」

「くっ…ふふ。そうだな、バカなんだろうな俺も。でもレオナルドもそうなんじゃない

か？」

「違うない。」

俺はレオナルドと一緒に笑いあつた。

…所でレオナルドのあの鳴き声みたいなのは笑い声って事でいいんだよな？

「じゃあさつさと作っちゃまうから此処で待つてろ！」

「分かつた。」

と、言つても互いにドラム艦の上の為に、炬燵に入りながらすぐそこでレオナルドが作っている所を見ることが出来ただけど、アレは描写出来ない…。

作るとか造るとかいう次元じゃない。レオナルドは天才とかじゃなく天災レベルの科学者だということをマザマザと見せられた。

「これが夜逃げマシンスペシャルだ！」

「レオナルド、これのどこがスペシャルなんだ？」

デコトラの感じから今度はタクシーの外観になっていた。…突っ込みどころ満載な

それは既に衛星の姿は跡形もなく無くなっていた。

「次元や時間すら飛べるようにしたんだよ！ヤマトの大気圏突破の姿を見て思い付いたんだ！」

「タクシーで時間の壁突破って…それどこかの映画で無かったっけ？てか、それタイムマシーンじゃ…つぶは!!レオナルドスゲエ！」

「当たり前だ！コラ!!」

そして、このマシーンが完成したということはそれは別れの瞬間でもある訳だ…。

出会って間もないけど寂しいものだな…。

「…ヤマト、これで俺らはお別れだ。最後にコレを受け取ってくれ。」

「コレは？」

「ソダイ量産型、それからテラックスボンバー増幅装置装備の鷹の手、若返り・老化マシーンだ。」

俺の感謝の気持ちとして受け取ってくれ。全部さっきの話の中に出てきた俺の発明品だ！友情の証として使ってくれ！」

「レオナルド…流石に若返り老化マシンはやり過ぎな気がする。」

「ここはジーンってするシーンなんだよ！空気読め！空気！」

「…でも、確かに受け取ったからな。レオナルド、俺は忘れないからな」

「当たり前だ！俺だって忘れねえよ!!」

握手を交わすとレオナルドは夜逃げマシンスペシャルに乗り込みエンジンを噴かすとゴオオオと音をたてながらタクシーはガシヤンガシヤン音を出したと思うと戦艦に変身。そのまま何も無い空間に入っていくように帰っていった。

「……………」

終わってしまうと全てが幻だったかのように感じてしまう。

だが、手元にある玩具のような掌や顔が適当に書いてあるロボット、玩具によくある音を出して光る光線銃のような機械が、現実だということを証明していた。

俺はその中から赤い掌、鷹の手を持ち上げるとエネルギーを指に集めると短く唱えた。

「アラボっ」

波動砲よりは威力が劣るが、それでも明らかに殺傷能力の高いソレは光ながら空に瞬いて行ってしまった…。

マシンガンと繊細な心

後悔は先にたたないとは誰の言葉だっただろうか…。

俺には全く分らないがそれでもこの言葉がどれだけ正しいのかというの身をもつて知ったばかりだった。

「一体貴方が何をしたのか話して下さいませんか？」

「スイマセンデシタ…」

「いえいえ、責めている訳ではないですよ？むしろ逆です、逆！こんな話題間違いなしのネタなんてそうそう転がってる訳じゃないんですから是非と思つて、インタビューさせてもらつてるんですよ!!」

妙なのに絡まれた…。

この時ほど自分の浅はかさを恨んだ事はないだろう。目の前の艦娘は目をキラキラさせながら俺の周りを嬉々としてグルグルしている。女性にする言葉ではないがまるで何かにたかるハエ…：その形容したくなるほどの執着だったのだ

興奮冷めやらぬとはこういう事を言うんだと考えるのにそう時間は要らなかつた。

「では、あの時の私目線で見た事を話すので修正して下さい！では行きますよお？」

この子のテンションはおかしなぐらい高いのだが、せめて自己紹介位は始めにやってほしい物だ…。

もし尻尾があれば扇風機の如く、またはプロペラの如くブンブンと荒ぶっているのが目に見えている…本当にそれぐらいにハイテンションなのだ。

「そもそもその事の発端は私が遠征が暇でコツソリ抜け出してこの海域に入ったのが問題でした。面倒な仕事から解放、そして今どこの鎮守府でも話題沸騰のヤマトさんがいる此処に事前アポ無し突撃インタビューができるんだとワクワクしながらそりあスキツプでもし出しちゃう位に調子に乗っていた私です。そんな心境でルンルン忍びこんだ瞬間に駆逐艦ハ級の群れに遭遇しました。私は一人に対してハ級達は五艦です。誰の目から見ても絶体絶命という訳です。流石の私もちよおっと、深入りし過ぎたようですね。でも、諦めずに三匹までは大破させたのですけどこちらも気付けば既に大破状態です。その状態で無傷の二匹の深海棲艦を相手するには緊張する訳ですよ！緊張は高ま

り、青葉は手に汗を握りながら二匹の八級の攻撃を受けないために注意深く相手の一挙一動見逃さないように慎重になっていた所で、私は一つのミスをした訳です!! 何とそんな大事な瞬間で弾薬が切れてしまいました。

私には打つ手も無くなってるんですから後は八級に沈められるだけとなってしまうました。それを好機と見たのか八級は格好の獲物だと言わんばかりに飛びかかって来ました!...でもお、神様は居た! そう、こうして私は助かっている。死を覚悟した私はこれから襲いかかるであろう衝撃に体がすくんで身動きがとれないまま一瞬という長い時間を背けて己の体を抱く。しかし、そんな予想とは反して何時まで経っても襲つてこず恐る恐る戦々恐々とした面持ちでゆっくりと目を開きます。目の前には飛びかかってきた筈の八級ではなく、一人の男性の広い背中...。何かを背負い、颯爽と現れ、自分を顧みずに身を挺して守ってくれていたのです!!

敵はヤマトさんの腕に捕まれて、ぷらーんとしながらビクビクしていました。私はその一部始終しか見ていませんが、それは正に白馬の王子様のようにでした。強い彼は私を守るために一瞬で駆けつけ、目の前に躍り出るとパパッと脅威から救つて見せたのです! ですが彼は大人特有の落ち着きを持って居たためか、八級を殲滅するのではなく頭を撫でながら叱つて見せたのです。叱られた八級達は頭を一度下げると撫でてくれた男の手にすりよったのです。言葉を理解するとは考えられて来なかつた獣を男は従え

たのです。ええ、それはまるで物語のワンシーンさながらでした。

彼はハ級達に満足げに、慈愛に満ちた微笑みでもう一度一撫ですると労るかのよう
に傷付いたハ級も救つて見せました。

でも、物語は此処で終わりません。彼の男は帰つていくハ級を見送ると今度は恐怖か
ら力の入らない私に向かつて手を伸ばし、頭を撫でるところ言いました。『よく頑張つ
たな』と。そして、男は私の手を引くと優しく立たせてくれたではありませんか。安心
するような彼の優しさに浸っていると、彼は蕩けるような声を出して『でも、やんちゃ
が過ぎるよ？女の子なんだから怪我をしないようにしないと。心配してしまうだろ
う？』とハ級に向けた時とは違う見る者全てを魅了するアダルテイで、ダンテイで、ハ
トブレイクするような笑みを浮かべました！勿論私はこの瞬間に恋に落ちたのです。

そのあとの事は………」

第一に長い。次に途中で物語って言っちゃってる。後文句を付けるなら、いきなり語
り口調になり始めたり、盛り上げるためか嘘が混じっている……。修正する暇さえ与えな
いマシガントークはよく嘯まないで言ったと感心するよ、ホント。

「俺はアダルテイでダンテイな笑みなんてしてないだろうが!!」

「そこは私の感性の問題なので大丈夫ですって！」

「…まあ、いいだろう。なら、此処に踏み入れる切っ掛けは一人一人役目を持つてやっている仕事から逃げるためとか言ったな？」

「…テヘペロ？」

右手を頭の後ろに持つていくと舌を出し、片目を閉じてウインク…完璧なテヘペロと言えるだろう。でもサボったせいでこんなことになったという事を全く懲りていないようだった。役割分担あつての仕事だろうに、それをサボったとなれば仲間に迷惑がかつたんじゃないのか？そっちの方が俺は心配だよ…。

…全く。

しかし、まさか俺がこんな訳分らない巻き込まれ方をするとは思えなかつたな…。ヲ級と炬燵で和んでいた所をイ級が焦つた感じで来てみれば、ヲ級が今すぐにその場所に向かつてくれつて、焦つてたんだもんなあ。あんなヲ級は初めて見たよ。

それでヲ級に言われて急いで来てみればジャレたと思われるハ級が度が過ぎて大破してたのを発見して何があつたのかと焦つてみれば、ハ級二匹がボロボロになつている茶髪のシヨートのポニーテール(?)な女の子が一触即発な雰囲気醸し出していた

から。

で、焦った様子の女の子に飛び付こうとしていたのが分かったから飛び出して横から八級を掴んでどんな事情か聞いたです前に一先ず女の子がボロボロなのは八級のせいだろうと判断した俺は叱つたという訳だな

そして最初はジャレつこうとしてたらしいのだが驚いた女の子に砲撃を食らわされて段々歯止めが効かなくなつてああなつた（問題が片付いた後、ヲ級に通訳して貰つて知つた）らしい。

そこからは目の前の女の子に言われた通り…なのかは分からないが大体合つてるように褒めて落ち着かせて帰るように言い聞かせたという事。

「…実際はこんなもんだよ。」

「…ふ、普通ですね。ヤマトさんの事ですからもつとやらかしくれると思つてたのになあ…ううーん…ま、大丈夫です。記事にするときは何時ものように盛りますから！」
「それがさっきの奴か？ だとしたら盛ってるんじゃないかと捏造の域じゃないかと、俺は思うのだけど…」

「いいんですよお〜！ ヤマトさんが分からないと言つてるのはどうせ私が感じた所何で

すよね？なら、私の体験を基にしたってだけなんですから捏造なんかじゃないんですって！それに、女の子はこういう記事の方が受けがいいんです♪」

「…そういう物なのかなあ」

「ある面から見れば本当のことであり、真実です。私が感じたものは全て偽りのない事実なんですから」

はにかむ女の子はおちやらけた言葉ではなくその顔は真剣そのもので彼女の言葉の真実味がより増していた。それをスゴいなあと感心していながら、ある事に気付いた。真実味のあると言うことは本音から来るという事で…：俺は顔が熱くなった。自分の思い違いだろうが女性にあんなことを言われてしまうと恥ずかしくなる…。

「君の言葉を疑う真似をして済まなかった。…一つ聞きたいんだその白馬の王子様って」

「うえ?!…あ、あ…ああー!!?あの、アレクス!さつき言った言葉今すぐに忘れてくださいよお!?!青葉のあの言葉　まるで告白みたいになってるじゃないですかああー!!」

何を言われてるのか分からないという顔をする青葉と名乗る少女は次の瞬間には俺

以上に真っ赤に染まり、アタフタし始めていた。告白とは一体なんだろうか？

「君がそういうなら忘れるよ、青葉…が君の名前つて事で良いのかな？ そうなら青葉って呼ばせて貰っていいかな？」

「このタイミングでそういうこと言われると…いい、いい意識しちゃうじゃないですか。」

「青葉は俺のこと詳しく知ってたみたいだけでもしかして何処かで会った事あったのかな？」

「くど、く…くくく口説かれてる!!？」

焦り方が先程から尋常じゃないんだが…アレは大丈夫なんだろうか？ 汗とか出る位に顔を赤くして慌ててるし…湯気も出てないか!？」

「おい、青葉!」

「いひゃあぁー!?!？」

心配になって青葉に呼び掛けながら落ち着かせようと肩に両手を乗せて身動きを取

れないようにすると、その瞬間に腕を弾かれ凄く大きな声をだして叫びながらあつという間に視界から消えてしまっていた。

：俺つてもしかして避けられてる？

触っただけで大絶叫しながら逃げられるつて…嫌われてるとかって話じゃ済まないよなあ？…俺が一体何をしたと言うんだろうか…。

あ、涙が出てる……。

青葉あ…せめて何がいけなかったのか位教えてください。

などと、幾ら弱音を吐いたところでその声は届くことは無いと知りながらもそれぐらいしか今の俺には出来ることが無かったのだ…。

次会ったときは謝らなくちやな…。

青葉…青葉？…あ、ヲ級の会話で出てきた人物じゃなかったか!?

：ヲ級に相談しながら何が悪かったのかを反省しよう。うん。それが今の俺に出来る贖罪かな…。

俺はこの世の終わりでも迎えるかのような気持ちになりながらゆっくりとヲ級の基に戻っていくのだった。

砲撃音のその先に

よく分からないまま青葉とは別れた。で、ヲ級とも話したんだけどニヤリと笑うと「ヲツヲツヲ〜♪」と機嫌がよくなると同時に青葉とは色々とお世話になってるらしくこれからが楽しみだとかなんとか…。

正直黒い笑み半分の純粹な笑み半分という何か企んでそうな顔だったけど気にしない方が良いとの事なので気にしない事にした。

ヲ級なら決して悪い事といっても戦争に発展するようなことではないだろうから見逃しても問題はないだろうなという考えだが、出来れば程々にしてほしいと思う。棒名さんたちと初めて会ったときのような冗談は心臓に悪いんだから…。

ま、その時はその時だろう。

臨機応変に対処していこう…。俺としてもヲ級と一緒にいるのは楽しいと思ってるんだからな♪

と、考えてた時だったかなあ。水面を揺らす大きな砲撃音が鳴り響いて現実に戻され

た。

つい最近に青葉のあの出来事で、それが戦鬪の狼煙であることに直感で勘づいた俺は音の発信源に向かいエンジンを噴かす。ゴオオという一瞬の音を置き捨て、飛んでいく。

砲撃：その発信源は深海棲艦の子でその前には二人の戦艦の子が反撃もせず避け続けているのが近づくにつれ見えるようになっていった。二人の少女は茶色い肩まにかかる位の長さの髪が跳ねていて、それに反するように後ろ髪はピンっと伸びた子と黒いストレートの腰まにかかる長い髪をたなびかせる艦娘で、茶髪の子は中破しているらしく剥き出しの肩やスカートから伸びる脚から血が滲んでいた。黒髪の子も茶髪の子を庇うようにしているため、小破程度だが明らかにケガをしまっている。

それと敵対している深海棲艦の子は無傷で見たことも無い子だった。：と言うことはきつとあの波動砲の時の宣言を知らない、又は無視している状況なのだろうと推測される。

そして茶髪の子が避けられないという状況に気がついたようでニヤリと厭らしく笑い、茶髪の子ばかりが狙われていた。黒髪の子はその砲撃から守る為に避けられないでいたために大破寸前になっていた。

「やめろおおおー！！」

ま、柄にもなく叫んじやったんだが致し方ない。深海棲艦がトドメと言わんばかりに砲門全てを茶髪の子に向けた瞬間に墜ちていくユキカゼと姿が被って見えたんだ……。気付いたときには射線上に飛び込んだ。手を伸ばせば届く……今度こそ全てを救えるかもしれない。今の俺にはそれを成すだけの力がある――

エネルギーの大半をエンジンに回し、防御し衝撃から守ることなくむぎむぎと的に背を向けながら二人の前に躍り出ると勢いを殺すことなく海面にぶつかりデカイ水柱を上げながら急停止、二人を抱き寄せるように胸に引き寄せ、襲い来るであろう砲丸から守る。

「――女の子がそんな危険な事をするんじゃないやねえ!! 誰かが怪我でもしたらどうすんだ! その綺麗な顔に傷がついたらどうすんだっ!!」

……焦つてたのは認めよう。何故かそんな事が頭に浮かんでたんだ。とっさだったから余計だが両者にそんなこと言っていた。しかりつけられた事も理解が及ばないままポカンとしていた深海棲艦は一瞬で湯沸し器の如く湯気を出していたようだったが海に潜っていくように巢(?)に戻っていった。かなりの速さで追い掛ける事も不可能

だったから何も出来なかったがな。

で、怖かったからなのかそれとも衝撃から耐えるためかは判断がつかないが目をぎゅつと閉ざしていた状態から恐る恐るといった感じで目を開ける二人は俺を見て絶叫を上げていた。

…たしかに怖い思いをして切り抜けたと思っていたらいきなり目の前の視界いっばいに異性がいたら俺も驚く。最悪失礼だが声を上げてしまうかもしれない。

…で、背中への直撃による被弾で衣服が焦げ、少し赤くなっただがこの程度なら問題は無い。でも、顔に出来た紅葉は痛かったとだけ言っておく。心とかが特に痛い…弁明も説明もしないがな。俺が悪かった…以上である。

「—で、あるからして…む！おい、しつかり聞いているのか!!」

「あ、はい。たしか元帥さんの使いとして来たんですね？ それでどれだけその元帥さんが偉いかのレクチャーをしていてくれていた…と」

目の前で話しているのは黒髪の方の長門さん。

「何故説明口調なのかは問わないがしつかり聞いていたようで感心だ。」

「あーいえ、照れ臭いので頭は撫でないで下さい。」

「ふふっ、長門姉さんがこんなに素直に自分をさらけ出してるのは珍しいのよ?」

「む、陸奥!!」

長門さんに怒られたのは呼ばれた通り陸奥さん。長門さんとは姉妹である。

「きゃー怖い!また守ってくださいませんか?」

…すいません。思考が追い付いてませんのであと然り気無く押し付けてるそれを離してくださいと嬉しいですね、はい…。

いや、俺だって男だからそういうことされて嬉しくない訳じゃない。だが、やはりそういうことは好きな人にやるべきだ。気軽にボディータッチはするべきじゃない…もつと自分の身を案じてほしいのだよ。

「…ヤマト、貴様妹に不埒な考えを抱いたのではないだろうか？」

「まさか、今は一つの意思ある者として、誇りある日本男児として、ヤマトの名を冠している以上俺は時と場所弁えるさ。単純に陸奥が接しやすい性格なのは分かったけどもう少し身を案じてほしいと思っただけだよ。」

「む…そうか…。（…自分が情けないな。まさか妹に嫉妬していて今のような事を言ってしまったなどと…それに対してもヤマトは寛大な態度で気にせず、己を突き通す…彼なら信用しても良さそうだな。…それにブツブツ…／＼／＼）」

目を閉じて熟考をしているようだ。

…因みに彼女達がここにいる理由は遙か遠くの海域から遠路遙々俺と会いにきたらしい。

というのも、何処の鎮守府内でもあの波動砲の一件で忙しくなってしまったというらしい。…報告書を読んだ偉い人達は自己保身に走り、干渉により矛先が向かないように不干渉を決め込んでいる者もいれば過剰戦力である俺の力を物にして出世しようという野心家達もいて、また俺の存在を認めないと戦争を企てる者達まで出てきている…らしい。

故に、ひっそりと元帥から長門と陸奥の二人は俺の人格や危険性についての調査を任

された…らしいのだが成り行きでこうして隣にいたりする。

「…ふふ、さつきまでの横顔は凜々しかったのに素顔は可愛らしかったのね♪」

「…可愛いというのは分からないが、敵対する意思のない者なら友達になれるからな。それに、長門の説明で事情は理解したからな。あと、近いです。」

「照れてる照れてる。でも、それが嘘という可能性は考えなかったの？」

「ない。あの言葉は幾ら事前にも用意されたとしても本人の気持ちまでは本音じゃなきや宿らないよ。それに信用に足る人物である以上無駄に疑いはしないよ。」

間髪いれることなく即答する。元帥の話をしている時の長門は真剣そのもので…出会って間もないが俺の目から見た彼女は融通が効かないぐらいに真面目過ぎる性格だという事は理解できた。そして真面目すぎる長門を補うように妹である陸奥が肩の力を抜かせるようにわざとちららんぼらんな性格を装っている…というのが俺の感じた二人の特徴だろうか。

「二人で一人…いい姉妹だな。互いに助け合う精神は是非とも見習いたい物だよ。」

「ふふ、いきなり褒めても何も出ないわよ。…で、でもありがとう」

「そんなんじゃないさ。ただ、思ったことを口にしたただだよ。…って、少しクサイセリフだったかな？」

少し赤くなる陸奥。むう…そんなに臭かったかなあ？てか、今思ったけど俺って年上っぽい女性に弱くないか？いや、きつと気のせいだ。問題ない。

自滅してるだけ、思ったことをそのままいっただけだけど大丈夫だよな？

あれ、なんで自滅したって認めてる？（混乱中）

「長門姉…私アレお持ち帰りしたい。」

「奇遇だな陸奥。ヤマトは凛々しくもあり可愛くもある。…アリだな」

ビクッ!?

はっ今何か不穏な気配が!?

少し後ろの方で俺をジーっと見つめる陸奥と復活していた長門はまるで獲物を前にしたライオンのようでした。何を話してるのかまでは意識してなかったせいで分からなかったが身悶える俺を見る目が少し変だったような気がしたのだった……

襲われ、襲う…ヤマト、壊れゆく。

ううん…っは!?

ここはいつたい…真っ暗で何も見えない…目からの情報の取得は不可能と理解したので諦め、耳を澄まし聴覚だけに絞り心を澄ましていく…。

—ざざー…ざざざ…ざ、ざー

壊れたラジオから流れるような…そんなノイズ音だけが俺の耳の奥で響く。耳鳴りともでもいうのだろうか？ だが次第にその音は無秩序な物から法則性を帯びていくような整ったものにかわってゆく…モールス信号だとすればこれは？

—わ、た、し、い、ま、あ、な、た、の、う、し、ろ、に、い、る、の

—私今、貴方の後ろに要るの

っ!!?

バツと振り向きそうになるがそれを寸前の所で食い止めた。だが、さつきまでは感じることの無かった何者かによる気配が背後にはりつくようにベツタリと：それこそ潮風のようなじんわりと感じるようになってくる不快感が振り返ったそこにあるのは感覚で理解していた…。

そしてその気配はまるでその考えに行き着くのを待っていたかのような瞬間に実体を持ったかのように俺の体に触れた。

俺の背後：右から腹の横を通り服をまさぐるように侵入してくるとヘソを撫で、左からは腕を掴みゆつくりと引き寄せられる。

まるで誘導するように視線は意識とは無関係にその誘われる方に向いて行ってしまう。俺の腕を掴むのはキレイな細く長い指に白い肌：女性の物であると分かった…。

—ふ、フフ。ああ：触れている。貴方のは他の子とは違って硬くて力強いのね…。思わず疼いちやうわあ

耳に吹き掛けるように至近距離でそんな事を呟かれていた。

：ゾクゾクっ！そんな擬音がぴったりあてはまるように脳を痺れさせる。肌にはひんやりした白い手が這う。

俺は何故だかいつの間にか思考をその言葉の主に向けるようになっていた。敏感になつていく感覚。まるでそれは…

波動砲の撃つ寸前の緊張感のようで、静かに、そして熱く高揚していく。

俺の持ち得る五感全てをフルに稼働させるように鋭敏になつていく感覚が俺を支配する。ここが何処なのか…今触れているものがなんなのか…聞き取れるもの全てを聞き漏らさないとでもいうように物音一つにでも感じてしまう…。

ガシャン、ググ…

背後を取られている状態での物音。それは金属と金属がぶつかり合う物々しい音が直ぐ後ろで聞こえ出す。

今、俺は無防備だ。さらに相手はいつでも至近距離で撃つことができる…威力もさることながら、これでは外すほうが難しいだろう…俺は覚悟を決め、張り付くものを引き剥がすことを決意した。

スツ：

だが、俺の決意を嘲笑うように張り付いていたひんやりした白い手はここでも思考を
読んでいるかのようなタイミングで俺の拘束をほどいた。

何か考えがあるのだろうか？それとも安心させてからの奇襲か？疑心暗鬼になって
いくのは分かっている：だが、考えれば考える程不可解な点が増えていくため、どんど
んその深みにハマっていく。

フアサ：

何気なく聞こえたその小さな音は鋭敏になっている俺の耳に残った。それは衣服を
脱ぐ時のような小さな音だったが俺が聞き取るには十分過ぎたようだ：続け様に音
は続く

シユル…スツ…バシヤン!!

思わず跳ね上がってしまったような大きな音は俺の耳をダメにした。くっ…水面に重
いものがおちたような音だったが、静けさに慣れた時に聞いてしまったために耳が痛く
なる。

だが、その音は俺の中にあつた謎の全ての辻褄が合う瞬間でもあつた。パズルの組み合わせが合わさっていくように紐解け答えが導かれたのだ…

故に俺は全ての無駄な足掻きは無用と打ち捨て、ただ己の心のままに慟哭するが如く、思いの丈を叫んだ。

「艷装をはずしてんじゃねえー！！！！！！」

どうやらキャラが壊れるのは定めのお楽しみです。服脱ぐよう…じゃなく本当に脱いでいただけ。肌に服が擦れただけの音にドキドキと警戒していた己のバカさ加減に驚きを隠せん。そしてお兄ちゃん…もう心が折れそうです…ユキカゼ…。

振り向き様の渾身のツツコミはその女性の頭に導かれるかのように中心をキレイに捉え、その拳を叩き込んだのだった。

シユウー…

白い煙？湯気？だかを拳の落ちたその頭から上げながらゆつくりと倒れていく女性

は何処かで見えた深海棲艦だったが心なしかその表情は清々しそうであった…。

…顔の艶が良かったような気もするがそれが俺にくつついた…又は殴られて…というのが原因じゃない事を切に思うのである。この考えに行き着いた時点で俺は何処かおかしくなっていると驚くなかで静かに達観して冷静に考える自分もいることが何処か我が事ながら面白かった…。

女性をツツコミを入れる為とはいえ、実質殴ってしまったので放置するわけにもいかず介抱していた。

…勿論彼女が脱いだジャケットは体にかけてある。

上半身裸では風邪をひかないか心配だったが勘弁願いたい…意識のない女性服を着させるとなると嫌でも彼女の体を視界に入れなければならないわけで…その、まあ…な

んだ。俺には無理だった。

ヘタレということなかれ、仕方無いのだ…。

コホン、兎に角女性に俺の上着もかけてあるが…たぶんそれで大丈夫だろう。

女性についてだが、何処かで見たことがある…といったがそれを思い出した。

彼女は長門と陸奥に嬉々として砲弾を撃ち込んでいた深海棲艦の子だ。腿まで届く長いツインテールの白い髪に上半身は黒のジャケットに黒いビキニ(?)で下は上に合わせた黒ビキニだけと黒いニーハイソックスという何て言うか女性に失礼だが痴女…みたいな格好だった。

普段は艦装をつけているからそこまで変態チックに見えないかもしれないが…さつき自分で外して脱いでいるので結果としてニーハイソックス+水着(下だけ)の何処からどう見ても変態な女性が出来上がっている。

その女性を膝枕している自分がいったい他者からしたらどう見えるのかなんて決まっている。同族…つまり変態だろう…。そう考えると本気で笑えなくなる。

早く起きてくれと思ってしまうのは間違いないだろうか? いや、きつと間違いじゃないはず!!

「…ウ、ウウ…ん…っ?!」

「あ、起きたみたいですね。じゃあ、俺はこれで」
「待チナサアイ。」

腕を掴まれたので力を入れ無理やり抜けようと考えたが、一応謝るのも必要か…と遅れながらに気付いた為に溜め息を一つすると共に彼女に向き直った。

そして言葉を失った。

…考えても見てほしい。さっきまでの彼女の格好を…

更に、いきなり起き上がったたりしたらかけていた物はどうなるかを…

「きやー、エツチ」

「棒読みじゃねえか!!てか服を着ろ!あと隠せ!!」

「見ラレテ恥ズカシイヨウナ身体ハシテナイワア。」

「そういう意味じゃねえ!!羞恥心を持ってといってるんだよ!」

「…ツハ!?!モシカシテキヤーエツチト言ワレルヨリ、私ニ何ヲスルツモリダツタノ!!エロイコト…ソウナノネ、エロイコト事シヨウトシタノネ!?!ノハウガ好ミダツタノネ?」

「選り好みじゃねえし、関係ねえよ!!」

黙ってたら永遠と色ボケ続けそうな勢いのアホを今度は昏倒させない程度の力に削減をしてチョップをおみまいする。本当に洒落にならない…。あと、どれだけ言葉で取り繕っても冷静じゃないのはわかっているらしく常にニヤニヤしながら何時までも着替えずにこちらに見せ付けてきていた…。

チョップされてそこで初めて渋々といった感じでジャケットと上を着てくれた。勿論視線は後ろを向いたから見えてない。音と声音からの判断だがな。

「…じゃあ、真面目に話しましょうか。」

先程までがおふざけだったという様子で目をスツと細くし雰囲気も一触即発のような物にする目の前の深海棲艦の女性は目の前で足を組み、カリスマ性を醸し出しながら此方を値踏みするかのような視線を向けた。

それが何かの合図だったかのように俺も真面目な時の自分にカチリとすり変わる感覚が伝わった。

俺をここに拐った理由も戦う為ではなくもしかしたら対談をするつもりだったのかもしれない。戦うためなら意識を取り戻す前に攻撃を始めたら良かったのだから。

…と、考えていた時に長門との会話の一端を思い出した。

「…助けてくれて感謝する。そして会いたかったぞ、宇宙戦艦ヤマト殿…」

私は貴方の考えを聞かせにもらいに来た。というのも、最近我が鎮守府内に貴方の力を我が物にし力を欲する不逞の輩が出てくるようになったからだ。そちら関しては出来れば拒否してほしい…いきなりで悪いがその件は出来うる限り我が鎮守府内でも対処しているがもしもの対応だと思ってくれていい。」

「本当にありがとうね。私達も貴方に会いに来たのは良いけど鎮守府付近の海域からずっと付けられてみたいでこの海域ギリギリで奇襲されたんだけど、この海域での戦闘は禁止つてことになってるから反撃する訳にもいかなかったの…でも、来てくれると信じてたわ、ヤマトさん」

俺は静かに口を開く。

「…力を貸してくれというなら他を当たれ。俺は俺の戦いという物がある。」

それがどうい理由であれ、深海棲艦と艦娘の戦いというなら余計に手を貸すわけに

はいかないんだ、諦めてくれ」

「ふふ、やっぱりね。そうだと思つたわ。貴方は固すぎねそうじゃないわ挨拶をしようと思つただけ…南方棲鬼それが私の名前よ」

「…ヤマトだ。奇襲したと聞いたが挨拶だけ…それを信じろと？」

「信じるわねえ。貴方を拐う前のこと思い出せなくて？」

「……………」

それを言われた瞬間に認めなくてはいけなくなつた。

長門と陸奥に襲われそうになつた…それこそ二人がかりで腕がされかけた時に腕を掴んだ奴が居て、海面に引き摺りこんで意識を失つた。

…それは救つてくれたのであろうとタイミング的に判断出来る。それが彼女だったとしてまだ分からない。

なら、一体何で長門達を襲つたりしたのかという疑問は尽きない…。

「ヲ級…と言えば私達と艦娘の業界では知らない人は居ないと言われる人物なのよお？」

「…ふむ、つまりこの一連の騒動には一枚ヲ級が噛んでいる…と言うのか？」

「ふふ、察しのいい子は好きよお？でも、貴方は勘違いしてるわねえ？」

俺は彼女が何を言っているのか一瞬理解に苦しみ、怪訝な顔をしてしまう。その様子を一瞥した南方棲鬼の彼女は不快な顔をするどころか、この心の読み合いを心底楽しそうにして南方棲鬼が俺が勘違いについて熟考する姿をすると悦に入つたように顔を上気させる。彼女の行動は先程からずつと理解に苦しむ…。

何か彼女には目的が有るのだろうか？

だとしたら話す気など一切なく笑つて誤魔化しそうなので何としてもその原動力となる目的への活路を探さなければならぬ…。

キーワードはヲ級…となると思い付く切っ掛けにはなるのだろうかから思い付く限りで振り返る…。

最近は何やら忙しいからと余り姿を見せてなかつた。深海棲艦での知り合いは俺には少ないためにどうしているかは想像し得ない。

だが、彼女が何もしてないと言うことは何時だかのイ、ロ、ハ（以下略）級との交友が有つた事からあり得ないと断定する事が可能である。

初めての出会いまで遡ってもそこまで彼女はおかしな行動はとつて…ないとは言えないのがヲ級だなあ。友達として悲しい性だよ、全く。でも、だからと言ってもネタば

かりの彼女だ…どれがどう繋がるかなんて予測するとなれば時間がかかってしょうがない。

そうなると矛盾点を探す必要があるだろう。

…ブラックジョーク?…は関係ないか。

「いや…ちよつと待てよ。そういえば丁度アノ時だったよな?」

閃くものがあつた。いや、彼女にしては珍しいネタだったがその時は新しいパターンで責めてツツコミ待ちなのかと思つて気にしてなかつた。あの長い夢の話は彼処までやつて初めて自分から終わらせていた。ポケとしては彼女の好む種類のポケでは確かにない…。

彼女は短い合間にポケを連発し、スピーディーなテンポ重視の傾向にある。…違和感があるがもしかしてそれが布石になるのだろうか?

…もしかして青葉、か?

それは流石に考えすぎだろうか…。

「そうだ!!」 知り得ないと言えばまだある。…ヲ級の俺に対しての宣伝に関しては一任

してるからどうやってるのかは分かってない。ひよつとしてそれが原因なのか!」

南方棲鬼は俺が驚愕する表情を見て、生徒を見守る先生のような生暖かい瞳をする。：俺が不埒なのが原因かもしれないが格好と相まって色気を感じてしまう。：思わず照れ臭くなりプイッと視線を違うところに向け気を紛らわせると平静になるまで御経を唱えて煩惱を抹殺していった。

「結果的ナ面デ見レバ正解カシラア? 私トノ会話デソコニ行キ着イタ事ニ驚キヨオ: デモ、驚カセテモラツタ対価ニハ見合ウハネエ。ナラ話スワヨオ?」

予想外だったらしく嬉しそうに破顔する彼女は実際に声を出して可愛らしく笑うと俺は何時しか見惚れてしまっていた。純粋な笑顔が綺麗だったから: そんな表情も出来るんだなあなんて思い、此方もそれを見て微笑んでしまっていた。

どれだけ時間が経ったのか分からないが、落ち着きを取り戻した様子の南方棲鬼に習い、俺も聞き漏らさないように真剣に耳を傾けた。

「: 深海棲艦ヤ艦娘全員ノ業界: トイウ事ジャナイノ。我々、YAMAT(ヤマット): :

ヤマト様二憧レ求メ崇メルTeam（隊でも可）トイウ者達ガ我々ノ業界デハ存在シ一般トシテ認知サレツツアルワア。創設者ノヲ級二初メ、公報担当及ビ副隊長ノ青葉ガトツプトシテ君臨シ今デハ娯楽ノ少ナイ私達深海棲艦ト艦娘ノ間デ面白半分デ頭ヲ突ツ込ンデノメリ込ンデイク者ガ多発。

現在デハ次第二広ガツテイツタ勢力ハ政府モ無視出来ナイ物ニナツタ為ニ知ラヌ者ハイナイ位ニナツテイルノヨオ？提督内デハ折角ノハーレムヲ脅カス存在トシテ敵対スル意識モ芽生エテルトノ情報ガ私達ノスパイカラ入ツテル。：人間ナンテドウシヨウモナイワネエ」

「…人間がじゃない。欲深い者だけだ…それが全てじゃないよ。何かを欲しし必死になれるのは生物として輝かしいことだからそれは仕方無い事だ…。だがそれだけの理由で俺ではない誰かに矛先が向かうようなら此方も手加減なんてしない。己の弱さに負け、艦娘が傷付くのを平然とし後ろで隠れるような臆病者な輩なれば塵すら残さず殲滅するだけだ。誰かの痛みを知らないもの者が人の上に立つなど言語道断。覇道の下の礎としてくれる！」

少し熱くなりすぎたのかもしれない実際にはそうならないことを誰よりも願っているくせに口ではこんなことを言ってしまうていたのだから…。

でも、この覚悟はとつくの昔に：それこそ戦いに出向くことになった全ての始まりの日に、沖田艦長が初めて一戦艦でしかなかった俺を認めてくれた始まる前の出会いの日に出来ている。平和への架け橋になることだってそう簡単な意志で決めたんじゃない。なら、俺はこの一つの言葉に責任を持たせるだけだ。

これは俺への楔だ。

誰かの為になんていう押し付けじゃなく、俺自身への意志だ。

絶対に曲げちゃいけない信条だ。ここまで豪語したんだ、やらなきや男が廃る！

「：ソレガヤマトノ決意ナノネ。コレハヲ級ヲバカニナンカ出来ナイワ：：ナルホド、過言デモナク本当ニ頼リタクナルワア。モシ暇ナ時ガアレバ私ガ居ル此処から南東に直進ニ海里程ニアル所マデ来ナサイ。持テ成ス位ナラシテアゲルカラ
 (クツ：：全ク私トモアロウ者ガ又人ヲ好キニナルナンテネ：：アンナ真剣な目ヲ見セラレ
 チャドウシヨウモ無イジヤナイ：：／／此処マデ私ニ言ワセタンダカラ来テクレ無
 カツタラ夜這イデモカケチャオウカシラ、ナンテネ♪)」

南方棲鬼は柔らかな雰囲気でそう言うと言を繋ぐと恥ずかしそうにしながら上へと俺を引っ張っていく。

光が差し込む天井はユラユラと揺らめき、光を揺り動かす。揺らめくそれが波であることはなんとなく理解することが出来た。それは戦艦であるという本能からくるものなのか、知識からくるものなのかは分からなかったが綺麗だと思った。

南方棲鬼に光が照され、少し赤くなつてた顔と白い髪は光を吸収して光つてるようにも見え彼女は絵本の中から飛び出した幻想的な存在に見え、こういうのもたまにはいいかという気持ちにさせた。

「…おふざけが過ぎえたけど、楽しめたよ。ありがとう」

その眩きは聞こえたかは分からない。でも、それでも口にしたかったから俺は小さくそう言った

沈黙の鎮守府、恐怖染まる二人

とある日の出来事。

最近出番として認知すらされなくなつた輸送艦兼補給艦(?)のドラム艦。そこ上で在ることに気付いた。

足を入れると炬燵の中でカサという音がして、何か薄い物がある感覚がした。炬燵に手をつ込み、掴み、引つ張り出す。そこから出てきたのは一束の紙だった。

一枚一枚は薄いレポート用紙だが、何枚も重ねてあるように爪先程度の厚さのソレ。表紙には上に2つ穴が空いており、そこに黒い紐を通し蝶々結びで纏めてある。自分のではないソレは何時だか来ていたレオナルドか球磨か、ヲ級の物であろう事が予想される。

誰のものだろうか?という疑問はやはり尽きない物で、一度気になると確認したくなる…。

もし、レオナルドの物だとしたらどうしようもないんだが球磨のなら鎮守府も此処からなら近いためそこまで苦ではない。ヲ級ののだとしたらどこに居るのかなど知るよしもないため、大事に保管しなければならぬ…ということになる。

「これは確認作業だ。…だから、疚しくはない」

いや、誰に対しての言い訳だよ！とセルフツッコミをいれつつ表紙の文字を：言葉が出ない。

頭が真っ白になった。そこにあつた文字は到底理解が及ばない。てか、こんな需要があるのか!? 誰だ! こんな馬鹿げた物を作ったのは!! とか色々言いたいのが落ち着こう。そして、落ち着いたのを静かに確認するとまたそこにあつた文字に目を向けた。そこにあつた文字とは…

『第一回議案 宇宙戦艦ヤマトについて くあの子の気になる○秘情報も載せよう。はあと〜』

はあとつてなんだよ!! マル秘つてなに!? 胡散臭すぎるだろ!!

落ち着くなんて出来なかった。…え、なに? もしかしてヲ級つてスパイかなんかだったのか!?

最初はヲ級と断定したが、おふぎけした名前ならまだミクロの世界でまだレオナルド

の可能性もある…。だが、思わず視点を移動させ下に向け、黙り混んでしまった。

『提供、YAMMAT及び幸福湾鎮守府の提督ポケットマネーより』

つい最近に知ったYAMMATの文字について、これには頭痛すら感じずにはいられなかった。ヤマトに憧れ求め崇めるチーム…通称ヤマット おかしな宗教団体様である。これの開祖であるらしいヲ級と裏で同じ色々とやらかしてくれているらしい青葉。そして此を見た瞬間にあそこの鎮守府の女性提督さんもグルであるということが判明した。これでこのアホな物がヲ級の物であるという事が絶対的な確信へと変わった。

…提督さんもまともになったと評判で最近には鎮守府内の艦娘の方々に好評だったのに裏では全力で馬鹿だったようだ。

怒る気にもならず、最早呆れてすらいる。…もういつそ遠くに逃げ出そうかな…。最低でも一週間は鎮守府には近付きたくないよお…

あ、そう言えば南方棲鬼が暇なら来てくれって行ってくれてたっけ…うふふ

壊れる寸前で気持ちを強くもち、誤魔化すことでどうにか食い止める事が出来ました。心を強くもち、そのままレポートの一枚目を捲り笑いながら見て硬直。そのままの

体勢のまま何拍かは自分の体感では分からないままで我に返る。

そして思いの丈をそのまま叫んだのだった。

「ブルータス、お前もかつ!!!」

何故かと問われたら、そこに書いてあった文字だ。敵も見方もない。

議長 ヲ級

副議長兼広報部長 青葉

進行役 南方棲鬼

進行役代理 千級

書記 榛名、霧島

会計 幸福湾提督

盛り上げ役 金剛

盛り上げ役補佐 比叡

特別議会参加容認者 隼鷹、川内

る。参加義務はないものとする

※尚、特別容認は接触機会のあったものに限

拒否者 第六駆逐艦隊、伊58、多摩

マスコット イロハニホ級

置物 ヘト級

罪人 長門、陸奥、那珂

配達者 島風 (中身を知らせず運んでいる運び屋。部外者でもあるため、要注意)

罪人による罪状及び判決は次のページに記載。

マスコットってなんだ。置物扱いは酷い。罪人とは穏やかじゃない。知り合いを一部除いた全員の名前が記載されている…。本格的過ぎるだろう等々突っ込みどころが溢れているがなんでこんなものがあるのかっていうのが一番理解に苦しむのだが？

もう、いいよ。開き直って諦めるよ…もう疲れたんだ。でもせめて、雷や電、響に暁ちゃん達に会いたい…。

そして最後にこれだけは言わせてくれ…那珂に関しては置いておいて何で出会って間もない長門さんと陸奥さんが罪を犯してるんだ。この三人といわれても俺の印象で

は真面目に取り組む自分に誇りを持つてる女性だと思つてたんだが：一体何があつたんだらうか？

興味とか最早そういう世界ではない。兎に角何があつたのかを知るためにページを捲り、より一層疲れるのだった。

罪人による罪状及びに裁決

罪状

長門 三原則第一項に抵触する行為を行つた。詳しく話すなら王ヤマトさんを押し倒し情事に至ろうとしたとの事

陸奥 上記同様の行為をした。更には己の肉体を駆使し誘惑するまでに至る。うらやm：実にけしかららん：です

那珂 夜遅く、寝静まつた所を奇襲。王自らによる説得により未遂に終わる。王ヤマトさんは責める事もせず寛大なお心で許して頂いた。：流石と言わざるを得ないです！

判決

長門 三原則を知らなかつたという事もあり刑を軽くするが、押し倒したという事は

許しません！よつて、刑は三日間の監視です。悪さはさせません。

陸奥 上記同様の罰です。でも、その大きな胸で誘惑した…というのは絶対に許しませんからね！だから罰を増やしましょうという事になりました。拘束のち誘惑したその部分を一時間ほどつくつく刑に処します…つて何ですか!!この柔らかさに大きさは!!女性である榛名ですらこれですよ!!ヤマトさんはこれほどの物を押し付けられ…そんなのを耐えたのですか?!榛名だつて誘惑したいのに…そうしたら…

てかこのあと凄くビッシリ書いてあるんだが赤黒いこれは血か?…兎に角半分は埋め尽くすその文章には理解に苦しむ量の血によつて埋もれてしまつているんだが…これは榛名さんを見舞いにいつた方が良いんだろうか?

持つていくものは華がないけど鉄分補給出来るもの…レバー?いや、シジミという手も…だけどやっぱり女性に送るものとしてはどうしようもない位に色気がない…どうするべき何だろうか…。無難に花束でいいか…この際。

ウンウンと頷いて真つ赤に染まるそのページの読める所に視線を戻す。

那珂 第一項に抵触する行為であるがヤマトさん自らに許して頂いている事に加え、本人が悔い改めている事により無罪とす。もしこの結果に意義を申し立てる場合はヤマトさん本人に言うこと…大丈夫です。きっとヤマトさんならそういうはずですからね、那珂ちゃん。

…反応に困るなあ。怒るに怒れないじゃないか…悪ふざけも大概にしてほしかったのに那珂の為になつたら俺からは何も言えなくなつてちやう…うん？

…ヲ級と青葉は呼び出しだ。

風で煽られ捲れたページに書かれていた文字。それは…

※三原則による基本理念

第一項 ヤマトは王であり尊いものである。誰にも傷付ける事は許されない。この組織においてヤマトを敬愛する気持ちを忘れることなかれ

第二項 ヤマトは艦娘と深海棲艦との戦いを嫌っている。なので、組織内での相手が

親の仇であろうと一切の私情による戦闘及び危害を加える行為は許されない

第三項 ヤマトを悲しませる者即ち我らの敵という事を常に胸に刻むべし。我らの敵は我々の手で誰にも気付かれる事なく裏でひっそりと消す事。どういう経緯であれ、その際第三者に悟られた場合は厳罰対象とする。

ヤマトさんのスリーサイズは上から84・5、59・8、81・2となっている。これは議長自らがヤマトさんが寝ている時に計測したものである。艦装外した体重の方は大体55から60位という：身長は165・8と小さいが体重はそれなりだなと考えますが、実際はかなり鍛え上げられた筋肉との事。脱いだら凄く身体らしく：その姿は青葉さんが裏取引しているという青葉商会で高額での取引が行われているらしいのでどうぞ御鼻屑に。：とのことです

………。

ふ……ふふ……フフフ、ふふふふhuf…

あはははは

「ラツラツラ〜♪一体ソナンニ高笑いシテドゥ…」

「これ…何だか分かるだろう？」

「サ、サア？ フ級ハ急用ヲ思イ出シタカラ帰口ロ…」

「シラヲキルツテイウナンダネエ？」

全速力で逃げようとしたヲ級を艤装をつけ、背後に回り肩に手を置くと逃げられないように拘束する。今怒ると止められない気がしたので出来る限り笑顔を顔に張り付けると正座させた。青葉にも説教が必要事は誰もが理解出来るだろうね？一刻も早く連れて来ないといけないからなあ…。

「ソレハアレナンダ!! エツト…気ノ迷イ、ソウ！ 気ノ迷イナンダ!!」

「言い訳は後で聞こう。俺は鎮守府で青葉を取っ捕まえてくるからそれまでは正座だ。勿論逃げたりしたら此処等一带を波動砲で海水を蒸発させてでも捕まえるからな♪」

「ハイ!! 絶対ニ逃ゲタリシマセン!!」

「…一先ず青葉を捕かまえて戻ってくるまでに遺言の一つでも考えておくんだな」

敬礼をしたまま動かなくなり、青を通り越して白くなるヲ級。元が白いというのにより白くなるのは一体どうなっているのか調べてもみたい気がするが、今は青葉だ。裏

での売買に、隠し撮り。一回こつてり絞らなきや反省しなさそうだからな…まったく、腕が鳴るよ…フフフ。

エンジンにエネルギーを満遍なくチャージすると空に飛び上がり鎮守府まで走り出した。

side 提督

今日も空が青いね〜♪こうも平和だところして仕事をサボって昼寝がしたくなるっ
てもものよね？

それにヤマトが来てからというものの戦うこともないし、逆に深海棲艦の子とも仲良く
世間話なんていう事もするようになったしなく♪あー、本当にヤマト様々つてね
！

それにここだったら早々見つかることもないし長い間お昼寝に勤しめる…うん。今

日も晴天なり。

ビュン！ドオオン！

「…え？」

一瞬：ホントに一瞬だけ直ぐ上を何かが通り抜けた。私は深海棲艦とか艦娘の戦闘は間近で見ることが出来ないけど、あんなに早い物つてあるの!?もし、あれが敵だといふなら脅威以外の何でもない。それに飛んでいった方角は丁度私が来ていた方。つまりは鎮守府ということになる…。

ぶつかるとような音も聞こえたので急いで後ろを向き、鎮守府を観ると土煙がモクモクと上がっている。

呑気な私でもここまでの出来事がただ事では無いことは理解出来た。
急いで鎮守府の煙の上がる落下地点だと思われる所まで走り戻る。

息を切らし、そこに辿り着く。すると直ぐ後ろから気配がして振り向く。

「ひっ?!」

それはそれは恐ろしい顔で私の事を見ているヤマトがそこにはいた。背後には燃え上がる炎に般若する見える…。般若所か鬼にも見える。

笑顔なのに怒ってるっていうのが凄い分かる。

…怖い。

全身が震え上がり、生命の危機と本能が警告している。

ゆっくりとヤマトの口が開く…。

「青葉を少し借りて行きたいのですが、よろしいでしょうか?」

酷く丁寧な話し方なのに私にはそれが「青葉を連れていくが邪魔をするなら…消す」と言われたような気がした。

ヤマトからあふれでる怒気なのか殺気なのか分からないその濃密なオーラは常に首筋に刀を突き付けてるとさえ錯覚させる。そんなことされた私は本能に逆らうことな
く壊れたようにただ何度も首を縦に振ることしか出来なかった。

私のその返事に満足したのか短く「では、失礼します」とだけ言い去っていった。

離れようと感じるその怒気に私は目を離す事も出来なく、去っていった方向から動かす事が出来なくなっていた…。

少しして落ち着いてきた…と思つた時の事です。

遠くからこんな声が聞こえてきて今日一日ずっと震え上がる事になりました…。

「…やあ、青葉君に会いに来たよ」

「嬉しいですね！青葉、感激です!!」

とても優しいげに聞こえます。でも、それが真逆なのは本能が理解してたのでしよう。私には死神の囁きに聞こえました

「そうかあ…喜んで貰えて俺も嬉しいよ。」

「なんですかあ…そんなこと言われても何も出ませんよお〜♪」

「それは困つたなあ…穏便に事をすませたかつたのになあ…無理矢理は嫌いなんだけど…いたしかたない。」

「きやつ!?え、え…えええええー!!!?」

「取引はできるかい?お前の…」

遠くだけどヤマトさんと青葉以外が騒がしくなっていた。誰の声かまでは特定出来なかつたけど悲鳴のようにも聞こえない声で「あれが、伝説に聞く壁ドン!? 青葉がヤマトさんに!!」とか聞こえたから端からみたらロマンチックになつてゐるんだと思う。でも私には分かる。あれが、死の洗礼で逃げ道を断ちこれから起こりうる惨劇を… ヤマトさんの声が優しいそれから地獄の底から響くような低く恐ろしいものに変わつていきました…。

「お前の命と引き換えに売っているお前の撮つた如何わしい物全てを、な。」
青葉の叫び声が上がつたがきつと全てがもう手遅れになつてゐるだろう。

逃げたくても逃げられない。

恋愛面で天にも昇るような思いをさせてから地獄にスマツシユ…私は直接見ている訳じゃないがそれでもそれがどれだけ恐ろしい事かよくわかつた。

長く響いていた青葉の叫びがプツンと切れたのを境に恐怖のドン底に落ちたかのようになつて騒がしかった鎮守府は物音一つ立たない程静寂に包まれた。そして遠くで飛び上がるヤマトはグツタリとしてゐる青葉背負いながら飛んでいった。

だけど、私には見えてしまった…ヤマトのその顔には口角の上がる嬉々としたヤマトの顔を…。

その日私は絶対にヤマトを怒らせない事を胸に深く刻み込み、誓うのだった。見えなくなつたヤマトと青葉と共に消えた鎮守府を渦巻いていた怒気が霧散したのを体感し、他の子達も我に返っていく。そして無言のまま消えた青葉の方を向き十字を切つたのだつた…。

静かなる悲しみと賑やかな喜び その1

ふと空を見上げて思ったんだけど、さういえば名前は知ってるのに会ったこともないし、まだ挨拶してなかったっていう人がいたなあ……とか臆気に考えていた。

例えば提督さんの時にちよろつと出てきた摩耶さんとか不知火さんに鎮守府に挨拶に行つたときにも雷が持つてきてくれたお菓子とかは間宮さんっていう人のお世話になつたと言つていたのを覚えている。まだ他にも居たような気がするが、間接的にでも関わりがあつたとなるとこの三人になるだろう……ここはやはり挨拶をするべきなんだろうか？

「うーん……あの時キレて気が動転してたせいで色々やらかしちやつたからなあ。もう少し様子見をした方が良くもしいれないし……でも、後回しにしたせいで忘れてましたじゃ問題外だしな……」

少し悩んだが答えは出なかった。分からない事はあんまり気にしない質なんだけど、無礼は不味いから行くことにする。悩んで分からなきや進まないより進んだ方が良い

よな！進んじやいけないのは遭難したとき位だし、止まるより進んでみるほうがいいってね。

そうと決まれば行きますか！いぎ、鎮守府へ！

「ヤマト発進！」

前回は不法侵入に近い奇襲のような突入をしてしまったので今回はと鎮守府の正面から歩いて段取りをしながら入ろうと考えたのが挨拶しようと思い腰を上げたあと直ぐの事であり、こうして鎮守府にたどり着いて真面目に考えてみれば己の考えの穴という甘さが滲み渡り嫌でも理解する事になるのは当然であるというものだ…。

「そりやあこうなりますよね…。はあ」

どれだけ難しい言葉で取り繕おうが自分の間違いは認めないといけないから自分から自白させていただきます。

「初めて憲兵さんって奴に捕まったよ……。」

憲兵さんは体格の良いお兄さんでスツと細い目に下手に口を出すこともせずただただ彼という存在からは威圧感を感じさせ、周りを萎縮させる……。良い例えをするなら端的にヤクザ、もしくは導火線に火がついたダイナマイトだろうか？

兎に角、連絡も入れずに失態を犯しておきながら俺が鎮守府に入ろうとしたら門番でもある彼の横を通ろうとしても勿論通してくれる筈もなく現在の通り、彼に連れられるという訳である。

そして彼が口を開いたのは何だったのかを思い出すことさえ面倒に思うようになってきた時ぐらいの事である。

「こんにちは憲兵さんがここにいて珍しいですね？何か提督に用事でも？」

「……お客様がお見えに……………」

「ん？…え、あ…俺か！ えーっと、ヤマトです。」

憲兵さんと呼ばれた彼が口を開いた事に驚愕を禁じえない俺は彼が言葉短く端的に言い終えたのに気付かず彼がじつと無言で見ているのを遅れて気付きすぐ様取り繕うように自己紹介をしながら頭を下げた。

それを見て満足したのか又前に向き直り、憲兵さんと話していた少女に用件を手短かに話していた。

「提督殿の所まで案内してほしい…頼みます。自分は彼に好かれていないようなので…」

「…憲兵さんが不器用なだけでは？」

「……………え？」

「かもしれないませんが、自分は何分話すのが苦手なので…それにこの顔だから怖がられるのには慣れてるんです」

「…それを言ったら私だってそうじゃないですか…」

「…あと、宜しくお願いします」

彼の口から出た言葉に呆然としてしまつて、思考がポカーンと真つ白になり止まつてしまつていた。

…えつと？ 彼の口から出た言葉をまずは整理しようか…

何も連絡しなかつた俺はこうして憲兵さんに連れられていた。

それを俺は不審者又は前回引き起こした問題で連れられてるのかと思つてたけど実際は案内されていた…ということらしい？

それで彼が一言も話さなかつたのは怒つているのが原因じゃなくて口下手で何を話せばいいか分からなかつたつてことで…俺も怒つているのかと思つてたから神経を逆撫でするような事をしないために気まずいながらも黙つてたんだよね？

それを今度は憲兵さんが俺の雰囲気を正しく読み取つたみたいで嫌われてると思わせて…

「つて、全部勘違いだったのか!？」

俺の間違いで憲兵さんを傷付けた…最低だな、俺!!

兎に角間違いに気付けたなら彼がいなくなる前に謝らなきゃだ。憲兵さんの『この顔』と言つてた時、実際はどうか分からないけど俺には少なくともその横顔は悲しそう

に見えた…。

「憲兵さん!!」

俺は去ろうとして離れた所にいた彼に届くよう、少し大きな声を出す。その声は彼に届いたようでゆっくりと此方に向き直り仏頂面のままで此方を一瞥する。

振り返って俺の言葉を聞いてくれているのを確認できたからその先を続ける。

「俺は憲兵さんの事を勘違いしてました。俺が全部悪かったんです！」

その性で貴方が傷ついていた事も分からなかった。俺は最低だった。…でも、貴方がそれでも俺にしてくれた気遣いや優しさは今、しっかりと伝わりました。嫌いなんかじゃない。俺は貴方のような誇り高き武人のような人を尊敬します!!…えっと、色々ありがとうございました。」

怖い顔は健在だが、あれは怒っているんじゃないと自分に言い聞かせ己を鼓舞する。ヤクザのような顔はしても心優しい彼の心は傷ついていたのにも気付かない俺はダメダメなんだ。でも、気付けたなら幾ら周りに彼の人物像を勘違いされて傷付こうと

も味方でいられるような奴になるべきなんだ。

それが今の俺にできる贖罪だ。

誠意を籠めれるだけ込め、深く御辞儀をする。そして頭を垂れてからたつぷり三秒程して頭を上げると彼はやつぱり仏頂面だった。

でも、それがさつきまでのままと言われると違うような気がしたのは俺の満足したからなの原因なのかは判断できなかつたけどそれでも、俺には彼が一瞬笑っていたように見えたのだ。

彼はその言葉を聞いて少しすると何も言わずにこちらを見ずに前を向いたまま手を振り去っていった。

自己満足でも喜んでもらえたなら俺は嬉しいな。…なんて

「…初めて存在を無視されたような気がします。」

「してませんよ？ちゃんとそこにいるって分かつてたからやってたんです。えっと、なんて呼んだら良いですか？」

「不知火様とお呼びください」

「えつとお？ 不知火様？」

「ふふ、冗談です。」

彼と同等に表情が動かない為それがジョークなのか本気なのか分かりづらい…。ヲ級や深海棲艦達との付き合いで分かってきたと言っても俺はまだまだだったようだ。

見事不知火に一本取られたようである。

その俺のリアクションが面白かったのか微笑む彼女は何処か見惚れてしまうような可憐さが醸し出されていた。

普段から（まだ、会って間もないけど）仏頂面な人が笑うとこんなに威力が凄いな。世の中にはギャップという言葉があるらしいがなんか分かったような気がするよ。あの時はバカにして悪かったなヲ級よ…ヲ級だったからネタっぽいなんて感想を抱いたみたいだ。

不知火はどうやら落ち着いてきたようでもまた冷たいような顔になりながらもそこに何処か楽しそうな柔らかさがあったような気がした。

…って、俺は何を言ってるんだろ。冷たい顔と柔らかい顔って矛盾してるよな？ うーん…勘違いか？

「では行きましょうか。本当なら逆ですけどエスコートしますよ？　…次来た時にはヤマトさんが私をエスコート出来るように…ね。」

小さく呟いた言葉を偶々聞き取つたのだが、楽しそうに口元を歪めながら言っていたので多分それもきつと俺を困らせるためのジョークなのだろう。先に行つてしまう不知火の後を追いかける形で小走りで彼女の横に並ぶと淡々と話す彼女の小粋なジョークを俺は楽しみにしながら本来の目的も忘れ、二人で話ながら歩いているのだった。

静かなる悲しみと賑やかな喜び その2

二人で鎮守府を歩いている訳だが、時たま会話が途切れながらもしたがそこにあった沈黙は決して辛い物ではなく、心地よい静けさだった。

話してみてよく分かったが彼女は表情が硬い。だが、決して喜怒哀楽がない訳では無く、相手の苦手意識を素早く読み取り気遣うように距離を置いたりしているのである。遠慮していたりと己から前に出る積極的なタイプではないのはよく分かったが。彼女は良い意味での不器用だったんだと思う。

「なるほどなあ…嫌われてるから距離を置く。怖がられるから恐い思いをさせないように気遣って関わらない。」

「不知火って誰もが嫌がる事を率先してやるタイプでしょ？」

「…何ですか、藪から棒に。私の事を考察して…さては憲兵さんの時と同じように取り入ろうとしてますね？そんなことしても無駄ですからね。私は一人でいるのが好きなんです。」

「ふ…いったいどの口が言ってるんだよ。どうせ鎮守府のすべての子の自分をどう思っ

てるのかっていうのを把握して行くせに。」

「そ、そんな事あるわけないじゃないですかっ！」

そういうとヘソを曲げたようにさつきと前に行つてしまふ。

不知火とはただ話しただけが、それでもこういう仕草が可愛い女の子であることはこの短い時間でも理解する事が出来るようになった。

言い当てられたり、取り乱したりすると子供っぽいような……ふて腐れたような態度で心の動揺を誤魔化す。

他の人は案外こういう所を見えない位に近くにいるからなのか、それとも俺だからなのかは分からないが後者ならそれはそれで気を許して貰える位には信用して貰えたという事で嬉しいと思う。

誤解されるのだって傷付かない訳じゃない。怖がられるのだって良いものじゃない。

俺にはヲ級みたいな剽軽な友達が居てくれたから孤立しなかつただけで出会わなければたぶん不知火の持つているその痛みをきつと受けていた。

なら、俺はよかつた……ではなく、本来持つていたであろうその痛みを分かつ事が正解なんだと思うんだよね？

不器用でいて、毒舌を吐いてでも鎮守府内の艦娘の皆が幸せになれる道を必死で探した彼女を俺は好ましく思う。だからなのかどれだけ嫌われようが不知火を嫌いになることなんて出来なかつた。

…まだ嫌われてないけどな。

「だからって不知火が悪いってことじゃないよ？少なくとも俺はその不知火の不器用優しさが好きだからな。

…まあ、なんだ。だからどれだけ辛くても俺はお前の味方だ！それに辛かったらその重荷を持たせてくれ、在り来たりな言葉で悪いけど一人だと辛いことも二人で協力すれば乗り越えられる…ってね？」

一人になんかさせたくないから、フオローもしっかり忘れない。大切な友人だ。傷付けたままというのは俺のプライドが許さない。

幾分か固まったように立ち止まった彼女は振り返らず今度は早足で前に行ってしまう。時折『ひやつ』とか『ううう』とか『バカですわね』とか呟いてたのが聞こえたので聞こえてはいるんだと思う。でも、頑として静止の声を聞かずに前に進んでいくために追いかけるのに精一杯になってしまい確認は取れなく、小走りでその後ろ姿を追いかけ続けるのだった。

「…で、こうなつたど？」

「…申し訳ありません」

今俺はブーツとしつつ己の事ながら他人行儀にどこかで冷静に目の前の状況を受け入れ、何故こうなつたのかこうさつ考察をしていた。

不知火をおいか追いかけてたら曲がり角で不知火が女性とぶつかり女性が持つていた物が落下。女性はこの世の終わりのように血相を変えその原因である俺と不知火を正座させた。で、今に至る。

「経緯としてはそう、ですね…はい。でも、全面的に俺が悪いわけで不知火は俺がしつこく付いていたから逃げるためにあの速度になつたつて訳で…差し出がましいけど、だから不知火だけは許して貰えないかな。俺が許されるまで何でもするから、なんて…？」

「ん？……ふふん、アタシは別に怒ってるわけじゃないんだけど？」

嘘だ!!じゃあなんでそんなにイライラしてると言うんだ!その有無言わざずに正座させたのは貴女だぞ!?それを怒ってないなど有るわけない。無いったら無い。…なんて思ったが空気を読める自分として此処はだまって黙っているのが吉だろうね。

とか達観して考えてたのが間違いだった…。考える素振りを見せた後で一瞬にやけてたけど俺おかしな事言ったかな?

俺が黙ったまま思考の海に身を投じているとは目の前の女性は短く『はあ…』とため息をつくとやれやれと言った手振りをしつつ面白いネタを見つけたと言わんばかりの顔をしていた。隠す気は無いのかな?それとも目先の事に囚われて自身の事に気付いてないのか…俺、選択間違えたとかかなあ。

「そうだなあ…じゃあどうせなら弁償として一時間程此を作ってくれた所で仕事の手伝いをしてもらいつつ私のこれを作って貰おうかな?嫌な顔したって拒否権はないかな?」

「言ったもんなあ、何でもするってw」

ニヤリと笑う彼女は絶対に楽しんでる。

怒ってないなど言っていたがもしかしたら彼女もまた不知火と同じで気難しい性格なのかもしれない。…女性って分かん。

でも、彼女も機嫌が直る。不知火と俺を許してくれる。

多少の労働は問題ない…むしろ互いにwinwinな落とし所と言えるだろう。

今まで忘れ気味になったが挨拶するだけが用事だったから多少の遅れは問題もない。

それに三人中一人は目の前の不知火だった訳だし…

「…ん？私の横顔なんて見てどうかしましたか？」

「少し迷惑かけるけど一時間程待つて貰って構わないかなって？」

武人のように綺麗に座る姿を見惚れていたのを悟られるのが恥ずかしく思い、真実を混ぜつつ嘘で誤魔化した。一瞬バレたと思ひ、若干尻上がりな口調になってしまったが不知火はその言葉に疑問を浮かべるもなく小さく微笑んでいた。

「私も手伝いますよ。ヤマトさんだけに責任を負わせたら恥ですからね」

「俺に位、気を使わなくてもいいからな？」

「アタシの前でいちやついて…もしかして見せ付けてるのか?…でも許してやるよ、不知火のそんな顔見るの初めてだかんなあ〜」

目の前の女性はニヤリと笑うと不知火を一瞥して俺の顔を覗き込む。たぶん悪意はないと思うんだが彼女はいたずら好きなようである。楽しい事が一番としての節が見られる。不知火の不器用さを知っていて密かに心配していたけど気を使って気付いてないフリをしてたんじゃないかなあ?と考えるのは俺の希望的観測何だろうか…。

首を傾げながら考えに耽っていると横から彼女が近付いていた。

「アタシは摩耶だ。よろしくなっ!!」

「あー…貴女が摩耶さんだったのかあ。…今日はどうも幸先が妙に良いが、うん。手間がはぶけ省けたと思って突っ込まないことにしよう…。」

ヤマトだ、提督さんがいつも御世話になってます。てか、御迷惑をお掛けしていません。」

「なるほどなるほど。なら納得だな!不知火が心を許してるみたいだし案外あの噂もバカにできないって言うことか。」

提督の迷惑は今に始まった訳じゃねーしお互い様だろ。それに任されてんだよ…提

督のおばあちゃんにな！気にすることはないね。」

話してみると意外とサバサバしてた。摩耶が口の悪いというのはあんまり想像出来ないんだけどいったいどういう事なんだろうか？

それぐらい提督が追い込まれてたっていうことなのか、その時の提督がそんなに嫌いだっていう事なのだろうか？

「不知火の事はよく分かってるけど…摩耶の事はどういう事なんだろうか？うーん…もっと近い人に成れば分かるのかなあ…」

「なっ!?!…それって…」

「近しい人って…間柄が…それってかの、かかかか…」

『か』とだけ連呼して真っ赤になつた摩耶と小さな声で『それってお前の事は誰よりも知ってるよ…っていうゴニョゴニョで…不知火に落ち度でも？』と怖いぐらいに百面相をひろうしている不知火。…どうやら処理落ちしておかしくなつたようである。

俺、また変な事言つたかな？俺って今言つたことって言えば不知火は（表情が硬いのが原因で勘違いされたんだろうって）よくわかつてるけど摩耶が態度が悪くて怖いのは

分からない……。もっと（関わりを持って気を許す位に）近しい人になればくって事を言ったはずだし今回ばかりは何も悪くないはず！

よって別の要因が絡んでるんだろ？俺は悪くない！

結局この二人の様子が落ち着いたのは落っこちたアイスの弁償の為にやって来た甘味処についてからだった。

静かなる悲しみと賑やかな喜び その3

二人が己の世界に没頭したために長い間放置気味となり、結局辿り着くのも自力となつてしまった。

そこは問題はない。…ない、と良いなあ…。

グルグルと回ること二十分。言つてしまえば二十分もの間、二人はトリップしていたことになる。…長くないか？

たどり着いた甘味処は間宮と達筆で書かれている。…勿論現代のように左から右でなく、右から左から読ませるようだ。

…思いの外俺のいた世界よりも年代は前になるのかもしれない。…タイムスリップだったのか

何故か思考が反れていくのだが、理解していても驚愕を隠せないでいる…。遠目で見たその間宮の甘味処はパフェやらアイスクリームやらを提供していた。生活水準は一体どうなっている？

進んでいるのか遅れているのかチグハグで掴み所がない…。まるで見えるのに触れ

ないホログラムを相手しているかのような錯覚を覚え、疲れてきた。

「ん〜♪甘あい！やつぱりデザートと言ったら間宮さんのアイスだよ〜♪」

「おかわりっばい!!」

「ええー!!夕立ちちゃんもう食べちゃったの!速くない!!」

「えー?そうっばい?」

「あはは、アイスだから問題ないけどもうちよつと落ち着いて食べないと喉に詰まらせちゃうよ?」

「それは嫌々、これからは気を付けるっばい」

間宮さんの甘味処その奥側からは三人の少女が楽しそうに話しているのが聞こえる。たぶん駆逐艦の子だと思うが本当に楽しそうだ…。

笑い声や楽しそうな話し声は絶え間なく聞こえ続け、その甘味処が艦娘の子達に元気を与えてくれている事は外から聞こえた声だけでも分かった。

「…この鎮守府は本当に良いところだな。平和で…平凡で…だからこそ守りたいって気持ちが強くなる。常に戦いが直ぐ側に有るっていうのに活気に満ちていられるのは

暗にこの温かな場所が：間宮さんっていう人や憲兵さん、兎に角影で隠れて見えにくい所でも支えてくれてるからなんだなって気付かされるよ。」

「ヤマトさん？」

「何か思う所でもあったのか？」

心配そうに見上げる不知火に、俺の言葉の芯の部分：俺の思い出にある哀愁を若干感じ取りつつあるような気がする摩耶は立ち止まった俺に対し言葉をかけてきていた。

「いんや大した事じゃないんだけどな……。ただ俺が戦艦として戦えたのはそうやって影で支えてくれた艦長達のお陰なんだよなって改めて思ったら一度でいいから感謝の気持ち伝えてたかったなって思ってたさ……。」

一度甘味処から視線を外し、青い空の向こうに広がっているであろう宇宙に思い巡らしながら上を見上げた。

たぶん、俺は不可能なのを理解しながら無意味に悲しみと後悔によって顔を歪ませてしまっていると思う。それを直接は見られたくなくて誤魔化すために隠すように空を仰ぎ続ける。

空の青さが目に染みるような気がした。

誰も幸せに出来ないなんて嫌だ……。少なからず俺はそう思う。俺は相容れずに戦うことしかできなかったけどガミラス帝国だって人間と同じように一人一人思いを胸に戦っていた筈だから……。

戦っていたあの時も救えたんじゃないか？という考えが脳裏にチラつくんだ……。ここで俺が深海棲艦と艦娘の手を取り合う足掛かりを作れたように……

「優しすぎるんですよ……。ヤマトは。私も大概ですけど何でもかんでも背負おうとしないでください。

前の貴方は知りません。でも少なからず今の貴方は貴方です。不知火を理解してくれているように私も貴方を理解出来るんです……。辛いなら分けてください。私は駆逐艦で小さいですけど肩ぐらいなら貸しますよ」

「プツ……それは傲慢だな。全部救えるなんてあり得ないだろ？だからいとおしいと思えるんじゃないか。すべてを救いたいなら頼れよ！お前はどう思ってるか知んねえけど私は友人を見捨てるほどやわじやない。」

俺は何も言わない。でも、心に抱える何かがフツと軽くなったような気がした。考えすぎるのは悪い癖だな。

摩耶が言ったように救うだけの力があるって傲慢になっていたのかもしれない。不知火達を通して過去の自分と重ね合わせて見るなんて今現在である彼女達に対して失礼だったかもしれない。俺は俺で彼女達は彼女達なんだから

「あー…すまない。今は今、俺は俺。まったくその通りだったな。諫めてくれてありがとう、摩耶、不知火」

俺はもう迷わない。…って、前もこんなこと言ってたっけ？

…クククツ、案外人間らしさが身に付いてきたか？

人間らしさついでに俺は人間人と同じように弱さを受け入れるかね。こうやって支えてくれる人はいるんだ。こここの鎮守府の皆、彼女達のような子に報いれるように、返そう。大切な物は今も昔も変わらなかつたんだからな。

「…不知火に落ち度はありません。ありません。ありません。……きゆう」

「あ、あああ暑いなあ…早く入ろうぜ…(駄目だ…アレは駄目だ…チクシヨウあんな顔

「されたら…」

盛大に真つ赤になる二人は俺から視線を反らす…。え!?俺なんかした?そんなに見苦しい事しちゃったのお!!

って、それどころじゃない!!

「え、不知火!!おい、大丈夫か!!って、鼻から赤いのが…」

「…我が生涯一辺の悔いなし」

不知火は何がきつかけになったのか分からないが、また熱暴走を起こしたようで拳を天に掲げ、背後に甲冑?鎧?を身に纏った武人を幻視させると共に意識を手放してたのを見て咄嗟に倒れる前に腕を掴み倒れぬように不知火を引き寄せ俺の腕と胸を貸すように支えた…。

「もう…これは…プシュー…」

「カーニバルだね!!…って、ハッ!何か怪電波を受信しちゃった!!」

そのまま収集がつかず甘味処の真ん前にして入れぬままにまた時間を浪費してしま
う俺達であつた…。

てか、いつになったら入れるんだあ—————!!

静かなる悲しみと賑やかな喜び その4

あれだけ騒いでいればそれなりに目立つ。

別に見せ物では無いのだけどあれだけの事があれば何があつたのだろうかと心配になるのが当たり前。もしくは野次馬の如く気になるだろう。そして此処は鎮守府であり、艦娘……つまりは女性が沢山いるということである。

遠回しに言ったがここからは率直に言わせてもらおう。

「噂が好きなお年頃なのは理解したがまさかこれだけ集まるとはな……」

誰かに聞かれる事になるがそこは仕方無い。多少愚痴つてしまうのぐらい許して欲しい。

俺だつて今は意識と意思と感覚を持つ一般人だ。誰だ、今逸般人つていったアホのこは？

ほいつて言ったからきつと彼処で座っている三人組の金髪の子だろうな……。あ、目を反らした。

「仕方ありませんよ貴方の噂は何処の鎮守府でも耳にし、その素顔を見たものは限られているってなったら気になってしまうもの。それに貴方のファンクラブだつてあるんでしょ？噂が一人歩きして興味を惹かれる子も一人や二人じゃないんですからね。」

声をかけてきたのは割烹着を身に付け、懐かしい（？）雰囲気を漂わせる the お母さんな容姿をした若々しい奥様のような人。そう、件の挨拶をしようと思つていた三人の最後の一人間宮さんである。

挨拶は手早く済ませ事情を話すと快く受け入れてくれた彼女は店内の奥に入つていった。その時の様子は後ろ姿しか見えなかったがスキップでもしかねない位に浮かれていたような気がしたのはたぶん気のせいだろう。ニコニコとしながら彼女は黒い何かを渡された。動きやすいようにとの事だがなんだろうと広げたそれは：燕尾服だった。

燕尾服：執事の服と言つた方が正しいかもしれない。兎に角何かの手違いかと思ひ間宮さんを見返すとニコニコとしている。

「あはは…着せ替え人形とか好きなんですね。遊び心を忘れないつて大切ですよね…：可愛いですね？」

思わずひきつった笑みでこう言ってしまったのは仕方無いと思いたいところだよ。そして、間宮さんに言われるがままに燕尾服に着替えている間に人に見せられないような恥ずかしい姿を晒す不知火と摩耶は可愛そうだよなと首をトンツとし気絶させお店の奥で寝かせた。

…首をトンとして気絶するのは脳を揺さぶり脳震盪を起こさせるためだ。危害を加える為にはやった訳じゃないから謝れば許してくれるだろう。そして、摩耶との話し合いであげられた間宮さんのところでお手伝いというのが始まった。

…というのが錯乱しだす二人と俺の経緯だ。大体これが半刻ほど前の出来事だったと思う。

「…すいません。お店の前で騒いでしまつて…別に嫌な訳じゃないです。…でも、これは限度を越えてるのでは？」と、思っただけですよ。」

そう、目の前に広がる光景…。それは何故かいつの間にもやら出来ていた長蛇の列だったからである。

行列といつて通じるのか分からない位長い列はこの鎮守府の何処に存在していたの

か：物理法則を無視したようにいる鎮守府の人達が甘味処から出てから見えなくなる所にまで伸びていた。

心なしか先日叱り付け自重しますと涙ながらに頭を下げた奴のけたたましい声が聞こえた気がした。

「青葉の新聞必見!!ヤマトさんの情報だよー!!なんとなんと、あのヤマトさんがこの鎮守府に!しかも間宮さんの甘味処で働くっていう垂れ込みが!!さあ、並んで間宮に寄らないと後悔しちゃうかもです!!」

遠くでバカが囁きつついた。所で…さえずるっていう字は轆くつていう字に似てないか?

フふふ、青葉…君が後悔しちゃうかもネ♪

「あ…あははは、戦略的撤退!」

「敵を理解して逃げるんだな?」

「ううえ!ジョーク!!ジョークです。なので勘b…」

「さあ、責任を取ろうか?ええ?」

毎度無駄使いの艷装のブースター（は泣いているかもしれないが）を使い、逃げようとした青葉の首根っこを掴み猫のようにプラインとさせると錆びたブリキのオモチャのようにギギギとゆっくり顔を向けてくる。そして俺は顔を近付け脅h…じゃなく脅s…でもなくONEGAIをした。

青葉はまるで世界の終わりを迎えるかのように青くなる。

だが、力を弱めることなんかしない。バカにはお仕置きが必要だからなあ？

「…はい」

最初は青くなっていたが俺が無言の圧力と段々と恐怖心を煽るように更に近付け、顔がふれ合うんじゃないかという距離になると顔を耳まで真っ赤に染めた青葉が「分かりました降参です！降参ですから赦してください…私、私が悪かったですからあ…」と泣き言を言うまで離さなかった。離れた後のフォローも忘れないのが紳士としての嗜みだ。

「ま、青葉は問題を起こさなければ可愛いんだから看板娘2号として働こうな。流石に

これを俺と間宮さんだけで処理すんのは手間がかかりすぎる。…期待してるぜ？」

そう言つて耳の近くで呟くと青葉を静かに下ろす。

その際に「あつ」とか言つたのは決して青葉がマゾヒストに目覚めた訳ではないと思いたい…。でも、脅されて名残惜しそうにするところを考えるに……俺はいつでも青葉の見方で居てやろう。悪い事をしたら叱り、偉いことしたら誉めてやろう…それがおかしな性癖を目覚めさせた張本人としての責務ではないだろうか…。

「（今ヤマトさんが青葉の事可愛いつて…それに期待してるつて…きゃーそれって!!）」
「あ、なんか葛藤してるようだな…出来れば変な道に進まないことを知人として切に願うよ…つてこれは聞いてないな。」

一先ずここに放置という訳にもいかず、だからと云つて心ここにあらずな女性を担ぐ訳にもいかないため青葉本人がパニックにならないように気づかない内に手を繋ぐとゆつくりと促すように手を引く。

勿論、店内にだ。

間宮さんはあらあらと困ったような顔をしたが青葉が働く事には賛成らしい。…何に困ってたんだろうか？

そして、俺と青葉と間宮さんの三人はテンヤワンヤのお客様の接客が始まったのだった。

静かなる悲しみと賑やかな喜び その5

グハツ……ま……まだだ……俺はまだやれる……あの子の笑顔の為に……絶対に……諦めるものか！

例えこの命尽き果てようと俺は……俺は！

「ぐっ……誰かに負けても良い。だが、自分にだけは負けるもんかあ!!」

俺、ヤマトはもしかしたら今までで一番絶体絶命かもしれない。胃には穴が開いている。恐怖と苦しみ、痛みから先程から冷や汗が止まらなかった。

「良いんです！もう、良いんです!!これ以上……これ以上やったらヤマトさんが死んでしまいますよ!?!」

「グハツ……く、クク……俺はこんなんじや沈まねえ!!人はな……いや、男っていうのは単純なんだ。女の子の笑顔の為だったら体を張れんだ……。悲しみから救い出すためなら無茶や無理なんてどうって事ないんだよ。」

クソツ…視界がボヤけてきやがった。

一発一発が重い…気を抜いたら一瞬で意識を持つて逝っちまう…。でも、倒れられない理由が有るんだ!! 此処で諦めたら俺は明日から合わせる顔がねえんだ!

「で、ですが…あれは…そんなレベルの物じゃないんですよ!!」

「心配なんていらねえさ。そんなのするぐらいなら俺は君の…君達の笑顔と応援さえありゃあそれで良いんだよ。間宮さんと、これを作り出した比叡の為に!!」

俺の手を掴み止めようとする彼女は…少しの間だったが一緒に仕事をして仲良くなった間宮さん。わざわざ俺に相談してまで悩んでいた彼女、榛名や霧島、金剛と優れ…ウ…ン…。まあ、そんな姉妹に囲まれて自分に自信を持たなかった比叡。

その彼女が一念発起してやらかしたソレは間違いなく一発KO物だが、それでも思いが詰まったソレを蔑ろになんかしちやいけなないんだ!!

倒れても…俺は立ち上がるぞ? 笑顔にすると決めたんだ!!

諦めてなんかやらねえ!!

「ヤマトさん…私、貴方の事勘違いしてました。金剛お姉様を取られたように思つて敵視してましたけど、やっと…やっとお姉様の気持ちに…そして私自身の気持ちに気付くことが出来ました…。ごめんなさい…。それから、気付かせてくれて…ありがとう…。私のために無理させちゃつて…ヒック…ウウ…」

「いらねえ…そんなんが欲しかつたんじゃねえよ…」

「え…?」

俺は朦朧とする意識を吹き飛ばし、ハッキリとさせた目で涙を溜め、謝罪する可愛い女の子を抱き締める。

落ち着かせるような、そしてその悲しみが少しでも和らぐように…だけどそれだけじゃない。

俺は比叡の言葉に怒りを覚えたんだ…。一生懸命な女の子を泣かせてしまった俺自身と、勘違いした比叡に

「俺は君を一度たりとも女の子らしくないなんて思つた事はないよ。どんなことに対しても一生懸命な姿は俺の目にはどんな女の子よりも魅力的に映つてたさ。だから、気にする必要もないし劣等感を抱く事はしなくて良いんだ…。」

失敗は誰だってある。俺にだってある。苦手なことだって有って良い…でも、それだけで自分を見失うな！」

「…でも、それでヤマトさんが」

はは、ほら。やっぱりこの子はとても魅力的な女の子だ。自分を責めて回りを気遣う。自己嫌悪してでも助けようとする健気な子だった。

俺は安心出来るように怒る顔も辛い顔も止め、優しい顔をし彼女の頭を撫でる。

「だから言ったろ？男は単純なんだよ。」

俺は比叡の笑顔と応援さえありやそれで十分なんだってな。だから泣き止んでくれて…で、応援してくれ、な？」

「グスツ…うん!!」

比叡はこれでもう自分を責める事も劣等感を抱くことも無いんじゃないかな？だって、晴れ晴れした顔で俺を応援してくれているんだから

「女の子の応援って本当に良いものですね。元気になりましたよこれならもう何も問題

ありませんよ。…だから心配しないでください。間宮さんがホントにイイ人なのは十分分かってるんです。綺麗で人思いで、優しくて…時々可愛い貴女の事もね。でも、だから心配しちゃうんですよね。でも、比叡に言ったように…」

「ふふっ…ええ。分かっています。貴方も男の子ですものね？なら、もう私は何も言いません。頑張つて下さいね」

ニコリと笑う間宮さんはきつとまだ心配しているのだろう。少し震えているのが分かった。でも、俺の我が儘を…意思を尊重して押さえてくれたのだと思う。

本当にイイ人だよ…。

「はあ…綺麗で健気な女の子の応援だ。ここでへばつちや男じゃねえよな！」

俺は比叡が作ったカレーを掻き込み大量に盛り付けられていた山を食いきつただった…。

女の子の愛がつまったソレは何よりも大切な調味料というのが入っていると感じる事ができた。応援されてからはそのカレーはとても美味しいかったような気がしたから

………

最後の一口を平らげ、米一つ残さずに食べ終えた俺は比叡に近付き頭をやさしくポ
ンツつと置く。

「あー、旨かった。また作ってくれないかな？誰かに食べてもらいたいっていう気持ち
は料理をする過程で大切なプロセスだ。ちゃんと思いの詰まったモンを作れるんだ…
何直ぐ上達するさ、何なら毎日でも構わないよ…俺は」

それだけ言うとは騒然とする中一人静かにお店の奥へと消えていったのだった…。

間宮Side

ふふ、ヤマトさん。

ついこの間私のお店を手伝ってくれた人：私の事を可愛いと言ってくれた人。

普段私は補給艦として鎮守府のサポートとして皆をイヤス為に奔走してたりします。だからか、皆さんは私の事をオカンなんて言ったりするので実年齢より上に見られることが多々あつて意外と傷付いてたりするんですよ？

まあ、心労をかけるわけにはいかないので思わず笑いかけて誤魔化しちゃうんですけどね…。

それを見抜いてかは分かりません。：ううんたぶん本人は気付いてさえないなかったんじゃないかと思えますね。

彼は寂しがりやなんだと思います。私は偶々間宮のお店から聞いちゃったんですけど彼の前世とでも言うのでしょうか？

兎に角戦いでの後悔の言葉からは芯の通った人で優しきで包んでくれる春の陽気なような温かさ人：それがヤマトさんなんつて思わされました。

それに比叡さんと向き合った時の男らしい横顔：普段は優しそうな人のよさそうな誰もが落ち着くような表情だったけどあの時は煮えたぎる怒りを理性で保ちつつも許さないって目に書いてあつたような気もしました。

その瞳に吸い込まれてしまうような気までしていました。

そのあとも本気の言葉をぶつけたヤマトさん。なんていうかあの人に守られたいっ

て思っっちゃいました。不覚にも感情が暴走しそうになって…その、お恥ずかしい話ですが夜戦にもって行きたくなってしまうてたんです。震えてしまいましたがそれを見ても不信がる事もなく見なかったふりをしてくださいった所も大人の魅力を感じずにはいられませんでした。

「…ヤマトさん、私とこの間宮を一緒に経営してくれないかしら？それで、店を閉じたらあの衣装で私だけに奉仕してくれないかな…。なんてね！」
冗談だけど、いつでも受け入れる体制は取っておこうかしら？

比叡Side

…ボーっ。

…。。。。。。。

…。。。。。。。

…。。。。。。。

ハッ!!ど、どどどうも、比叡デス!

え、あれ？今誰に挨拶したんだっけ？

「比叡姉さま？」

「比叡く？どうしたネー」

「えっ?!何がががが！」

ううー、あの時の事が忘れられません…あれからもう一週間もたってるのに！これでもヤマトさんのせいです…いえ、私のせいですよ。分かっているんです。

あの時の悩みのきっかけとしては妹である榛名と霧島が恋ばなをしていた時の事でした。

楽しそうに話されるヤマトさんの事が少し羨ましかったのかもしれませんが。私がその会話に入っていけなかったのが悔しくて金剛姉さまに話しかけようとして…だけどその頼みの綱も虚しく空を切ることになっちゃったんですよ…。

「へーい、ヤマトの話なら私も入りたいデース」

なんでかわからないけどそれが嫌だった…。胸って言えばいいのか分からないけどチクってした。ズルいな、裏切られたって…。そう考えちゃったって訳。それでそんな事考えちゃってからは自分がお姉さまや妹達に対して劣等感とか良くない考えがよぎっちゃって…。嫌になったんだっけ。

分らない…。それって、悲しいことだよねって…。

だけど、あの時の私はヤマトさんに盗られたような気がして気に入らないって思い込もうとしてたんだと今なら分かる。

確かに心の何処かでヤマトさんに言ったあの女の子らしさについては悩んだ。うん。悩んでたんじゃなくて諦めてたのかも。

でも、そんな醜い考えを持ってた私に彼は受け入れてくれました。泣きそうになってた私を抱き締め…。あう、恥ずかしすぎます！温かかったとか気持ち良かったとか考えてませんからね！ホントですよっ！

それに美味しくなくて名物にされてる私のカレーも完食してくれたし、誉めてくれた…。撫でてくれた…。それに最後まで、ふふ

「比叡姉さん…。何か良いことでもあったのかしら？」

「…あ、そういえば少し前にヤマトさんが来てたって青葉さんの新聞で」

「オーウ、そうだったんですカー？気付けられなかったネー」

首を傾げながらも話に華を咲かせるお姉さま達。うん、今なら皆の気持ちも分かる。

きつと、今の私の気持ちも榛名が感じた物と似ていて、霧島が感じた安らぎはあの時の包容力と同様の温かさで、金剛姉さまが抱いた想いと同じで：私はヤマトさんに恋に落とされちゃったんだ。

「カツコ良かったです。執事服を来て誰かの為に身体を張ってくれて：温かな笑みで魅了する。：毎日俺のために作ってくれ、でしたっけ：ふふ♪」

カチャン…。バシヤ…。ブフウー！？

ガタツ×3

ガシツ

「いい、いったいどういう事なの!?(ネー!!?) (ですか!?)」

私の肩を掴み揺さぶるお姉さま。大変な事になっているんだけど：大丈夫なんでしようか？

席を立つ前の音はお姉さまが紅茶を溢し、榛名が箸を落とし、霧島がお姉さまの入れてくれた紅茶を吹き出していたようであった…え？怖いんですけど…お姉さま？榛名？霧島？

「許しませーン、比叡だけ良い思いをするなんて裏切りデース！」

「あ、ああああ…ははははは…毎日俺の…あはははははは」

「お姉さま？嘘ですよ？止めてくださいよ！そういう冗談は…榛名以外にそんなのって…そんなのって…うう…」

怒る姉さま、壊れたように笑う霧島、そして怖いぐらいに一瞬だけ殺気みみたいな濃密な寒気を感じさせる程のナニカを出させた榛名。

何時もと違う姿を見て嬉しい反面私自身の身の危機を感じずにはいられませんでしたよ。思わず半歩ほど後ろに下がってしまふのは見逃して欲しいです。

美味しいカレー作れるようにならないといけないよね？これからは頑張つて見ようかな？ふふ、気合い入れていきます!!

私を本気にさせたんですから覚悟していて下さいね、ヤマト♪

「くしゅん！……ふぁ、ぷしゅん！！」

誰かが俺の事でも噂したのかな？ヤマトのくしやみの音がその時静かな海に響き渡ったとか……

番外編 沈む意識、その先に有るものは

世界は混沌としている。それは比喻でもなんでもなく混沌に包み込むだけの存在がいたからである。そんな世界では混沌へと陥れる存在はこう呼ばれていた。

霧の艦隊……と。

霧は海の上で何を考え何を思つて世界に仇なすのか……それは誰も分からない。そこそ霧である彼女ら本人にしか……。

霧の艦隊……霧は人間に仇なし、人々は恐怖と絶望に苛まれながら生きることを諦めたように淡々と生きていた。

抗う術を手に入れる為に沢山の手を尽くし、霧に破れる……それを繰り返す内に人々は生きることの希望を見出だせなくなりつつあった……。

だが、世界は常に非凡である。

絶望に染まった世界で希望という運命を手繰り寄せた少年……千早群像は掴んだ。

彼は腐っていく世界で誰よりも望んだ……。誰もが諦め、失望する世界で回りに合わせるように自分を誤魔化しながらも心の奥底では常に慟哭し、絶望し、それでも希望を捨てずに傷付いて来た少年。

彼はそんな腐った世界から抜け出すだけの力を……彼女を手にいれた。

他の人々は諦めるだけだったが抗う事を諦めなかった彼は一つの大切な物と出会う。それが彼の大切な存在……彼女だった。

彼女の名前はイオナ。

潜水艦伊401をベースとした蒼きボディを輝かせる霧。それが彼女だ……。霧は人間を害し、戦う者だが彼女は霧とは異質な存在。霧でありながら人……千早群像に付き従う霧……。

蒼き鋼……それが彼女だった。

千早Side

何故だろうか……この戦いはしちやいけなような気がしてならない。相手は戦艦二隻で金剛型ハルナ、それにキリシマだ。いつものような劣勢で正直言ってしまうば怖い。

けしてイオナを信頼していない訳じゃないがそれでも此方は潜水艦一隻だけ。切り札である超重力砲もタカオとの戦闘で使えなくなってしまう……アクティブデコイも既に破壊されている。いくら魚雷を撃ち込もうとクラインフィールドで防がれてしまう……。劣勢も劣勢。普通ならここで諦めるんだろうな。そう思うと笑いすら込み上げてくるよ。

「群像？」

「おいおい、艦長追い詰められ過ぎておかしくなっちゃったのか？」

「くく…いや、違うさ。ただこんなの何時もの事じゃないかって思ったら諦めるのはまだ早いかと気付かされただけだ」

「…ヤベエ、この流れって…」

「艦長は決めた事はキチツと守る人ですよ？諦めましょう。それが一番ですね」

「あはは」

イオナが心配そうに見上げていた。それを見たときに根拠もなく何と無くだがどうにかなるような気がした。

そうしたら一つだけ案が浮かんだ。それは大博打になる…。相手を怒らせ焦らせ隙を作る事が最重要になる…下手をしたら怒らせられた挙げ句退路も絶たれ轟沈する可能性もある。

それは怖い…クルーである皆の命を預かる身として無駄に散らせる事になるかもしれない。俺だけならまだしも…

「大丈夫。群像には私がついてる」

「イオナ…」

よし…ではこれから作戦を伝える。良く聞いてくれ」

そうだ…いつだって俺の側にはコイツが居てくれた。負けそうな土壇場でいつも戦況を引っくり返すために尽力してくれた仲間達もいる。俺は諦めない…。

いつだって今回だって状況は変わらない。常に命懸け…なら少しでも可能性を上げるために頭を使わなきゃな。悩んでる暇なんてない。

「…これが作戦だ。今回もかなりの無茶をする、皆には苦労をかける…だが、俺達は負けられない!!だから協力してくれ!」

「まったく、無茶苦茶も良いとこだけ艦長」

「そうですね、今更ですよそんなの。私達は既に覚悟してます。そして艦長を信じてるからこそイオナさんなのってるんですから」

「水臭いですが艦長、いつもみたいに俺について来い!!ぐらいの気持ちで良いんですよ」
「僧?それ艦長の真似?あんま似てないっしょ」

軽口を叩き笑う皆。そこに心配なんて色は見えない。

本当に信頼してくれているのが良く分かる…。なら、俺も皆の艦長で居続けてやる。それが俺の覚悟だ

…作戦続行中。

問題だらけだが問題ない。その問題さえ想定内であると今此処で明言しよう。

「群像？」

「艦長、何か懸念事項でもありましたか？」

「何かが違う…：いつもと同じ劣勢でここから逆転する…：その自信もある。なのにこれ以上関わっちゃいけないような…：そんな気がするんだ。」

「艦長!!ここで迷ってたらあの二隻に沈められちゃうぞ!？」

杏平の言う通り一瞬も気の抜けない状況なのだがそれでも拭えない。この痼が出来たような気持ち悪さが…違和感がいくら落ち着かせようともざわつくのだ…。

「全速前進」

「はあ!?!敵に突っ込もうっていうのか」

いや、これでいい。自尊心の強い奴はおちよくられると頭に血が登りやすい。そして怒りは我を忘れさせ、隙を作りそれが反撃のきっかけになる。

「…え?」

「イオナ?」

「艦長!! 上空から何か小さな物が超高速で落下してきます! この大きさは…人?」

「何?!?」

「大きさ、温度、心拍数…正常な人間。メンタルモデルでもない人間…でも、何故」

「なんだ?! じゃあ、この戦域上空から人間が落ちてきてるとも言うのかよ!! そんなバカな」

「海に落下。そのまま深海まで沈んで行った…生身でそんなことメンタルモデルでも不可能。人型であつたけどもしかした人じゃなかったのかもしれない。その反応も今口ストした」

これには杏平に全面的に同意だ。霧の刺客…でもないだろう。もしそうならキリシマやハルナはあそこまで人に容赦しない事が引つ掛かる。更にそんな素振りは全くなかったのも考えれば俺の考えに間違いはないだろう。

「もしかして俺が感じていたナニカとはその人物だとも言うのか…?」

世界は今何処へ行こうとするのだろうか?

でも、俺がやることは変わらない。信念を曲げないと決めたんだ。今は新たな問題より目の前の問題を片付けてからだ。

S i d e o u t

此処は何処だ…

俺は何をしてたんだっけ？俺は…ヤマトだ。名前を思い出すと芋づる式に連結されていたように他の知識も明瞭になってきた。艦娘、深海棲艦の争いを止めようと日夜奮闘する毎日をおくって…

「そうか…俺比叡のカレーを食べてそのあと倒れたんだったな。意地と根性で誤魔化しただけど上手く誤魔化せたかな？」

倒れた後の記憶はない…ならたぶん又何かに巻き込まれたと考えて間違いない。レオナルドの時に近い状況か？

まあ、レオナルドの時は立場が逆だったがな。

「ホーント、最近は専ら事欠かないな。」

思わずクスリと笑いが込み上げてしまう。どうせもう巻き込まれたんだ、なら後は俺が好きないようにさせてもらうだけだ。

「—————」

「ふーん……この世界もままならないってことか。さあてと、久しぶりにゆつくり出来るかと思つたが短い平穩だつたってことかな。じゃあ、行きますか!!」

耳に届いた声は楽しそうに、だけど何処か寂しそうで……それはまるで艦娘の皆が悩み惑う時と同じだつた。何時だか言つていた電の言葉を借りるなら『戦争には勝ちたいけど、命は助けたい』。電は自分が弱いからと諦めかけていた。だけど俺にはその意志を継ぐ事が出来るしそれを成すだけの力がある。

だから救う。戦争なんてそもそもさせなきやいい。命だけなんてみみっちい事言わずに完全無欠に救いきつてやるよ

だからもうあんなこと言わせ無いからな。

S i d e キリシマ

ああ、これだ。戦いはこうでなければならぬ！敵に最後の一撃を突きつけそれをもがき無駄な足掻きをする姿……ああ、サイツコーだよ。

「これで終わりだ、401い！」

「……え？」

私はこの戦いで勝利を確信していた。それはハルナも同じで……だけど私は勝利する一瞬に油断してしまった。

それがいけなかったの？

超重力砲の限界まで貯めたエネルギー部の……撃つ為に開いたクラインフィールドの

穴に一発の魚雷を通してしまった…。

「最後の一撃は最後までとっておくものだ!!」

「嘘…何故? どうしてだ? 私は何で追い込まれているんだ?! 認めない…認めない!!」

怖かった…。本当は私は怖かったんだ…。潜水艦でしかない伊401がタカオやヒュウガという戦艦を倒したという言葉聞いたとき私は人間という存在に恐怖してたんだ…。

だけど、戦艦である私がそれではいけないってハリボテの仮面で自分自身を偽って強い自分を演じてたんだ…。

「嫌…嫌だよ…」

「キシマー! 落ち着け!」

「ハルナ…私はまだ…死にたくないよお…」

「…これが後悔、か。」

後悔…じゃあ、私は自分を誤魔化さずに強がらずに居れば良かったってどういうの? で

も、私は戦艦だ。戦わなければ私は私で無くなってしまふ。そしたら…それは死んでしまったのと変わらないよ。

怖い、怖いよ…存在意義が無くなっちゃう事が…死にたくない。無に還る事も…一人になるのも…

「キラシマあー」

「ハルナ…そうか。私にはいつもハルナがいたんだよね…。でも、せめて…せめてハルナだけでも助かって…」

一人は怖いよ？でも大切だから…だからこそ一緒に死んじやったらダメなんだ。ハルナには生きていて欲しい…だから助かって…。

演算も儘ならないけどハルナだけを突き飛ばす事は出来る。身体中にラグのような物が走るが力を振り絞りハルナを海に落とした。

そこまですると一定に保っていたエネルギーは方向性を見失い膨張していく…光が大きくなっていくと頬を暖かい風が吹き抜ける。

その光は黄緑色で場違いにも綺麗だ……って思った。

「……私、死んじゃうんだよね。あーあ、最後の最後で素直になれたのに……怖いよお」

目尻から暖かいものが一筋流れ、伝う。私は光と恐怖に飲み込まれる……だけど心の何処かで良かったって思えた……。

でもやっぱり一人は嫌だよ

「手を伸ばせ。君がまだやり残した事があるなら、生きたいのなら足掻け!!」

今の君ならもう気付けただろう? 人型である理由を、そして存在理由が戦いの為なんかないやなかったって!! 俺が、俺が君を一人にはしない!! だから、少しでも良いから人間を理解して行こう」

私はそんな優しい言葉のする方へ手を伸ばす。誰かが私の手を掴んでくれた。その手はとて温かく、安心するぬくもりが感じられた。光は既に全身を包んでいて眩しく視界は見えない。捕まれた手を引つ張られる感覚がしたと思ったらあのぬくもりは手だけじゃなく全身に広がっていた。

「もう大丈夫だから、君を傷付ける全てから救ってみせる。だから君はただ笑っていてくれるだけで良いんだよ」

「…あり、がとう」

私は光で前は見えない筈なのに目の前には柔らかな笑みを浮かべつつ凜々しい目付きで真剣になっているような男性を幻視した…。

その表情に私は鼓動が大きくなり、脈が早くなつた。声は震えるがちになるも振り絞って感謝の言葉を出すとソツと頭を撫でられた。

「もう強がらなくても、怯えなくてもいいんだよ。」

俺が世界を…変えてあげるから。戦争なんてしなくても生きるってことが何なのかは少しずつ理解していけばいいんだから…。だから今だけは俺を信じて待っていてくれ。すぐ終わらせるから…」

何故だろう…初めて会うのにこの人とは何処かで会ったような…そんな気がしてしまふ。安心して任せられる…そんな気がした。

だから私は光とぬくもりの中で微睡むようにゆっくりと意識を手放した。

S i d e 群像

その日、霧という存在は人と戦う事を止めた。それは霧だけでなく人側もそうだった。

暴走する超重力エネルギーは爆発し全てを飲み込むと思われていた。世界の各地で見られた超状態現象は地球で住む全ての物から戦意を喪失させるには充分な事を起こした。

政府はこの出来事が余りにも滑稽無党で信じられなかったようだが箝口令をしいたそうだ。

俺達蒼き鋼のクルー達はその現場を目の前で生身で見えて肌で感じる事が出来た。だけれどその現場はあまりにも残酷でありながら美しいと思った。

あの時の人間は体に主砲や飛行甲板などを積み、異様な光景を作り出していった。エネルギーである光を体に吸い込ませるように吸収させるとその主砲を空に向けていた。

その前後で運良く聞き取る事が出来た言葉は彼の言葉だったのだろう。

「…エネルギー300%充填を確認。周囲のエネルギー異常鎮静化確認…全力全開、波動砲発射!!」

そして光の柱は空へと至り、それでも勢いは衰えることなく光輝き続けた。彼は先ほどまで死闘を繰り広げていた筈のキリシマをお姫様だっこしていた。

彼はエネルギーの残姿と思われる輝きを身に纏いながら優しげに微笑んでいた。それがまた絵に成っており、何処か現実離れた光景に幻想的だと思わず見惚れてしまっていた。

「其処の潜水艦の乗務員…俺はヤマトだ。

誰の敵でもなく、誰の敵にもなり得る者…それが俺という存在だ。だから抵抗又は戦闘など考えるなよ？俺だって無闇矢鱈と戦いたいわけじゃない。」

つらつらと話す彼は戦艦ヤマトと名乗った。あまりのビッグネームに俺達の時間が止まったようにも思えた。

「俺は戦いが嫌いだ。でも目の前で救いを求める子を無視する事が出来るほど腐つてもない。だからーっただけ頼みがある。」

「…なんだ?」

「戦いをやめて欲しい。誰も傷付かなくて良い世界を俺は見たいんだ。この子も戦う事に恐怖していた中身は普通の女の子だったんだ…頼む。この子達には俺から話をつける…どうかかな?」

「俺はそれでも構わない。むしろ此方から願いたい位だ。」

僧や杏平達からはもつと慎重に行くべきだという声が上がったがそれは得策じゃないような気がした。柔和な顔と丁寧な物腰からは想像出来ない程に目が冷徹に射抜くような強い意志が見えかくれしていたように見えたからだ。

曖昧な返答は許されない…敵にも味方にもなるなら彼に借りを作るのも悪くないと思えた。

「前方より敵艦影あり…あれはコンゴウとマヤ」

「まさかの大將自らが動き出すとはな…」

背中にヒヤリとするものが流れた。此方の戦力は皆無。今ここで戦闘になれば俺達に明日はない。

考えろ…何が正解なのかを…

「貴様がヤマトか」

「ふーん…カッコいいね！」

二人は俺達には眼中にないともいうかのように目の前の人物にだけ視線を向けていた。

その視線の先のヤマト抱えていたキリシマを抱え直すと警戒しながらも返事を返していた。

「俺は宇宙戦艦ヤマト…それで君達は？」

「マヤだよ〜♪」

「ゴンゴウだ。霧を任されている…ヤマトが何を聞きたいのかは把握している。私達霧とは明らかに違うヤマトに私は警戒していたのだがアドミラリティコードの更新により今から私達霧はあなた様の傘下に下ります。アドミラリティコードは敵対することは絶滅することだと判断した。」

故にこうして貴方を迎えに上がりました…ここまではいいか？」

マヤは元気そうにピョンピョンと跳び跳ねながら自己紹介をすると俺のすぐ隣へやってくる。時折熱っぽい視線を感じる？気がするが興味深く観察してるとっていうのが真実だと思われる。俺はそこまで自意識過剰ではない。

そして、もう一人であるゴンゴウ。此方はヤバイ

何故だか分からないが…先程から背筋が凍るといふのか冷え冷えとする感覚が止まらない。レッドアラームのように警告音が頭から離れない。

ジツと見詰めているのだけど視線が離れない。それとなく体を動かし視線から逃れ

ようとすも永遠とロックオンされっぱなしであり、無表情に見えなくもないがうつすらと口角が上がっている。

「…理解が追い付かなくなりそうだから詳しい事はまた今度でいい。1つだけいいかな？」

「どうぞ。あなた様が望むなら幾らでも」

「えへへ♪温かいねえ!!」

背中からの腰の辺りにグリグリと頭を押し付けじやれてくるマヤは懐いた子犬のようであった。妙に距離が近いがこの子はたぶんパーソナルスペースが殆どないに等しいのだと推測する。だが耳が真っ赤になるほど暑いならくつつく必要もないと思うんだけどなあ…

「ツッ」

ゾクリッ!

明確な死というものが見えたような気がした。誰かが発するそれは近くから…そう

目の前から掛けられた気がしてマヤに向けていた視線を戻し前を見ると凍える位に冷えきつた目をして睨み付けられていた。

瞳から見えたのは色濃い侮蔑と微かな怒り…だろうか。

「ヤマト…お前は私の物だ！マヤには渡さん!!」

「ふーん、だ。ヤマトはマヤのお兄ちゃんって出合ったときから決まったんだもんね！
コンゴウにだつて渡さないんだから!!」

「…バカらしい。イオナ、この海域から離脱。ヤマト、これは貸しにしとく又いつか会おう…ではな。」

「…バイバイ」

「え!!ちよま…この状況下で退避!!もう少しま…あー、行っちゃったよ」

青い潜水艦は潜り姿を消してしまっていた。だが何故だ？

分からん…なんでこんなことになつてる？

未だ口論から取っ組み合いに発展しかけているデッドヒート二人組は暴走する。放置…ではないがどうしようも無いため現状を把握するのを優先させてもらう。逃避ではない

「マヤさん？」

「親しみを込めてマヤって呼んで☆」

「マヤ？」

「なあに？おにいちゃーん？」

腰にタツクルをしてくるマヤに俺は更なる混乱に陥る。今この場で助けてくれる人は居ないんだよねえ。そしてコンゴウさんを取り巻く空気が一段と重いものへと変貌する。…そしてコンゴウさんのフォローをいれると今度はマヤが…なんて永遠と繰り返される。いたちごっこことは正にこういう事を言うのだろうか？

「知ってる。それを人は修羅場というらしい」

「あ、大丈夫だった？あの瞬間海に突き落とされてたから心配だったんだよ。あと修羅場っていうのはなんかちがくないかな？」

「大丈夫。修羅場で合ってると思う。」

私達霧は概念伝達っていう意識を共有する術がある…たぶんキリシマが見た物が、思いが…全てそのまま伝わったのが原因だと思われる。かくいう私もそれは例外ではな

い…。こんな思いを抱いたのは初めてだった…ポツ
「はえ？」

拜啓

鎮守府の皆様…俺は今色々ピンチです。前門の虎後門の狼…四面楚歌、踏んだり蹴ったり、泣きつ面に蜂…兎に角絶体絶命なのは確かです。もう楽になつていいでしょうか？恋愛面でのいざこざなんて初めてだからどうしていいか分からない。詰んだ…もう流れに身を任せてもよかですか？（・ω・；）

ああ…駄目です!!大丈夫じゃないですよ!?榛名は許しませんからね!!

ヤマト!?もうフィニッシュ?なわけないでシヨ!?まだまだいけるネー。ファイト
デース!

聞こえてますか?ヤマトさんは簡単に諦めるような方では無い筈です!私はちゃんと信じてます!!だから帰ってきて下さいね?

心なしに向こう側の金剛さん達の声も聞こえたような気がした。諦めちゃダメなの?応援されてるし頑張らないとかな?ヨシッ!!気合い入れていきます!!

それ私のセリフだよな!!え、金剛さん方って言うてるのに私は無視なの!!

「「抜け駆けした罰です（だからかしら?）（ネー）」」

ひえええー!!

脳内コント? 兎に角金剛さん姉妹には後で何かの形でお礼をしようと思う。思う：
んだけど、何故か知らないがデジャブになりそうなの予感が漂っていた。

どうしてそう思ったのかも検討つかないのに：何故?

「「…で、誰を選ぶんだ!（選ぶの?）（妹の私だよね）」」

放置気味だったのに気付けば右側にハルナ、左側にコンゴウ、後ろにマヤという配置
でした。しかも腕は引っ張られてるから逃亡は不可。腰にしがみつくとマヤも負けじと
結構な力でぎゅっとしてる。

俺がいったい何をしようのだろうか?

「「選んでくれるまで逃がさないから!!」」

かなり顔が近いです。もう少し恥じらいというものを持ってh……？
は？え？んん？

「ヤマトはこの私の物だ！いや、私がヤマトの物だ！誰にも譲らん!!これは決定事項だからな？」

声は耳元と言えいいのか？すぐ近くから聞こえる。それこそ息がかかる位の至近距離。耳から聞こえた声は凜とした強い意思がこもった声で聞き惚れてしまいそうな力強さでした。鼻からは潮の香りよりも花のような甘くて脆いけど確かにそこに存在しているとアピールするかの如く、思わず脳を蕩けさせるような感覚さえあった。

唇には柔らかく張りのあるプルツツとした感触と暖かさが残っていた。

つまりは……

「「キリシマに負けた……」」

「きききき……キス!!」

「狼狽えるな。これからはもっと凄いのをしてやr……」

ズガアン

「ふ……ふふふ……ヤマトさん、今キスしてた？私は放つて？うふふ、あははははは」

爆音を最後に俺は視界が瞑れてしまっていた。最後に見た女の子はいつたい誰だったのか？それは誰にも分からない。

ただどここれだけは言える。黒い修羅が佇んでいた…と。

ハルナの言った修羅場。的を得たんだな…。

そしてこの夢が覚めたとき何故か俺はスマキにされ鎮守府の提督室に拘束されていた。…記憶には色々靄がかかり思い出そうにも出来なかった。俺自身が思い出すのを拒んでるような気もする…。

触らぬ神に祟りなし…そういうことで釈然としないながらも納得させ今日も一日平和に生きたい。

間違えた、行きたい。

雨の音が聞こえなくなったら見えてくる物

何をやってるんだか…たぶん今の俺達の状況を見たら誰もがそう思うんじゃないかと思われる。

— というのも俺は現在ドラム艦で炬燵でぬくぬくしていたんだが雨が降り始めたのでドラム艦に屋根を取り付け（自作の屋根である）また炬燵に籠っていた。

屋根は鉄柱四本、四角形でいう四つ角に配置しその柱の上に横にしたドラム缶を切つてくつ付けて作った屋根を溶接しただけの簡素なものだ壁も同様の方法で作つてくつ付けた。

…あーら不思議、外装はドラム缶が纏まって浮いているっていうシユールな絵面になつてしまいました。

しかもその中は炬燵と座布団という何て言うか…提督さんの部屋？みたいな質素な作りとなつてしまっている。世の中の匠が見たらきつと「開放感が足りませんね？」ということ間違いなしな見た目だ。雨風を凌げればそれでいいという考えはよろしく無かつたんだろう。これからはもう少し身の回りのことも関心を持つようになると軽く胸に誓いつつポツリと呟く。

「…雨の音が止まないし窓ないから異様な不安感が募ってくるんだけど？」

幸いドラム缶とドラム缶を溶接した壁の隙間から光が入ってくるから全く真つ暗ではない。てか、俺自身がエネルギーを電気に変えられるためライトを使えばいいから気にはならない。形容するなら…言ってはならないけど敢えて言おう。

「獄牢みたいだな…。」

何も無い…暇だ。言葉にしたら余計に気落ちする結果となったのは何も無いからだと思いたい。

雨のふり方が最初はポツポツ程度だったんだが気付けばザーという激しい物に変わっていた。

気持ち落ち着かせるために外の様子が見えない中雨が海に落ちる音を耳を澄ませて聞き入れていたのももう出来ないということでもある。

いや、出来たくないんだけどつまらないんだよね…。さっきまでは風流だなどか思わなくもないんだけど今のだとゲリラだな…テロみたい。という感想になってしまっている。つまり気をまぎらわせるという本来の目的が無くなってしまったという事である。せめてこういうときにヲ級がいればまた違う結果だったんだろうが無い物ねだりは自分を惨めにさせるからしたくない。

そして無情にも俺はついてない。

…悲しくなるな。

ズドンという音、炬燵のみかんが浮き上がるほど揺れる衝撃、ヨツシャーという叫びに似た喜び半分ヤケクソ半分の声を聞いたのは不幸への誘いだという真実を直感し泣きたくなった。

「これで汚名挽回だ！」

「バカだ…頭いたい。」

衝撃は壁からでプスプスと焼けた音を奏でる。その脆くなった壁を殴り付けると簡単に穴が開き吹き抜けとなった無残な壁だったドラム缶は海の藻屑となった。笑顔のアイドル事那珂の時と同じで気に入らないっていう人が表れたのだと思うと少し気が立ってしまうのも仕方ないと諦めてほしい。今回は特に実害も出ているからな。

視界も晴れ、ヤケクソ気味になりつつも外に出れば黒いセーターで眼帯をしている女の子が間抜けな事を抜かしていた。

「汚名は返上するもんだ。挽回するのは名誉だ…。それで俺に何か用か、レディ？」

「は？人？」

「ん？」

「……………」

「……………」

場の空気が死んだ。

俺はこの時ほど疲れたことは無かったと思う。襲われそう（喰われそう）になつたときは救いがあつたが今回は既に事件が起こつた後だつたからだ…。

居たたまれなくなつたのか顔を真つ赤にしてうつ向いてしまつた目の前の女性は雨に打たれしつとりと濡れる髪の毛からひとつの雫を垂らすと雫は首を伝い服の中へと入っていく。

「クツシュツ！」

「あー…風邪引くと大変だしこっちにこい。」

目に毒な光景が広がっていた。…ずぶ濡れの女性、セーターとシャツ、雨水の雫の行方の3つから答えに導いてくれると此方も嬉しい。

「雨で服が張り付いて気持ち悪かつたんだ。サンキュー!!」

「その前に頭とか拭いてくれるとありがたいんだが？」

「お?んじゃ、これでよし」

「何がよし。だバカ!!」

こいつ、近づいてきたと思ったら俺に抱き付いて俺の服で拭きやがったぞ!?!それに腹の上辺りから服越しに柔らかい感触とか…以外と大きかった…じゃない!何してくれやがる!!俺までぐっしよりじゃねえか!

「俺は天龍だ!よろしく頼むぜ、色男?」

「…はあ。ヤマトだ。つたく、これタオルだ使うといい」

無邪気に笑うコイツの顔に毒気を抜かれてしまう。

俺はやるせない気持ちになりながらも天龍の頭にタオルを被せ、ゴシゴシと乱雑に撫でる。髪がボサボサになったようだが知らん。風邪引かれて此方まで移されたら堪らん。

はあ…。

そして彼女が何故あのような事をやらかしたのかなど事の経緯を聞いた。

「いやー、参った参った!!遠征中に雨降ってきて挙げ句駆逐艦達と行動してたんだが潜水艦に襲われちまつて俺がしんがりをして追い払った後迷っちゃまつてな!まあ、誰も沈まなかったからいいんだけどな!

で、デケエドラム缶が浮いてたから最初は敵艦かトラップだと思つて撃ちまつたつてわけだ。よく考えれば大シケの海で流されずに留まり続けるなんて有り得ないよな。なっはっは!」

というより勝手に語り始めていた。勘違いで撃たれた俺はここで何をするのが正解なんだろうか?

怒る? 同情する? 黙り混む?

うーん…

「まあ、アレだ。次気を付けてくれればそれでいい。今回は不問にしとくよ」

これくらいが妥当だろうよ。

サンキューと明るく返される。でも、此方も不審なドラム缶の塊を作り上げた責任もあるんだよなあ……。ドラム艦がドラム缶だもん。外装についてはもう少し検討が必要かもしれない……。

：中に入れたが根本的な解決は出来ない件について討論を始めよう。

まず、俺は男彼女は女の子である。

つまり濡れた服を脱がし、乾かすことは不可能。一瞬エネルギー波で弱火程度の熱を発生させりゃいいんじゃないかね？とか思ったがそこまで加減ができる気がしない。最悪服が炭になる未来が見える。

まるっと収まる正解は無いということが現状である事は理解出来ただろうか？そして次にいこう。

有るものはみかん、タオル（予備を含め三枚）俺の服（此方はオーダーメイドのため枚数は二着）炬燵だ。

資材が足りない。大惨事である。

では逆転的発想で裸じゃなければいい。

と言うわけで

「すまない、そのセーターを脱いでほしい。」

「うへえ!!? ななんああ!!? 狼だったのか?」

「ん? 艦だが?」

「あ…: そうか。ヤマトだもんな…: ヤマト、ヤマト?」

可愛らしく首を傾げる天竜に弱冠ほっこりしたがあの焦り方は尋常じゃなかったがどうかしたんだらうか?

変なこと言ったか?

…: すまない、そのセーターを脱いでほしい。脱いでほしい、脱いで欲しい。……: 。

「Σ (。D。 ; ; ; D。) !!?」

「ん、ふう…: 濡れてううん…: 脱ぎづらいぜ…: ふう、んう」

え、ちよつ! 焦つてたよね!!? もしかして納得しちやつてたの!?! 貞操観念が薄すぎない

!!? あの鎮守府色々大丈夫なのか?

てか色っぽい声出さないでっ!

「ふ、やっと脱げた。ほれセーターだ。乾かしてくれんだろ？まったく、異性だからって気にしすぎだぜ？俺だったらバスタオル一枚でも問題ないっていうのにな！気を効かせてくれてありがとよ！」

「雄々しいな？てか、男の前でそういうのは止めなさい！！」

「おかんか！龍田といい、お前といい気にしすぎだぜ？」

「見知らぬ龍田さんが正しいよ、それは。」

流石のヤマトさんもこれには脱帽です。呆れつつ天龍に向き直り、セーターを…受けと…る…!!!?

「ごっつはあー！」

「や、ヤマト！！」

止めて、近づかんといて！そんな格好で…ふん！！

「ヤマト?! 自傷?! 目潰ししてどうした!」

「未婚の女性がそんな簡単に肌を…下着が透けた姿を晒すんじゃないやありません!! タオルで

も羽織って下さい!! それである程度は水分を吸収するはずなんですからね! お兄さんホント君の将来が心配ですよ!」

「…え?…ん、あつ!! きゃー」

遅いよっ!?! その反応全てが遅い! 島風がキレるレベルだよ?! とか言いつつ俺は床にもんどり打つ。カッコがつかない? 知るか! 女性を傷付けるのは俺のポリシーに關わんだ! プライドだプライド。

傷みで意識が薄くなるな俺は他人事のように呑気に「あ、そういえば雨の音弱まってきたる」とか考えていた。

そして天龍が落ち着いたのは俺の視界が回復してきた辺りだった。で、炬燵で暖をとり天龍の正面にいるんだが空気が重い。

「すまなかった」

「いや、不可抗力だろ？」

「だが一瞬でも見てしまったのも事実だ。」

「…ならおあいこつてことでいいじゃねえか。俺に非があつたんだしよ…」

と、一応纏まった。

セーター？ ああ、俺が恥ずかしさMAXになつたら熱放出したからそれでほとんど乾いたぞ。天竜も俺も今はみかんを食つてる。タオル羽織ながら

「それでヤマトは、さ…あのヤマトなんだよな？」

「どのヤマトだよ。宇宙戦艦ヤマトって名乗ればいいか？」

「…うん。分かったけどそうか、お前がああの人だつたんだな。噂も案外宛になら無いんだな。目で見てよく分かった…実際はもつと良いもんだつたしな」

天龍がしおらしい。一带どんな噂だつたのか一度問いただしたくなつたが傷付きそうだったからやめた。最後はなんて言つたんだろう？ 考えに没頭して聞こえんかつた…。

「そ、そうだ！なあヤマト!!俺って怖いか？」

「どんな意図で言ってるんだ？そんなワクワクされながらそんなこと聞かれたのも初めてだよ。」

だが、天龍は答えない。たぶんこの問答を答えるまで教えてくれないという事なんだろうと思う。

怖い？

「…俺の感性だから回りは知らんが怖くないよ」

「なんでだよ!!」

「怖いっていつぱいあるけど俺には君は色々心配になっちゃう支えてあげたい女の子ってイメージが強いからかな？…そういう意味ならしでかさないか怖いって言うのかも知れないけどな？それでも悪ぶってるけど一生懸命な君を俺は好ましく思うから怖いとは思わないんだ。たぶん他の人もめんどくさがってるけど面倒見のいい天龍を好きなんだと思うからだから怖いって思わないんじゃないかな？」

「…う、あ。あう…」

「つてというのが俺の偽りざる本心と考察結果だな。」

プシューつていう音がしたが天龍が暑くなっていた。寒いよりはいいかな？

でもいきなり立ち上がると掛かったセーターを引つたくるように胸に抱えると止みかけの海に走つていってしまう。

光も出てきたようで空には虹がかかる。

鎮守府に急ぐ天龍は虹をくぐるかのようにしながら水平線にと消えていった。

でも、無礼だったんじゃない。確かに奇跡だったが小さな声を俺は捉えていたからな。

「ふふ、ありがとう。か…いい言葉だよなやつぱ。」

…タオル持ってたかれちやつたけど

五月の晴れ間に出会ったあの子

春眠、暁を覚えずとはいうがこの季節……いや、年中無休で温かな陽気というのは眠気を誘うものだと思う。それはどんな生物でも変わらぬ。人であろうと動物であろうと、俺という兵器であつてもだ。なぜこんなこと突然言うか？

それは仕方ないというものだ。ゆつくりとでも語ろう。だからここは静かにゆつたりと聞いてくれると俺としても嬉しい。

「やあ、僕は皐月だよ。睦月型なんだけどお姉ちゃん達より実は日の目を見ることになつたのは速いんだ♪だからお姉さんといつても過言では無いんだよ!!」

「……………」

「む、無視は止めてくれ!」

「……………」

「あ、あの……」……。「僕……」……。「臯月つて……」……。「」

「……なんで、無視するのお？ひつぐ……僕、今日楽しみにしててこの挨拶だつて一生懸命色々考えてきたのに。僕やマトさんの事怒らせた？怒らせたのなら何が悪かったのか教えて。直すから！」……。「」

……うわぁーん

「……やかましい……ん……ふわぁぁぁ……。あれ？」

大きな欠伸を出した俺は口に手を当て、目尻に溜まった涙を拭う。曖昧になっていた寝惚ける頭を徐々に動かす。

状況整理をした結果俺は炬燵で温まっていたらいつのまにかうたた寝していたようだと結論付ける事もできたのでまったりし直す。この前は雨で大変な目にあっただけだからこそも陽気な日差しだと眠たくなっちゃうのも仕方ないと思うんだ。

……でも起き抜け一発目にこんなのはどうしたらいいか分からないんだけど？

まず重い瞼を持ち上げ目に入ったのは炬燵の上で丸くなる金色と黒の塊だった。

それが人だと気付くのかかったのはコンマ二秒程だった。少し眠気で反応が遅くなっていた。

戦場ではこれが命取りになる……今後は寝起きでも素早く反応できるようにすること

も視野に入れとかなければな。

だが、やはり起き抜けて状況も分からなかったのがいけなかったのか思わずすつきょうな事をいつてしまったのかもしれない。

「…行儀悪いから机や炬燵の上に乗らないようにな？ いったいどんなことがあったのか寝てたから俺には分からんが相談位ならのつてあげるから落ち着くといい。」

確かにそれもそうなんだけど他に言わなきゃいけなかった事っていっぱいあったよなあ…なんてそんな事をボーツとした頭で深く考えていた。だが炬燵の上で泣く金髪少女はお構い無しとでもいうかのようにその瞬間にガバツと顔を上げた。

「寝て、た？……………ふにやああー！！?!」

「奇声をあげるなよ…そんな至近距離で大声あげられたら耳が痛いだろうが。うう、耳鳴りがする…」

キーンとなる耳に思わず顔をしかめるが目の前の人物には聞こえてないようであわ言のように「え、え…？でもふえ？近…はふうー」とか言っていた。

俺は目先の人物の珍妙な行動を横目に呆れつつも背伸びを一つと欠伸を吐き出した。

「…俺はヤマトだ。で、君も自己紹介をしてくれると嬉しいんだけどさ…うん。落ち着こうか、さつきから君は情緒不安定過ぎないかな?」

「だってだって…僕、僕…うにゃああぁー…」

頭から湯気を出して涙目になった少女はショートしたようで真つ赤になったまま直立不動のまま気絶していたのだった。…炬燵の上で

そして自己紹介も出来なかつたまま彼女が起きるまでの間俺はすることもなく空を見上げていた。遙か遠くには流されていったであろうドンヨリとした鉛色をした雲の群れ。だが通り抜けた此方はそんなのお構い無しとでもいうかのように燦々と光る太陽と雲間に青々とした空が広がっていた。

雨は別に嫌いじゃない。雨には雨の良さがあり、晴れには晴れの良さがある。それを

俺は否定するつもりはない。

でも、それでも雨上がりというのは暗さから明るさへと転じる瞬間であるその瞬間というのは黒々とした雲の切れ間から差し込む日の光が白いカーテンのように見える。たったそれだけなのにその瞬間を見ると幸せな気持ちにしてくれる……だから好きなんだ。

そしてふと何故こうなったのかも客観的な目線で自己判断してみよう。

目の前には何故か幸せそうに気絶する金黒少女。俺は寝てて起きれば炬燵の上で泣いていた。

うん、言葉にしたら余計分からなくなった気もするが致し方ない。俺にだって無理無茶無謀なこと位はある。

「じゃあ、寝てた間に何かあったのは確実だろうが今は置いとく。で、起きてからを纏めれば泣き止むように言い、自己紹介をし、さらっと注意をしたな。」

強引な気もするが辻褄自体は合う流れがこれか……泣いていた……悲しい。故に傍目からみて僕の悲しみを推し量れ。これだと俺がああ時の気の効いた事を言わなきゃいけ

なかったって訳だ。つで、あとは注意されたのが気に入らなかつたっていうパターンだ。

今の俺に出来ることと言えば起きたらまず謝ることだろう。

だから深く考えるのはそれからしよう。寝ているこの子の髪を撫でそんなことを考えて改めて良くこの子を観察してみることにした。

髪の毛は金色でうなじの付け根らへんで黒いリボンで二つに結んでおり髪の毛の長さは毛先が膝元ぐらい伸びている。

服装は黒いセーラー服で首もとのネクタイ？だけが白色をしている。足にはタイツを着用しているためかなり黒い。

見れば見るほど黒いとしか表現できない…。

もし夜に出撃したら白いネクタイだけが見えて浮いてるように見えるんじゃないかと思うよ。で、月明かりに照らされれば髪で反射して眩しい、と…黒と金色合うけども危険色に見えなくもない。なんていうか頑張っただけかと思わず思ったが何を頑張っただけか？それは終始分らず仕舞いだった。

顔は幼い少女、睫毛も長く顔立ちも整っていて…ってこれは全艦娘さんに共通するんだけどね？それで戻すけど大人っぽく見えなくもない。ちぐはぐな妖艶さでもいう

のか、とにかくそんなアンバランスさを感じた。でも別にそれがおかしいと言うことではなくいい意味でアンバランスと思う。

髪は更々で撫でていると時折気持ち良さそうに口角を上げて笑ってる寝顔は可愛いと断言できる。…もし娘が出来たらこんな娘が良いかななんてな。

とかバカな事を考えている間に目を覚ましたようで欠伸をしながら目の端に溜めた涙を拭っていた。なんとも微笑ましい光景だ。形容するなら起き抜けの仔猫と言えいいのか思わずほっこりした気持ちにさせた。

「ふふ、起きたかな。気持ち良さそうにしてたがいい夢は見れたかい？」

「…うん。……？……!!？」

寝ぼけていたようで顔を覗き込むと目を擦りながら返事を返してくれた。一瞬間があつたがバツと起き上がった少女はやはりネコのような俊敏な動きで跳ね距離をとつた。ドラム艦の上に座布団があるとはいえ硬くて体に負担がかかってしまうからね。悪気は無かつたがやらかしてしまったのも事実で、故に悪かつたたと反省し多少は庇えるかもしれないと俺の腿を枕にさせてたから近かつたのがいけなかつた？

目の前の少女は俺の顔を何度も何度もチラツツと見ては視線を逸らす行為を無意味に繰り返している。

明らかな挙動不審になってしまっている。

…ツハ！分かった、今回ののは俺も分かったぞ。

今回はきつと、寝ている時は無防備な姿をさらしてしまっているということとそれを誰かに見られてしまったから恥ずかしくて怒ってるんだな！

だからあんなに真っ赤になって口をパクパクさせてるんだと思う。フムフム、我ながらいい推理だ！

「…って違う!!君、すまないな。俺が気が利かなくて…さっきも今も配慮が足りてなかったな。以後気を付けよう。だから今回だけはゆるしてくれないかな。」

「ふえ?…ええ、え?あれ?僕…ん?ええ?」

あ、頭下げないで!!僕も言葉も足りなかったし、見えてなかったんだ。だからおあいこつて事で…ね?」

「…そういつてもらえると此方も助かる。ありがとう」

「…ぼー」

「…俺の顔に何かついてるかな?」

「…はにゃー！」

ブーツとしていた少女が反応が無かったために近付き目の前で手を振ってみようとしたところ我にかえったようで今までで一段と大きくバツと距離を取っていた。

でもさつきとまでは一つ違うのはまた俺の顔を一度確認すると真つ赤になりながら立ち止まることもなく遠くに離れていつてしまった…。

今回は慎重に事におよんだはずなのに何故だ…。げせない。

逃げられてしまったのを考え、心のどこかに一抹の悲しさをのこしながらその後ろ姿だけを眺めることしか茫然自失となった俺には出来なかった…。

この気持ちはたぶん近所にいたネコを愛でたくて近付いたら逃げられてしまったような切なさなんだと遅れながらに気付き「失礼だな、俺。」と小さな眩きを漏らす。そして忘れていた事をふと思い出した。

「…結局あの子は誰なんだよ」

虚しくその眩きは空を切るかのように行き場を無くし、俺の耳に残ったのだった

劇場版 夜戦忍者 coming soon!!

とある場所でのとある日常、それは平凡であり非凡であった。

表では平和的に暮らしていたが、裏では常に闇が手を伸ばしていた。簡単にその手をとれてしまう…というのがこの裏と表の世界での一番の問題であった。

だが、根本的に表と裏は互いにS極とS極の磁石のように引かれ合う事など絶対にならないことで今だかつて表の人間が裏の取引に応じない。またその逆もしかり。

だが、その決まりが破られる時が来てしまったのだ…。

ジャカジャーン♪

そして、表の世界と裏の世界の両方で生きるものがここにもいた。表の顔は川内型軽巡洋艦、川内。

彼女は今日も鎮守府高校で姉妹である那珂、神通と共に平和に暮らしていた。

「おつねえちゃん!!聞いて聞いて♪」

「ふふ、那珂ちゃんそんなに急いで走ると危ないわよ?」

「もう、朝は弱いつていつも言ってるだろ?分かったから叫ばないで…」

「ひつどーい!!もう那珂ちゃん怒った!お姉ちゃんに私の本気見せちゃうんだからね!」

そう、平和に暮らしていたのだ。

だが、この平和も長くは続かなかつた。

出合いは運命を変える、それはいい意味でも…悪い意味でも…

「川内…憎ければそのクナイを握れ。お前が強くなった時、再び相まみえる事になるだろう。」

それまでに貴様が裏である我らに反旗を翻すのを楽しみに待っていていよう。クツハツハツハ!!」

「待てっ!!」

「お姉ちゃん…那珂ちゃんね…もつといっぱい話したい事があつたんだよ?昨日だつて…今日だつて…明日だつてそうだったと思うよ…あはは、お姉ちゃん涙でぐちゃぐちゃだよ…顔を上げて?那珂ちゃん知ってるよ…お姉ちゃんがどれだけ朝、面倒そうに言つても笑つて見守つてくれたの。…だから今度は那珂ちゃんの番つてだけ。泣かないで?辛くても笑おう?きつと、お姉ちゃんなら笑えるよ、だつて那珂ちゃんの誇

りのお姉ちゃんだもん。」

「那珂、那珂!!ダメだ!!逝くな!まだ助かる、助けるから!だからお願い、行かないで…私を置いて、行かないでよ…」

「お姉ちゃん、神通お姉ちゃんの事も宜しく、ね……」

「那珂ああ……!!」

裏の世界…川内は那珂の仇を取るために立ち上がる。

もう一人の妹、神通を守ると共に彼女は裏で生きる姿を手にしたのだった…母親の形見、それが彼女の裏の姿。

彼女は闇夜の中に赤いスカーフをたなびかせ、切り裂くように駆け抜ける。悪を憎み、罪を罰し、よわきを救う…そう、彼女の名前は

夜戦忍者

彼女はついに奴等にであう。

那珂の仇…悪の軍団、デープシーズに

「ククク、アレカラ腕ヲ上ゲタヨウダナ？ダガソノ程度デハマダマダダナ!!クラエ!!」
「ぐあああああー!!」

「クハハハ!! 甘い甘い、甘過ぎル!! オマエニハ期待シテイタノダガトンダ見込ミ違イ
ダツタヨウダ!! 死ネ」

「やらせない!!」

「何っ?!…フツ、成ル程姉妹揃ツテ消シテクレヨウ。」

「神通!! ダメだ!! 逃げて!」

「これで良いの。姉さんを守れたなら…これで…」

「止めて…神通にまで居なくなれたら…私…」

夜戦忍者は孤独と戦う。

悪を憎み、悪意を刈り取る。

でも、彼女はどんなに強かろうが女の子…死を恐れるのは当然で…

「今のお前からは何も感じられないな。正直、ガツカリだ。」

「貴方に何が分かる! いきなり現れて命を狙っておいて…私がいったいどんな気持ちで
戦ってきたかも知らないくせに!!」

「ふん。そんなの知らないのは当たり前だ。俺は俺でお前はお前だ。

相手を理解する？ 烏滸がましいにも程がある。分かつとすることすらやめた者が何を言っているんだ？ お前はただ壁にぶつかり進むのを止めた臆病者だ!!」

突然現れた者は夜戦忍者の敵なのか?! それとも味方なのか?!

「やつと、死ぬる。……ここが俺の死場所だ。

そうだな……自白するなら俺は君のその前向きさが好きだった……。なんてな。何大丈夫だ……俺は望んでやっただけ。お前が気に病む事なんてない。

明鏡止水の心を忘れなければ君に届く者など居ないさ。

……憎むだけなら誰でも出来る。それを乗り越えた先に見えるものを一緒に見る事が出来ないのが唯一の心残りだ。」

「何で……何でなの?! 私、ずっと……ずっと勘違いしてなんどもなんども殺そうとしたのに……それなのに……」

「君は敵を勘違いしてただけだよ。俺は君に殺されるならそれはそれで本望だった。だけれどどうせなら君の為に死ぬって覚悟にいつしか変わってたんだ。」

「やだ……やだやだ!! いつも誰も守れないなんて嫌なの!!」

「驕れるなよ小娘」

底冷えるような低い声。それに夜戦忍者は怯えた。

目の前の人物は死にかけなのに殺される…そう誤認させられるほどの殺意と怒気が含まれていたから。

「全てを救おうと思うな。ただ、お前が守りたい物だけを護れ。人は人でお前はお前だ…それでも全てを救いたいなら覚悟を決めろ。…その先を見付けられたとききつとお前はもう立派な一人前だよ…」

「ごめんなさい…」

「最後まで優しくしてあげられない俺を許せ。言葉では言ってもお前のそのひたむきさは嫌いじゃないんだ。

…もう行け。」

ソレは最後に夜戦忍者の頬を伝う涙を拭くと、力なく腕を地面に落とした…。

夜戦忍者は決意を胸にたちあがる。涙は乾いた…憎しみも、悲しみも今はいらぬ。ただ目の前の壁を壊すだけ。

「私はもう迷わない!! バカで結構、夜戦上等!!

悲しみも憎しみも全て背負って挑む! 最後に笑えるた者が勝者だって教えて貰ったんだ!! 無駄になんかするもんかっ!!」

夜戦忍者は最後の敵に挑む!

劇場版、夜戦忍者

く暁に沈む夕日く

近日公開!

「皆さん!! 是非劇場へ、待ってまゝす!」

…と、これで収録は最後なのか。

終わってみると案外短い物だな。最初は俺が出演なんて聞かされた時は一時どうなるものかと思つたが、案外どうにかなるもんだなあ…。

「おつ疲れ♪後は公開を待つだけだよ!!」

「とは言うが、主役が一番疲れたんじゃないか?」

俺は背中をバシンバシン叩く川内に笑いながら冷やかす。俺自身、川内が心から楽しんでこの仕事をしている事を知っている。

俺と川内姉妹はこの収録で大部仲良くなった。それこそ冗談を言い合えるぐらいには。

「あ、ヤマトさーん!! 姉さんの相手なんてせずに此方に混ざりませんかあ?」

「そうだよー、監督さんとか皆で打ち上げで焼き肉行こうって話だよー♪」

「なんてって何?! 神通なんか最近私に辛辣じゃない?!」

「あはは」

俺は戦艦で幾多の戦いで血を流してきた。でも、こういうほのぼのした日常は大好きだ。俺が守りたかった日常だと思う。

もし、この世界にも裏があるのだとしたらきつと俺は立ち向かうだろう。守りたい者があるから…

「ほらほら〜ヤマトさんも行くようよお〜♪」

「あ、こちら！那珂そんなにくつついたらスキヤンダルになるぞ？」

「ふっふーんだ!!別に那珂ちゃんヤマトさんならスキヤンダルになってもいいも〜ん!!」

「なっつ!!」

「ヤマトさん…私の初めてを奪ったんだからそんな無責任な事、しませんよね？」

「え？」

「は…?はあぁー!!」

「何ソレ!!お姉ちゃんだけズルい!!」

神通?え?初めてって何?それとなんかやけに後ろから視線を感じるんだけど…

チクチクする系の視線だよ!!

攻められてる？

「ヲ…ヤマト、覚悟ハ？」

「青葉的にもこればかりは見過ごせないよ？」

「なんで妹に手を出してるんだ!!」

「なんでこの映画で初めて会ったお姉ちゃんには手を出して、那珂ちゃんには何もしてくれないのかなあ？」

あ、終わった…

気付けば敵のボス役だったヲ級と映像監督を勤めた青葉も合流していた。

…だから初めてってなんなの!!みんな怖いよ!!

「「逃げるなあ!!」」

拜啓、今日も俺は元気です。

相変わらず面倒事には巻き込まれるようではありますがありますが楽しくやっています。

「逃ガサナイ!!」

「スキヤンダルなら青葉にも一口噛ませてください!!」

「いつのまに手を出したんだ!! そんな軟弱だったなんて」

「アイドルなのに色気が無いのが悪いのお!!」

「何の話だか全く分からないんだよおー!!」

俺はこうして一ヶ月に渡る映画の撮影を終えたのだった。

side
???

「ナア?」

「何も言ウナ」

「ダガアレハイクラナンデモ…」

「CGモ、ワイヤーモ何ニモ無ク立体移動ト空中殺陣ヲヤル地球人達怖イ…。」

「デモ生身デノガ? ダムファイト…カッコイイ!!」

こうして、裏中でもこの撮影をこつそり見ていた者がいたために行動を起こそう

としたものは一人も居なかったそうだ…。

そして監視をしたものの中には…

「アノヤマトトカ言ウ人物…次ノ作品ニハ出ルノカナ？」

「オイ、ソクナコトヨリ、ヤマトト神通トイウ軽巡洋艦トノヤリトリ、見タ？」

アレ、撮レタ映像凄イソダガプレミアア化シタソウダゾ!!」

「ソクナコトヨリツテ何ダ!!」

「見レバ分カル!!ダカラソノ腕…主砲ヲ下口ソウ。私モ実ハソノ映像ヲ持ツテルソダ。一緒ニ見ヨウ」

「…許ソウ。」

「…ココココココココ」

「オチツケ!!」

「オマエモナア!!鼻血ガスゴイゾ」

「ダガ、プレミアアモ領ケル…」

「イヤ、分カルガ鼻血フケヨ。」

「…ソナナコト些細ナ問題ダ。お願いがあります総長!!」

「何デ…流暢ニ話シタ。…何が言いたいのかは分かった、その願い聞き入れよう、一等兵。」

「ははあ!!ありがたき幸せ!!」

というやり取りもあつたようでプレミア化した映像が裏で出回るようにもなりヤマトの名前瞬く間に伝染していくが如く裏で囁かれるようになった。

プレミア化した映像は…

「これ、どうぞ」

「ありがとう、神通さん。」

そして気まずいような空気が流れる。ソワソワ落ち着かない様子の神通、違和感に首を傾げるヤマト。三十秒ほど続くとヤマトが意を決したように会話を始めた。

「…でも神通さん、ちよつと意外でした。」

「…え？」

「俺、てつきり嫌われてるのかと思つてました。川内と那珂ちゃんには面識があつたのでワイワイやれましたけど神通さんつて川内達と違う雰囲気というか品があると言いますか…なんとなく一歩二歩下がったところにいるみたいだったので…」

「変、ですか？」

「あー、違う違う。そうじゃなくて」

「お姉ちゃーん!! もう差し入れのドリンク無くなっちゃったんだって! もう飲んだ?」

「そうなの? 飲んだわ。那珂ちゃんは?」

「ダイジョーブだよ♪」

「ワザワザありがとう。」

「ううん、1個持ってたと思っただけど一応言っておこうかなって! じゃあ、私の出番もうそろそろだから行くね?」

「頑張ってるね。」

「…はあ」

「えっと、ヤマトさん?」

「このバカ。飲んでないなら我慢せずにそう伝えれば良かっただろう。俺が飲んだから飲んでないんだらう?」

「い、いえ…」

少しキツク怒ってるように見えるヤマトは怖いという印象を受ける。だが、立ち上がると神通の顎を少し持ち上げる。

「ったく。倒れたら元もこも無いだろ? 男なんてどうとでもなる。だが君は女の子だろ

う。君が倒れたら俺が心配になる。だからそれは君が飲むんだ。いいね？」

少し開いていた神通の口にドリンクのストローを差し込み、優しく諭すように言い切ると手を取り、ドリンクを握らせる。

「あんまり、無茶はしないでくれ。頑張っているのは見てるから知ってるよ。でもだからといって頑張り過ぎないようにな？」

笑いかけながら神通の頭を撫でるとそのまま去っていくヤマト。その場に残されたのは神通とヤマトに渡されたドリンクだけ……

「……これって、飲みかけだったよね……。うううううー、こんなの反則よ。あんな顔されて至近距離であんなこと囁かれて……。あうう」

真っ赤になって煙を出す神通。照れ臭そうで恥ずかしそうにしている。でもどこか輝いて見える。キラキラしていた。

「私、初めて男の人に怒って貰った。それに間接き、ききき、キスマで……」
も、もう本気になっちゃうじゃない。

その眩きは誰にも届かない。けどそれは恋の始まりを知らせる鐘の音色のような綺麗な声だったそう……

見知らぬ背中に背負う悲しみ、誇りを胸に… 前

side
???

最近、僕は誰かの後ろ姿を見る。いや、普段の生活をしていれば誰かしらの後ろ姿なんて見掛けるんだけどそうじゃないんだよ。

夢…といえいいのか誰かが見ていた物を見ているようなそんな感覚。えっと、もつと分かりやすく説明するなら艦娘が艦だった時の記憶を見る時の感覚に酷似してる…のかな。僕の記憶なのかそれとも違う記憶なのか曖昧で僕が僕であるのか分からなくて心配…とは違うけど何か…うーん、兎に角どうしたらいいのか分からなくしてなってしまうっていう感じ？

ごめん…僕も上手く説明出来ないみたい。感覚なんて人それぞれだから僕が勝手にそう思ってるだけなのかもしれないし…艦娘特有の感覚かな？

…それで、誰かの記憶を見ているって言ったけど誰の記憶なのかも分からないんだ。要は八方塞がりなんだよね…僕が分からないなんてこと滅多にないんだけどなあ…。

だからかな？余計に気になっちゃうっていうか…背中の人が夢の中でずっと泣いてるんだ。泣いて謝りながらずっと後悔してる…僕にはそう感じる夢で…每晚その夢を

見るんだ。だから分からないんだけどね。

「うーん…」

「…gれ？」

「止めてくれ…」

「えっ?!…止めちゃうっぽい!!」

「何で…何で？」

「時雨が言ったからっぽい!!」

あの夢の中でその後ろ姿の人は悲痛な面持ちでそう叫んでいた。そしてその後、世界が平和となり、綺麗な世界へと変わっていく。…だけど、誰もが救われたというのに、その人だけは何故か何処か悲しげで何かに縛られるというか、囚われているというか…兎に角、悔い続けているように僕は感じるんだ。

「時雨…!!」

「うひゃあ?!な、ななな、何が起きたの?!」

大きな音に耳がキーンってなって驚いた拍子に椅子から転げてしまう。そこで何が起こったのか顔を上げて周囲を確認して始めてそこで何が起こったのか理解した。

目の前にはほっぺを大きく膨らましてムツと怒った様子の夕立と机の上に積み上げられた本の山がそこにはあった。

本というのは資財運用における効率化を図るために行われた過去の資料、少しでも開発の確率を上げるために今まで行われた成功した例と失敗の全てを記した膨大な書類で：僕一人では余りにも骨が折れるというので：

そこまで考えると、スルツと思考の紐がほどけるように全てが繋がっていった。

「あ、ごめん。提督さんに頼まれたとはいえ、一人でやらせちゃって…」

「ううん。それは良いっばい。でもね、私少し怒ってるっばい！何で分かる？」

「…え？」

「最近ずつと悩んでるぽかった！姉妹なのに全然相談してくれなかったのに夕立はご立腹っばい！！」

「夕立…」

「白露も春雨も…海風達だっていたらきつと心配してるばい！！何でも出来ちゃうからって抱え込み過ぎるのはダメっばいっ！！」

「そう、だね。うん、分かったよ。僕ももうちよつと気楽に捉えていつてみるよ。」

「…あ、これはダメっぽい。ダメなときの時雨っぽい…はあ…時雨は頭が固いっぽいよ…。結局頼らないっていう…ぽい…。」

目の前で溜め息をついた夕立。でも、結構僕の前でだと多いんだよね。なら、信用してるからこそつて事かな？

僕と夕立は姉妹の中で一番仲がいいからね♪

回りは子供っぽい夕立と思慮深い時雨は凸凹だつて言われるけど凸凹だからこそ噛み合うんだよ。

それに夕立はただ子供っぽいんじゃないで、人を気遣える良い子だから子供っぽいんじゃないで天真爛漫なだけだと僕はずつと思つてる。誰がなんと言おうと僕は夕立の味方だからね。昔、そんな約束もしたつけ…あはは、本当に懐かしいな。

「ねえ、時雨？いつか時雨が夕立の味方で居てくれるつて約束してくれたけど、それは逆に夕立も時雨の味方つて事なんだからね？それだけは覚えてて」

「夕立…」

「それだけ…この話はもうおしまい!!」

「語尾ついてないよ」

「冷やかさないで欲しいっばい!!」

「あはは、冗談だよ冗談。うん、分かってる。」

思わずふざけて誤魔化してしまった。

何でだろう…夕立には隠さなくても良いって分かっているのに…は、恥ずかしかったのかな？

夕立に顔の赤さがバレるのが嫌だった?…うん、たぶんそんな感じなのかな。

「時雨ー!置いてっちゃうっばいー」

「あ、待って!!って、この荷物全部僕が持つの!」

「ふっふっふ、頑張ってる時にポーッとしてみた罰っばいー♪」

この時には僕の頭の中には既にあの背中の中事なんてすっかり抜け落ちてしまっていた。それは落ち度なのかそれとも…。

そして、この日のこの出来事が物語で言う伏線だったのかもしれない…そう、後で思う事になったのだった。

「お前は一人ぼっちだと思っっているのか？」

「…え？」

何処からかそんな声を聞いたような…？でも振り返っても、見渡しても誰もいない。

気のせい…だったのかな？

僕は再度夕立を追いかけて走りだした。

side ヤマト

夏の暑さが肌を刺す…いや、日焼けなんて事にはならないんだけど表面の装甲が熱を持って、余計に暑くなっているのは今は良いが後で動けなくなるとかになってしまいうので日が登りきってしまったら、どうにかしないといけないレベルにまでなってしまうのは分かりきっている為どうかして冷却する術を考えなくてはいけない。

面倒だ…

暑さからなのか目の前がぐにやりと曲がってるようにも見えるし、頭がボーツとしてフラフラする…。

体もかなりダルく、いつもより重いような気がした。

「うう…心なしか何時もより空が高く感じる…」

夏の暑さには敵わない…誰か…

なんて眩くが近くには誰もいない。何故か暇な時限定でいつもいるヲ級は実家に帰らせて貰います。という書き置きを残し、何故か俺が愛想尽かされて出ていかれた夫みたいな雰囲気を漂わせるボケにホトホトあきれ果て、追いかける訳でもなく敢えて流していた。

ヲ級にたいする細やかな仕返しでもある。

本当に暇である…。

「…ヲ級が追いかけてない事に気付いたらたぶんアイツ、『何故追イカケテ来テクレナインダ！コレジャア僕ガ馬鹿ミタイジャナイカ。折角後ロカラ抱キ締メラレテ耳元デ（行かないでくれヲ級、お前が大事なんだ。）トカ言ツテクレルノ期待シテタノニ！』とか言いそうだよな…。

…お前はバカだ。安心しろって返す感じかな？」

プンスカ怒って頬を膨らませるヲ級を幻視したような気がした。あ、なんかありそうと思うと余計に微笑ましくみえて弄りたくなっちゃいそうだな。

…あー、でもヲ級のネタでのポジティブさを考えると予想斜め上で案外「…愛故ノ弄り、アリダネ！イヤ、モットシテクレ!!」っていう可能性もある…。

つて、こんなこと考えてたら余計に俺とヲ級がそんな感じにみえちゃうじゃないかないない。

俺と夫婦つてヲ級が嫌だろ、そんなの？

大破壊兵器と化してる俺と人類の敵ということになってるヲ級の夫婦…あれー？地球全体から命を狙われかねない!!

死んじやう！いくらなんでもそんなの死んじやうから！

「…ツハ!!俺は今何を？」

わ、忘れよう。きつと白昼夢かなにかを見たのだろう。あんな事が現実で起こり得る訳がないんだ。無いったらない!!

…やっぱり、暇だな〜」

暇な時間があまりにも苦痛だったから結局俺はダルいダルいと言いつつも重い腰を上げ行く宛てもなく気の抜くままに飛び立つのであった。

突撃！いきなり大奇襲！

…という訳できました!! 鎮守府です！

え？突撃！隣の晩？飯みたいに言うな？残念、今は昼なのです♪ドヤア

ではでは、ドンドン行ってみましょう!!

こちらはくはい、入口です♪当たり前ですが憲兵さんがお出迎え！笑顔で威圧するその姿はどうやら艦娘を畏怖させてしまうそうです。でも、中身は全然そんなことなく凄いいい人らしいです。案外話してみると面白いので積極的に話しかけましょう！では次！

提督室！…スルーです♪（ニコッ）

今回の目的地、ドッグ!!

おお：雰囲気があります!!まるで犬小屋!名前に恥じぬ木造建築ですね?では、今回も奇襲の方をお願いします!!

「変なナレーション入れるんじゃない!それと勝手に引つ張つて来ておいて常習犯みたいに言つて罪を押し付けてるんじゃない!!」

「またまたく青葉は何時もヤマトさの代わりに射ぬかれながらも命辛々逃げ帰らなくちやいけないんですよ!!」

今日くらい良いじゃないですか!てか、お願いします!!」

「…ハア。全く、じゃあせめてこの質問には答えてくれ。」

「おお!!ヤマトさん男ですね♪青葉惚れ直しちゃいました。」

「戯れ言はいい。」

「射ぬかれてる…っていったが何をしたらそうなるんだ?その様子だと俺にそれをさせようって魂胆なんだろう?」

その瞬間青葉は逃げようとバレないとも思っていたのかゆつくりと音を立てずに後ろに下がる。

俺は勿論逃がす気などない。さあ、全てはいてもらおうか

「や、やだなあヤマトさん。そんな顔されたら青葉は怖くて死んでしまいますよ?」

「…安心しろ」

「ほっ」

「お前はうさぎ程可愛くない。故に罰する。」

「酷いつ!!温情もへつたくれもありませんよ!!」

「さあて、吐かないようだからふん縛って音速の世界にご招待か。宙吊りでいいか。あんま無闇に触りたくないし…」

「ヤマトさんっ!!それもう女の子に対する態度じゃ、ありませんよね!!」

「前回俺、言わなかった?分らない?次はないって言っただろう?忘れたか?なら、忘れないように体に刻み付けるだけだろうに」

「わーわー!!覚えてます!!覚えてます!!」

「あ、それと最後の台詞を優しくそしてイタズラするようにいってくださいませんか?」

「…覚えててそれか、なら容赦はいらないな。反省もない様子だし音速なんて生ぬるい事言わずに生身でワープを…」

「本当に申し訳ありませんでしたー!! 死んじやいますから!! お肌こんがり所か擦りきれてゾンビ街道まっしぐらなんてイヤです! 塵も残らないなんてうわーーん!!」

膝を着いて泣き出す青葉。…たぶん本当に嫌なのだろう。

反省がないわけじゃない。誰にもうつかりというものはあるだろう…なら今回は許してあげても良いのではないか? その泣き姿からその考えに至るには一秒とかわからなかった。俺も反省の色が見えないと思い、少し脅すつもりで言っただのは真実だ。故に罪悪感がある…極めつけは女の子を泣かしてしまうなど言語道断だろうが! という風に考え謝る事にした。

「青葉、冗談だ。誰にでもうつかりはある…だから今回に限り許す。でも、あんまり悪さをしていようだと俺じゃなくても他の艦娘の人達に迷惑がかかるかも知れないだろう?」

「…うう、本当に許してくれるんですか?」

「…うう、本当に許してくれるんですか?」

目を潤ませながら此方をミアゲル青葉に少しドキツつとしたような気がした…かも
しれない。

なんとなく気恥ずかしくなり少しだけ目線を反らす。女性の泣き姿を見詰めるのは
失礼だからだ。そう自分に言い聞かせてポケットからハンカチを出し、手渡した。

…ポケットにハンカチが入ってたことに初めて気付いた瞬間だった。

「まあ、その…なんだ。これでも使え

青葉にも考えがあつてのことなんだろう？俺も一方的過ぎた節が有るわけで…すまな
かった。」

「ううえ？…あ、いやいや!!ヤマトさんが謝る必要はありませんって！青葉も少し浮か
れて調子に乗っちゃってたんですから!!それにヤマトさんの言う通りでみんなに嫌わ
れちゃう所だったんですから、感謝はすれど謝ってもらうなんて烏滸がましい位です！
あの、だから顔を上げて下さい。」

焦ってるのか顔を赤くさせながらしどろもどろになる青葉。なんでか、よりいつそう
慌てさせたくなってきたんだが…。

「そうはいかない!!俺は女性を泣かせるっていう大罪を犯した。本来なら切腹するべきなんだ!!」

「すまない。青葉、介錯のほうは任せた…」

「介錯!!」

「ああ、なんなら俺を煮るなり焼くなり好きにしたらいい。どう処罰するかきまつたなら教えてくれればいい。俺はその罰を受け入れよう…」

俺の演技など幼稚園のソレだとは思いますが、きつと焦って自分を見失っている今の青葉なら騙されると考え、笑いそうな顔を隠すために青葉から顔を見えない位置で俯く。

「さあ、いったいどうなる！」

T o b e c o n t i n u e …

…なんて事にはならないから安心してください。

「あう…そんな…青葉…そんなに怒ってないですから。」

それに…ヤマトさんに会えないって考えただけで…ううう…」

「青葉…」

どうしよう…これ、やつちやつた奴だ。

切り出し方としてどうするのが被害を最小限に抑さえられるだろうか…。

「ドツキリ大成功〜♪」？

主に青葉の心に輝が入るだろう。なら誠心誠意謝る？

そんなの当たり前だ。結局切り出せてないし…

「ありがとう…（いや、何に対してだ。逆転の発想とは考えたがこれじゃあ情緒不安定なだけだろうが！）」

こんな…（手こずる案件も早々無いぞ?! そこまでジョークをマジに取られるほど）
思われてたなんて…（ああ、罪悪感があ!!）

俺は…（どう謝ったら良いんだよ!!）

死（体になり）あ（良いのか?!）わ（かんねえよ!!）せ（つきようでも受ければ）だ

(いじょうぶ…) な (訳にはいかないか…)

責任はしっかりやらなきゃ男が廃るよな… ヤマトとして皆に顔向け出来ない半端な事は出来ない。(よし!!) 覚悟は出来た。もう、青葉から逃げない。しっかり言わせてもらう! 青葉」

「ひゃい!!」

俺が突然大きな声を上げたせいか、大きく飛び上がる青葉。頭からは怒りからかショート寸前の回路のように煙りをたたせる位に熱くなっていた。

そりゃあ、そうだよな… 泣かせた理由にも気付いてるっぽいし、それがイタズラだったなんて言われるとしたら怒るのは当たり前か…。俺、最低な男だよ。

「青葉、これは大切な話だ。だからしっかりと聞いてほしい…。」

「…ふえ!! なななならこれってやつぱり!!」

やはり、怒っている。真っ赤だ… アワアワと動く青葉の口からは「妄想じゃない!!」とか「青葉のもしかしてが本当に…」とか「だとしたら…」とか漏れていた。

俺は罪悪感という申し訳なさから目を反らしたくなつた… でも、それじゃいけない。

俺が…ふざけたばつかりに勘違いさせて…ダメなんだこのままじゃ!

俺はすっかりと言葉を聞き入れてもらう為に焦る青葉の肩を少し強引かもしれないが両手で掴み動けないようにする。距離が近いかもしれないが腕の距離しか離れられないんだからそんなの当然で…だから気にしないように心がけながらしっかりと青葉の目を見る。

青葉の目には涙が溜まっていて今にも流れてしまいそうだった。

この涙は俺の罰だ。許されるとは最初から思つてない。でも、謝罪しないとはいかない。いや、しちやいけないんだ。だからこそ俺は今の気持ちをしっかりと伝えよう。

「落ち着いて聞いてくれ…」

俺は最低な人間だ。こんな想いを抱いちゃいけなかったのに抱いてしまった。それに青葉にも辛い想いをさせてしまった…。その気持ちにも気付いてた。でも、知らないふりをして弄ぶような真似をしてしまっていた。すまない。でも、だからこそ今ここでしっかりとお前には言っておこうと思うんだ…。」

「あ、あわわ…ややややマトさん?」

「答えは今じゃなくてもいい。ただ、今は一先ず俺の話だけさせてくれ」

「……はい…(コクコク)」

その返事を聞けただけでも良かった。きっと、青葉には恨まれるだろう。最低な事をしたもんな…だけと言おう。

それが俺の出来る唯一の礼儀だから

「青葉…」

「ドキドキ…」

「俺は…俺、ヤマトという人間は…」

「……………っ!!」

「青葉の事を…」

「……………はにやあ!!!!」

…ええ?

「…ええ? あれ? は!!」

結論。俺は青葉がよくわからなくなりました。

その青葉と言いますと鼻血を出しながら幸せそうに腕のなかで眠りました。例え

るなら緊張の糸がプツンと切れたような…そんな眠り方だった…。

「…どうしようもない…」

…そういえば前回の時もよくわからない行動してたよな？

うーん…なんだろう。何故かもうこれでいいんだよっていう声を聞いたような気もしてきた。

なら天に身を任せるとして、青葉を何処かに置いとける場所を探して歩いてみるのもいいかもしれないな…

そう考えた俺は優しく青葉を担ぐとドツクに奇s y…お邪魔することにしたのだった。

見知らぬ背中に背負う悲しみ、誇りを胸に… 中

青葉を担いで三千里…とはならないものさつきから俺に向く視線はないけどあつたとしたらきつと痛いほどに突き刺さっていた筈だろう。

しかし、三千里など一瞬なのでもし離ればなれになったとしても俺がいれば毎日会える訳だ…そう思うとなんとなくあのお話は、大袈裟に聞こえるから不思議だ。

勿論、そうは言ってもあの時代には現代の乗り心地の良い車はないし、俺も誕生していなかった…と思う。

感動作であることに変わりない訳だ。

それにしても女の子ばかりの空間に男一人というと先程の想像のようになってしまふのか…。不祥事ひとつ起こしたら瞬く間に憲兵さんのご厄介になっちゃうんだろうな。地味に大変な事になってたんだな…。他の鎮守府の男性提督さんたちも手を出すわけにはいかないだろうから…ご愁傷さまだな。

今の御時世、触つてなくても女性が騒げば痴漢で逮捕されたり、ぶつかって触れてしまっただけでセクハラになるっていう世の中らしいし儘ならぬものだ。…感覚的なものでそうなるなら見た目が不快な（言葉を濁しています。）女性のミニスカートは逆セク

ハラになると思うがどうだろうか？え？別に理不尽な世の中になんてキレテナイヨ？

アホな考察を切りやめ、そして俺は青葉の落とした物を拾う。
ん、このボタンを押せば良いのか…。

「どういうテンションで始めたら良いのかは青葉さんの指示を仰がないと分からない為いつも通りでお送りいたします。宇宙戦艦ヤマトです。取材させられてますけど俺はこの鎮守府の者でもありません。本当に大丈夫なんでしょうかね？」

つと、青葉さんは先程気絶しましたので代理で俺が司会進行を勤めさせていただきます。ここは、先程説明がありました通りドックです。船渠ともいいますね…：ドアの目の前、入っていきなりですが敢えて言いますね？

これ、なんの取材なんだろうね？タイトルから予想するならばアポなし突撃取材で赤裸々なドキュメンタリー…：みたいなのかな？

……………。

では、遅れながらにお邪魔します。つて、えつと…：これはまた…：コメントしづらいし…：ドックだよね？」

青葉に渡されたビデオカメラだけが手持ちぶさたとなつてしまひなんとなく見つめていた。何故だか早く早くと急かされているような気がしてしまふのだが、よく考えようと俺が青葉を気絶させてしまったわけだが青葉はこれが取材と言つていた…ということはもし俺が何もしなければ青葉が関与している記事に穴を開けてしまふ事になるのではないか？

思い当たつた考察に事の重大さを理解させられ黙り込んでしまふ。カメラのレンズを覗き込めば心なしかレンズを輝かせているようにも見えなくない。溜め息を一つ吐くとをレコーディング状態なのを確認して一人空しいが説明口調で話しかけるように進行をする。

「今、俺が見た物で思つたままに言いますよ？」

銭湯じゃん!!

…以上です。えつと、俺は機械の沢山並ぶ創庫のような場所を予想してただけに余計に面食らいましたよ!! 皆さん、ドックとは銭湯なんだつて勘違いしないで下さいね? 確かに見た目は完全に銭湯ですけど本来の場所としては船…ここでいう艦娘さんたちを修理、修復、改造…は工廠だったか。…とまあ、それらを行う場所です。予想になります、たぶん艤装を直す所だった艦娘さんが増えてしまつたために移動、増設など

の手段で此処は元ドックだったというオチでは無いでしょうか？」

そうだとすれば、ここは移動されて残った場所を有効利用しようとした結果であらなつたのではないかと俺は予想する。艦娘さんたちは出撃すると潮風でベタバタになつたり潮の匂いが気になつたりする。それに女性ということもあるし気にならない訳がない。気を使つた結果銭湯を作ることになつたのなら利になつた考えだと評価しよう。

つて…俺は評論家かなにかかな？

さつきから妙に説明口調になるのはきつと青葉のビデオカメラの撮影に緊張しているか、その為に切り替えたからに違いない！そうとしか思えない。

「じやなきや御都合主義…いや。おかしなことを口走つた。そんな物語のような事有るはずないからな…言い訳してすまなかつたな。

そして銭…ドックの暖簾を潜る。

扉の先に暖簾がかけられてるといふ時点で銭湯じゃないか…そういう突っ込みは受け付けんぞ？

だつて誤魔化して進行を進めてる自分でさえ、その考えに行き着くのに苦勞はしなかつたからね…。

「これ、もしかして青葉が勝手にドックって言うだけでその実只の銭湯だったって
いうオチじゃありませんよね？…騙してお風呂の覗きをさせて陥れようとしてるとか、
『ふふふ…これで視聴率は鰻登り、世の男性の支持率MAX…ウフフフフフ』とかいう
算段だったりしませんよね？…やばい、心配になりました…」

ジョークで言った筈だったんだけどなんだか本気で心配になった…青葉、最初はいい
奴だと思ったんだけどなあ…。

口は災いの元っていう言葉が突き刺さらないのかどうなのか気になるのであった。
というか、コイツ投げ捨てて良いかな？結構、イラツとしたんだけど…

「これ、不味いですよね…鎮守府って艦娘さんの巣窟ですよ？…そしてここがその
銭湯って入った瞬間に痴漢、覗き、おててにお縄ぐが一連の流れだよ。

さあ、テレビの前の皆さんはどうする！」

勿論入らんがな!!

回れ右して、ドックを後にするために戸に手を掛けようと手を伸ばす。

「え……？」

「え……？」

…ハッ!!

頭の中が真っ白になったとかそんなんどうでもええねん。

それよりも現状だ。俺は戸を開けようと手を伸ばす。

でも予想外な事にその寸前に戸がひとりでに開く。…え？自動ドア？

なんていう事はなく、目の前の人物が開けたということが伺える。そして、俺は反応が遅れた為に戸に手をかけようとしている手は伸ばしたまま止まらない訳で…：そうなるとその手はどこに行き着くのか？

それは一先ず置いておかせて下さい…。先に目の前の人物についての考察を述べよう。

黒い髪をミディアムかセミロング位の長さには伸ばし、後ろ髪を三つ編みにして肩を通して前に持つてきている。三つ編みの長さは大体胸上程度で、両耳の上では癖つ毛なのか可愛らしくちよこんとはねている。：少し犬耳っぽい。頭の天辺からは一房の髪が上に持ち上がり、毛先からは重力の影響を受けて垂れ下がっている。所謂ヲ級のいう、アホ毛という奴だろう。

身に付けているのは黒いセーラーに赤いスカーフ、髪止めも赤を基調として黄色い紐が付いている。背丈からしてたぶん駆逐艦の子だと推測される。

そして、現実逃避してた事象についてこの事が関わる。

そう、身長だ。身長差が何よりも問題なのだ。

相手方も戸を開けて直ぐに誰かいると思っていなかったのだろうか？開けて間もなく入ってくる。そして俺のモーションは戸に向けて行われてる最中な訳で：ええつと：気づいてくれた？

分からない？

分からない人はきつと純粋な人だよ：汚れないでいてください。わかった人はきつとジャンプとか好きなんだよね？そうだよね!!（↑錯乱中）

「…うえ。あう…：えつとね？そのう…」

「ああ……」

もう、駄目だ……

彼女から手を離し、ゆっくりと目を瞑る。パターンとしては叫ばれる、叩かれる、殴られる、罵倒を浴びせられる、俺が自害するかだと思ふんだ。うん。

彼女は突然の事で理解が出来なかったみたいで律儀に俺が思考の彼方に意識が吹っ飛んだのを戻ってくるまで待っていてくれたような間まで作ってくれていた……。

で、彼女も自我を取り戻したようで……俺の手と、俺の手が掴んでいた部位を何度も見返しては真っ赤になった。

何処を揉んでしまったのかは言わん。彼女の尊厳に関わる……。……勿論、揉んでいた奴の台詞じゃないことは理解しているとも……俺がするべき行動なんて一つに決まってるだろ？

「介錯は任せた……」

本日二度目の切腹を図ることにした。いやあー、乱世乱世!!
俺なんてもう、駄目だ……。

大丈夫、沈んだって…太陽はまたあの空に輝くのさ！

「確かに胸を掴んだのは悪いけどそこまではする必要はないよ!!」

お前が言うんかい!!ワザワザ、俺が言葉濁したのに…てか、この子変なところで男らしいんだけど!!格好も然り気無く中破してるしてか、近い!!

この子が自分で言ってしまったから白状致しますけど俺、ヤマトは目の前の彼女の胸を戸を開けようとした拍子に驚掴みしてしまいました。以上。

これは流石に死んで詫びるしかないよ。

俺ってかなり固いけど、波動砲のエネルギー貯めて撃たずに溜め続ければエネルギーが爆発して内から弾けると思うから逝けるよね?

うん、これだ。これだったら逝ける。青葉の時みたいにはならない。

「艦長、今参ります…。」

俺はそうして目を瞑り、視界を閉ざし真つ暗な世界へと旅立つのであった。

見知らぬ背中に背負う悲しみ、誇りを胸に……後（変更点あり）

俺は……あれ？

目の前は真つ暗で何も見えない。目を開こうとも何も見えなかった。ただ暗闇が広がる。何も、ない。

空っぽ……闇、飲み込まれるかのような錯覚を覚える。

感覚もない。感情もなにも出てこない……

何があつたのかを思いだそうにも頭の奥でナニかを拒否するかのように阻害する。

思いだそうとする、拒否

強引に押さえ込もうとする、反発

身体を動かそうとする、エラー

エラー、エラー、エラー……

何かをしようとするとその表示が目の前で赤く視界を潰す。何をさせたい……分からない。抗う術は試した……だが、なかった。

俺は反抗することを辞め、闇に対峙する事を選んだ。

「ヤマト」

「っ!!」

この声…あの人か!!何処ですか!

だがどれだけ叫ぼうが喉を震わせることもなく、掠れることもなく、音が出ることはなかった。まるで……なように、それは今の……を表すかのようだった。

「ヤマト、儂は最後まで戦い抜いた。絶望し、渴望しながらも抗った。だが、今のお前はどうか。」

「……………」

「お前さんには儂の言葉は届かんか!儂の気持ちは無駄だったか!!お前さんは…儂の想いが、地球の全ての願いが乗せられていた筈だ!!それをここで燻りおつて!」

「っ!!あう……う……」

目の前で発せられる言葉に否定したかった。見えないけど聞き間違える筈のないあの人の声で叱責され俺は少し悲しい気持ちになった。

あんな…笑うだけの日々を送り、全てをなかった事にして…そんなの、そんなのってねえよ!!」

「いいんじゃない、いいんじゃないよ。」

思い出した…俺が、壊れた日の事を。

泣くことしか出来なくて、無力で、誰にも認識されない世界。笑顔が…人の想いを、死を全て無に返した。そんな世界は俺は憎かったんだ。そして、自壊する事に決めただ。そして見捨て、世界を手放したんだ…。

「よくありません!!沖田艦長の気持ち…全てを救いたいって気持ちを!誰もが笑えるようにしたいって気持ち、死力を尽くした戦いをアイツらは、踏みにじった!!」

「…アレは俺の自己満足だ。それでいいんじゃないよ。ヤマト、俺はお前に返したいんだ。俺たちをずっと見守って守ってきてくれていたお主に今度は俺らが…」

「そんなの綺麗事です!!沖田艦長は…だ、って…」

俺は前が見えてなかった。艦長の姿を見ることが出来なかった。俺は泣いていた…。とつくに枯れ果てたと思っていた涙は前が見えなくなるぐらいに溢れていたから

だから、前が見えていなかったんだって気付かされた。

「いいんだ。許されていいんじゃないよ……儂が許す。」

「ですが!!俺はやっぱり艦長と……沖田艦長と一緒に歩いてきたかった!!俺が眠る所は、居場所は貴方のいる場所なんです!貴方が……俺に乗り込んで戦う事だつて本当は反対だった。あなた以上の人物なんて居ないんです。離れるのは……嫌なんです……もう、誰かが亡くなる姿は見たくないんですよ……」

立っている力も無くなり、膝から崩れ落ちた。

だが、倒れた感触はなくそつと誰かに支えられた暖かさだけが俺を包んでいた。最初は何が起こつたのか分からなくて真つ白になった。だけど俺の頭上、髪の毛にポツポツと雫が落ちてきて理解した。

この物静かな艦長が深く被った帽子の奥の瞳から涙を流してくれていることを……俺と、そして艦長は二人で静かに泣いていた。俺だけじゃない……今ここには艦長がいるただそれだけ俺は安心出来たんだと思う。

そして、気付けば泣き疲れたのか深い眠りについてしまっていた。

だから、この夢から覚めてしまったんだろう。

「ヤマトよ…、お主は儂の一番の理解者だった。誰よりも儂を気遣い、理解した上で見守ってくれていた。そして守ってくれた。お主は気付かなかったようだが、儂はお主という最高の友がいたからこそ無茶が出来たんじゃよ。一心同体…とは違うがお主が儂にそこまで思っていてくれた事を何よりも誇りに思う。

だからこそ、お主は儂と一緒に死んでほしくない。もつと、たくさん命を、心を救ってやってほしいんじゃ…」

ヤマトが最後までいたその場所には二枚の写真があった。それを見た、鋭い眼光には、一筋の涙が流れた

写真には青く輝く海を背景にした、知っている姿よりも大人びていた二人とその間に

いる子供。二人はヤマト船員で艦長が最後に立ち上がらせた大和魂を背負う青年と最愛の人のためにその身を盾にした女性。二人は本当に幸せそうに笑っていた。

もう一枚はヤマトが真ん中にいて、その回りを楽しそうに取り囲んでいた女性達の写真。ヤマトの顔には鬱陶しそうにして呆れてるが何処か嬉しそうに微笑む姿がそこにあった。

「……」

誰かが何かを言っている。でも、俺は起きたくなかった。

今、起きてしまえばまた思い出した………した記憶も。…何をした？俺は何をしたから悲しませた？艦長はどんな姿を叱責した？俺が情けないから？…違う気がする。では何故…

「ヤマト!!」

「時雨く何かあったっばい?…って、ヤマトさん!!」

意識の外では騒がしくなっていた。

深い思考は段々と喧騒の方へと意識が傾き始めてしまった。それからまるで元から何もなかったように夢での出来事が散っていく。そして靄がかかって思い出せなかった倒れる前までの記憶が段々と鮮明になってきていた。儚い夢、それでも俺には意味あるとても大切な物だったって分かる。だって、俺は今最高に清々しい気持ちだったから…

「えつと…これはいったいどういう状況っばい!!」

「ヤマトが目を瞑ったと思ったら静かに身体から破裂音をさせて倒れちゃったんだ!!倒れてきたヤマトを受け止めて起こそうとしたら泣いてて…僕どうしたらいいかって…」
「え!!ちよつと待つてっばい!!どうしてそこからそんな状況になるっばい!!何で裸で抱き合ってるっばい!!しかも時雨馬乗りだし、大人なの!!大人の階段駆け足で登り詰めちやっつたっばいの!!」

「…ん?…つ!!」

いや、これは違うの!!僕が襲ったとか脱がしたとかそんなんじゃないやなくて…でも脱がし

てて…あれ、これ僕ヤバイ状況だよ!! 憲兵さんのお世話になっちゃう! どうしよう、夕立!! 僕意識ない人に好き勝手やっちゃった!!」

「キヤーキヤー! つばい!!」

うわお…起きたくない。寝てる理由も無くなっただけこれ、起きたら大変な事になっちゃってるよね?

時雨と夕立の会話や己の感覚からある程度予測を立てておこうか。…冷静になれればっていう程度だから所詮当たってたらいい程度で聞いてほしい。

まず、感覚から誰かが俺の身体に乗っている。しかも一肌で…誤解しかされない文章だがたぶんタオルかなにかが俺の腰下の…そう、あそこら辺にかけてあるっぽい。誰かとは、まあ当然時雨だよな。次に場所だが湿度が高いことから工廠の浴室(?)だろう。時雨が風呂に入れようと俺を脱がせた。

さっきの時雨の様子から助けたい一心で無意識的に俺を脱がせたりしたのだが夕立に言われて自分がどうしてたかを理解して意識しちゃったんじゃないかな? で、我に返った時雨が焦って意味深な言葉だったりで余計に場を掻き回しちゃってるって感じだろうね…。

…すまん、青葉!! 起きてくれ! 俺じゃあ収集つかない! 緊急事態!! 助けて、ヘルプっ

!!

——カシヤツ!

「いやー、何かがあつたと青葉のジャーナリストの勤が訴えてくると思つたらなにやら面白そうな事になってますねえ〜♪何でビデオカメラが無くなったのかは分からないけど此方の方がネタになりますよねん♪」

「コスモタイガー、ヤレ」

青葉に救いを求めたのが間違いだつた。コスモタイガー内には誰かがいるようで、その誰かは見事な敬礼をすると空を翔けた…：ような気がした。

俺の現状か? もう、諦めたよ。諦めて己の姿を確認したうえで立ち上がって構えてるさ…

まったく、清々しいって言つたらこれだ俺はきつとハプニングで退屈には困らんだろ
うな。

さて、艤装はついてなかつたようだが関係ない。何故か今手元に出てきたコイツがいれば青葉ごとき直ぐに簀巻きに出来る。さあ、パーティーを始めようか

「ヤマトさん起きてたんですか!？」

「ああ、お前をそのまま放置ともいえないと思って背負ったうえに撮影の方も手伝ってやったのにそうやって、面白そうであれば恩を仇で返すんだね。」

俺は出来るだけ取って置き笑顔で青葉を迎える。そして、タオル一枚で局部を守ってるだけの姿のまま俺は宣言した。

「標的は青葉の持つカメラだ。もし、外れても被害が青葉だけなら構わない。むしろ率先してやってくれていい。」

死んでも死なない、ガミラスかゴ?ブリのような奴だ、全力でOKだ」

「ちよ!!死にます!!死んじやいます!!沈みます!!」

「ああ、地面に沈めてやるよ。」

敵に最大の敬意を払い、叫ぶように号令を掛けた。

「…で、時雨？」

「夕立？何かな？」

「…ヤマトさんの身体を近くで見て触ってどうだったっぽい？」

「そりゃあ、凄かったよ…（//ω//）」

という会話があつたらしいがこの時コスモタイガーが真価を發揮していた為に俺の耳に届く事はなかった。

「…でもね、僕分かったよ。夕立がさっき何を言いたかったのか、ヤマトが教えてくれたよ。あの夢の正体も全て分かった。だから、もう無理はしない。全てを抱えるんじゃないよ。友と、姉妹と、共有出来るって実は凄い恵まれた事なんだって」

「夕立だったら遠慮なく頼っても良いぽい！」

「ふふ、じゃあ次の遠征任務は頼ろつかかな？」

「うえ…？あー！！次って…ダメ！！ダメっぽい！意地悪っぽい！！」

そんな微笑ましい光景が後ろには広がっていて俺もそつちに加わりたかった。だが、俺はバカの面倒を見なければいけないわけで、簧巻きにした青葉がコスモタイガーによつて宙吊りでトンボ返りされたりする姿を眺めていた。

「すみませーん!! 青葉が完全に悪かったです!! なので、下ろしてえ〜〜!!」

「はい、あと20回転」

「死んじやう〜」

俺はそつとバカの姿を見て笑った。別にバカだと笑つたんじやなく、コイツのアホな行動が実は俺を氣遣つてたんじやないか? という考えに行き着いて、それはないわーと笑つたんだからな?

けして、俺も色々な人に想われてる事に嬉しくて笑つた訳じやないからな?

…まあ、青葉への罰は軽減しないけども、ね。

番外編 平和な一日、温かなぬくもり

新年明けましておめでとうございます。

今年も俺、ヤマトは頑張っていこうと思います。応援、お願い致します。不甲斐ない姿や、情けない姿をみせるかもしれない。それでも、俺はヤマトとしての責務を全うしてみせる!!

…以上、何故か作者に代理を頼まれたヤマトの挨拶でした。

とまあ、こんなもんかな？

新年、それは読んで字の如く新しい年の始まりを意味する。過ごし方は各々沢山ある。新年を迎えるため除夜の鐘を聞きながら初詣をしたり、初日の出を拝めたり、寝正月を送ったり：俺は勿論寝正月な訳だ。今だつて炬燵にこもり寝ながら水平線から昇る朝日を見ている訳だ。

誰も居ない綺麗で大きな太陽。雲一つない空はこれからの未来を示唆しているのだと、そうあやかりたいものである。

ボーツと太陽が昇りきるまで眺め、何をするわけでもなく腕を伸ばしミカンを剥く。新年だからといって何か特別なことを望む訳でもない俺としては今まで通り誰かと笑い合い、そして目には見えないけど大切な物を共有するという日常が俺にとつては何よりも大切で変えがたい物で、それが非日常であり日常なのは十全に理解しているからこれ以上の物を望むと罰が当たってしまうような：そんな気がしてしまうんだ。でも、もし…。もしももう一つ願っていいのなら俺はこう願う…。

「誰も傷付かなくていい、そんな平和の中で誰も沈む事のない、そして全世界で深海棲艦と艦娘でも手を取り合えるそんな世の中になつて欲しいな…。

って、これじゃあ二つになってしまってるか。」

俺は何となく笑った。

そのあとに続く言葉を飲み込む為に、あの言葉を口にしながら……「俺が必要で無くなるよう……」そんな悲しい言葉を無理矢理書き消すように……

ーにやあ

思考が停止したんだが、猫が鳴いた。

猫が…

猫なら仕方無い。仕方無い、けど…ここは海の上なんだぞ!! うみねこの群れならいたるところそこらかしこに存在するけど…お、そうだ。聞いてくれないか? この前から一匹だけ異常に好意的なうみねこがいるんだよ。かわいくて思わずミカンあげたらなついたんだよ。

ミカンをあげるきっかけは魚を取ろうとしてたらそこにイタチザメが狙ってたからブースターとエンジンをフル稼働にして守って、それから頭に乗ってきたそのうみねこに魚を取れなかったからお腹空かせてると思ってミカンを分けてあげたっていう感じだったんだよね。

って、違う違う。そうじゃなくて猫だよ。

「にゃん!」

「…ん? あはは、そこに居るのか」

背中に軽いけども何か生き物が乗っかっていた。その生き物は炬燵の布団を退けて中から這い出てきた。

横たわる顔の、目の前で猫はまず小さな会釈をするのだった。

「ヤマトさん!! 明けましておめでどうにやのです!」

「律儀だね。明けましておめでどうだよ、電」

猫：電は何故か小さくそして見た目が少しユルくなっている、それこそ猫サイズになつて猫耳と猫耳が生えてる位に。毛並みも茶髪で後ろで髪を結うというお馴染みの髪形なのにそこに猫耳が加わるただそれだけで俺は目を奪われた。誰が見ても思う、それこそ百人が百人頷く。そのレベルで彼女は可愛かつたのである!

…つて、そうじゃない。これはどういう事なのかを聞かなきゃだつたよな?

「いにやずまにやのです! 電じゃにやいのです!」

腕をブンブンと大きく振り否定する電、いにやずまは駄々を捏ねる子供のようで凄く

微笑ましかつた。小さなその姿はいつもより背伸びをしているようで守つてあげたいという保護欲を強く掻き立てた。

「うん、そうか。ならいにやずまはどうして此処にいたんだい？」

「ふにやああ〜…、ハッ!! そうにやのです! 今日はやミヤトしやんにい〜ふにや…新年によあいしやちゆに…も、もうやめてくださいにや!」

目を細め喉を鳴らしながら喋るいにやずまはいい具合にふにやんふにやんになっており、それを撫でながら眺めていると…つて、文字にすると大変な犯罪臭がするから不思議だな。そして彼女の頭から手を離すと名残惜しそうに見つめ短く「あつ…」と一瞬だけ悲しそうな表情をとつていた。

ただ彼女の口からは新年の挨拶という言葉が帰ってきたわけだ。時間が許されるならもつと撫でていたかったがそこは分別の出来る俺でいたい。名残惜しい気しか無いがそれでも諦め先を促させた。

でも、律儀な彼女が確かに挨拶をしに来ないとは良く考えてみたらあり得なかつた。別にそこまでは全く問題はない。むしろ俺が本来向かうべきなのに炬燵の魔力に屈してしまっている事の方がよっぽど問題だろう。だが最後にこれだけは聞いておきたい。

誰もがこういう状況に陥った場合に思う。

「…で、どうしてそういう格好なんだ？」

「最初は晴れ着を着て向かうつもりだったのですが、にやにやをトチ狂ったのか明石さんが改造しておいたーって言って渡されたらこんにゃ姿形にやってたのです。」

明石…。

聞いたことのない名前だ。今まで出会ってきた艦娘さん達ではないのだろうか…。あ、いや…駆逐艦（だと思われる）金髪の僕っちは名前が分からないのだけど彼女が明石ではたぶんないと思う。

理由？ 只の勘、口調的な問題…位だな。とまあ、確たる証拠は無いため言い切れないがそれでも俺の予想は間違っていないだろう。でも、何故猫なのだろうか…？ 趣味…か？ それからその明石という人物は間違いなくマッドなタイプだろう。もしくはお人形遊びとか着せ替えとか好きなタイプ。きっとこの二つのどちらかだと確信している。

でも何故だろう…この人とは絶対に会ってはいけないと告げてくる。怖いとか、そういう事じゃなく…何て言えば良いのか、こうく…世界の終わりに直面する勇者の心境というか、己の危機に瀕する結果を産み出しかねないといえますか…ううん…もどかし

い。だが、出来る限りで明石さんという人物を避けていこうと決心をするには充分な危機感を抱くのだった。

今日の結論。

え？速い？仕方無いよ…だつていにやずまを撫で回してただけなんだから。遠くで砲撃音が聞こえたりもしたがいになやずまが海上での戦闘音ではないと耳をピコピコと小刻みに動かしながら聞き分けたので介入を止めたり…ミカンを落としたことによりいきゆう召喚を果たし、いにやずまが警戒心MAX、威嚇のポーズで毛を…服を逆立てたり、いきゆうとキャットファイトの末、意気投合したようで一緒に俺の膝上で炬燵ミカン、牛乳（事前に買ってあつたもの）で乾杯をしたり、お昼寝をしたり、いきゆうライダーとなるいにやずまと海上散歩をしたりと有意義な時間を過ごしました。

いきゆうの説明だけどイ級じゃなくていきゆうだからな？

イ級の幼い姿のゴツゴツしたフォルムを柔らかくして怖さよりも優しさとユルさを追求したようなそんなミカン好きない級がいきゆうだ。

出てきたときに何処からか長門の声も聞こえたような気もしたが何処にも居なかったのを考えるに幻聴だったんだとおもう。

兎に角、いにやまずまと仲良く慣れたのはとても良かった。

いきゆうも友達が出来たようで嬉しそうだった。

良いことづくめで万々歳な日であった事を此処に記そう。

そう、最高であった、と。此のときはな。

使者、あらわる。

切欠というものは唐突なものである。そしてその切欠を切欠と理解出来るのはその時ではなく大抵、後になってから気付くということも多い。

というのも、俺自身が気付かなかった為、文章に起こすこともしなかった所にきつかけがあったからで…。そうだなあ例えるなら運命？とでも言うのかとか、そういうのもアリなのかなとか思わされたからだろう。

じゃあ、その時のことから順に説明させてもらう。今の現状について言つたところで誰も理解できないだろうからな。

かくいう俺でさえ分からなかったからねえ♪まあ、詳しくは言わないが出会い頭に抱き付かれたり、銃口（砲門）を突き付けられたり、睨まれたりキスされたりもしたね。

…あ、撃たれもしたっけ？

兎に角普通じゃなかったのは確かだな。

…ほら、目が点になつてるぞ？分かつたろ？俺がいった通り最初から聞いておくのが一番なんだつてな!!

ハチャメチャな人生を送つてんのは自分が一番分かつてんだよこんちくしょー！誰

か替わって!!

お願いこのままだとストレスで胃がマツハ!! 胃薬常備する艦隊とか嫌だよ! 勘弁!

え、こんなオチで進めるな?そこはほら、ヤマトクオリティーってことで!

では、何処から説明したもんかねえ?

じゃあ何時だかの切欠は:置いて、今日の始まりから順に説明しようか。

「起きたら目の前に女の子が!!」

「ただの女の子じゃないでしょう?ほら、誉めてくれても良いのよ♪」

独り言(回想)にボケを挟むなや!!あと君は距離が近い。さつきまで砲門を向けてた奴の台詞じゃねえよ!君の中でいったいどんな心の変化があったのか教えてください!!

ヤバイ:このままだと今回の俺の台詞がほぼツツコミになる気がする。地の文が書けない!!

「突つ込むなんて……ヤマトの為だったら僕は何時でも万全だよ、ポツ」

手紙の中の君はどこいったんだああー！純情で守りたくなくなるようなか弱い感じの君は今何処に？ほんと、勘弁して！！胃が、胃があ！

キリキリと苦痛を訴える胃には後で薬を与えるので今だけは頑張ってください、ホントにマジで！

「はっ！！……今ならやれる？」

「だから、さつきからお前はバトルジャンキーか！あとさつきからさらつと心の中を読まないでください！！」

艦娘と何か違う雰囲気醸し出す彼女……だが絶対にコイツに心を許したくない。だつて出逢つた瞬間にぶっぱなしてきたんだぞ！！いくら今、首を傾げて可愛らしくしても口走ってる事は俺の命取りに来るっていう宣言だからな？温厚な俺がキレる位のマジな砲撃だったよ！！

被害的には小破まではいかないけど服が焦げてるからな？直撃してたら確実に被害

出てるから!! 威力がおかしい!! お前はアルペジオか!

…なんかおかしな電波を受信しちゃったようだが、兎に角コイツだけは何かおかし
い。

疲れがドツとふりかかってくるとため息が出てしまっていた。視線を彼女から離し、
まだ見てなかった子に視線をさまよわせる。

「…これ、あげる。」

「…ありがとう。俺の心のオアシスは君達だけだよ、本当に。ヤバイ…嬉しさで泣きそ
う」

そういつて渡してくれたのは胃薬だった。…女の子一人でこの性格的に濃いメンツ
の面倒を見るからだろうか、ストレスがキツイのは当たり前という訳で…胃薬常備艦
娘になってしまったのだと頭で理解するよりも先に本能で理解してしまっていた。

「あれだね、兎に角一緒に頑張ろうよ、うん。…泣きそうだけど…強くなっていこうよ、
うん。」

「…ありがとう。そうだよね、友人が変態だったことや憧れの先輩が実は変態だったつ

て知ったとしても頑張らなきゃだよね……ふふ、うふふふ」

気付けば目の前の少女が暗黒面に落ちていた。

あ……その気持ちも分かるよ？俺も最近はず葉による盗撮及びその写真の売買とかを取り締まろうとしたら話したこともない艦娘の娘を含めて一種の大事件になりかけたり、深海棲艦のオチビ達の面倒だったり（でも前者と違い後者はほっこりした気持ちなのに加えて好きでやってる節がある）とかヲ級とのネタに付き合ったり……あれ？深海棲艦達と一緒にいる方が艦娘の子達といるより精神的に疲れてないような……

「アハハ、俺もう深海棲艦方に付こうかな……」

「ふえ？ゆー、それは悲しいな。……ヤマトさんは会ったばつかのゆーにも良くしてくれているいい人なのに敵になっちゃうなんて、ゆーやだもん！……ふえええん」

……えつと、俺が泣かせた？泣かせてしまった……？

女の子を？………。

俺はなんてことをしてしまっているんだ!!妙に最近よくあつたような気もするけど、流石に小さな女の子を泣かせるなんて最低な行為は今回が初だぞーいや、そんなワケわ

からん言い訳じゃなくて…そう。もう、ダメだ…俺は…つてことだから。もう、突っ込み入れなくて良いよね？

「そうです。そうやってサイテーな人になればお姉様だけじゃなくて私にもチャンスが！」

「はいはい、バカ言つてないで現実みようね？俺と君達は出逢つたばつかなのにチャンスも何も始まつてすらいねえよ…っは!!もしかして命の方か!!」

怖い(一) ; ㇏(一) この子さらつとお命頂戴とか笑顔で言ってきた。銃口を向けた女性と同じで黒色の帽子とその下の金色の髪の毛が特徴的な年下の後輩っぽい子は真面目そうだなって思つたら只の殺人鬼でしたとか俺はいつたい何を信じていきればいいんだあ!

でも確かに出会つたばかりでも怨みがあれば命を取りに来てもおかしくない。…それなら出会い頭に睨まれたのも撃たれたのも領ける!!この子達も実は落としてから持ち上げて俺の信頼を得やすくして懐に入り込んでサクツとやる為の人心術だったとか…あ、ならZ-1の好感度が異様に高いのはハニートラップ。…ゆーも敵？

「だ、だだだだ誰も信じないぞ！俺は誰も信じないからな!!」

「ゆーも…?」

「…どうしたの?」

「そ、そんな…そんなのって無いよ!!僕も信用できないの?」

「いきなり怯えだすなんて…そそるわね ポソツ」

「おっなら戦おう?そうすれば白黒つけられるからね♪最強はこの、ドレッドに決まってるからな!!」

「え?私、ヤマトさんの命なんて狙ってないですからね。…って、然り気無く距離を取らないでください!!」

怖い…女の子って難しいってよく言うけど理解出来るかな!!生物的に本能に忠実な深海棲艦の方で良いと思うんだよね、俺!

ゆーが今にも泣きそうになっていた顔をもう一度チラツと見る…と、心が折れそうになった…。それはもう、複雑骨折レベルで…。

胃薬常備艦娘のZ3（紹介はされてないない為、手紙からの情報からたぶんそうだと推測）は生温かい眼差しで此方を見ながら心情を察してくれていたようだった。…あ、信じてても良いかな?と、まで思えてきた。

手紙少女乙一（厳密に言うとはポトルメルだけど）は表情からこれ以上になんていう位の絶望を漂わせていた。ちよつと面白い…。嘘が付けないんじゃないかなっていう位に顔に出やすい性格のようだ。信じちやおうかな？

黒帽子金髪姉は舌舐めずりっていうの？兎に角、獲物を捉えた肉食動物のような…後ろに實際豹が見えるような気さえた。信用ってなんだつけ？正直言いますと色々身の危険を感じるのドレッドよりも此方の方が上である。

ドレッド：たぶんドレッドノートが実名なんじゃないかと俺は予想する。ドレッドノートって確か元々ドイツに対抗して造られたイギリス艦じゃなかっただろうか？だとしたらおかしい。ドイツからの使者の筈なのに…俺が感じた違和感はこのから来るものなのかもしれない。だが、容易に心を許すつもりはない。何かが根本的に合わない感じがする。馬が合わないつとと言うとしっくりくる。

因みに弩級戦艦という弩とは当て字で実はドレッドノート級という意味でド級という表記が正しいのである。…まあ、ただの蘊蓄（うんちくと読むんだぞ？）だと思ってくれるとありがたい。

ちよつと涙目な黒帽子金髪妹…なんか少し申し訳なくなつた。…でも、ゆー程じゃないんだよな…それを含み更に申し訳なるのだった…。

とまあ、ふざけるのもこの辺で真剣に話そうと思う。今に至る経緯に関してはもう少し前に遡る必要がある、理由があったからとしか言えなく、もう少し俺の回想に付き合っただけ。今度はしつかりとした話しになると思う。

だから俺はもう一度、目の前の子たちに目を向ける。そして出会いを詳しく話そう

この、ドイツ艦達との出会いとその切欠についてを…ね？

使者、あらわる。 2

きつかけは……たしか青葉と出会うよりもほんの少し前。色々あつててんやわんやで時間があつという間に過ぎ去っていったあの忙しかった時期だろう。

提督さんと出会い、少しずつ艦娘の皆に受け入れて貰え鎮守府へ立ち入るようになってあたりでの裏にあつた出来事は本当に小さく見落としてしまっていた。語る程でもない、日常的な偶然の産物から生まれた一つの奇跡

そうして起きた小さな出来事。

それが切欠……そして、そこにボトルメールが繋がるという事になるのだ。

もう少しの間だけ、俺の世間話に付き合っほしい。

青葉との邂逅より少しあと。ヲ級とともに反省会という名の相談をしたときだった。

「……………マア、ヤマトノ性格ジャア致シ方ナイネ。私カラフオローヲ入レテ置クカラ氣ニシナクテイイカラネ？」

反省スル必要ハナイ。コレバツカリハ運ガ悪カツタ。タイミングガ悪イトシカ言イイヨウガナイカラネ…ドウシテモトイウナラ今度、フオローヲ入レタ私ヲ労ツテクレレバイイサ」

「…蜜柑食べるか？」

「グスン…ヤマトガ酷イ」

勿論冗談だが逆に言えばヲ級に迷惑をかけられる事もしばしばある…というのは言つてはいけないのだろうか？もし良いなら下手な貸しなんか作るとどんな無茶難題を吹っ掛けられるか分からないからそれで手打ちにしてほしいんだけど…でも、確かにヲ級には分からないことだらけだった俺に色々な事を教えてくれたりと恩があるのもまた真実である。

多少なら労つてあげるのも吝かではない…。いや、止めよう。意地を張つても仕方ないし感謝の気持ちがあるのも事実。なら、たまに労う位でいいのかもしれない。

「……ありがとう。ヲ級には色々と本当に感謝してるよ、これからも頼りにしてるよ相棒？」

「ヲ……………」

帽子（クラゲっぽい奴）の性で忘れがちだがヲ級は俺よりも少しだけ小さい為、視線は大体上を見て話をしている。見た目重そうな帽子なのに見上げるのだから首が痛くなったりしないのか？というのには密かな疑問だったりする。

という感じで身長差があるため少し屈み目線を合わせた上で語った。

少し照れ臭そうに頬を紅くするヲ級は何処か新鮮で可愛いなと思うと少しいとおしく感じた。失礼かな？とは思いつつも気付けばヲ級の頭（帽子の上から）撫でていた。

「……………ヲッ」

何故か帽子の表情が心なしか和らいだような気がするんだが流石に気のせいだろうか？そしてヲ級が恨めしそうに見てくるのは何故？そして、ヲ級よ。生物的思想の元なのか知らんがそこで突進する意味が分から無いんだけど……いや、痛くないよ？でも、い

きなりされたら驚くだろう。それとヲ級の格好は薄着だろうが!!

それにくつついたりされたら年相応の女性的柔らかさがその…当たるわけで…その上で…だから、理性が、さ？気持ちいいと言いますか…何て言うか…。

「ヲ級？…非常に言いづらいんだけどさ？その、当たってるんだが？」

「ヲツヲツヲ。当てテルンダゾ？」

「そ、そうか…じゃあ、何も言わなかったら失礼かと思つちやつたから言うな？」

俺は少し緊張しつつ一拍置くか意を決して口にすることにした。ドキツつとする言葉なんだろうなあ…なんて何処か冷静に判断していた。

「やっぱりその帽子クラゲ、生きてるだろ!!今も顔に絡み付いてるんだけど!!柔らかいそのプニプニ触手が俺を包んでるんだけど!!ヲ級が抱きついてる事より此方の柔らかさが異様に気になる！」

理性などもう無かった。思うままに突っ込みを入れてしまっていた。ああ、白状するよ!柔らかいよ!!このプニプニ触手が堪らないよ!!クソツ、一家に一つその帽子が欲し

い位だよ!!

「…帽子ニハ勝テナカッタヨ。負ケタ…完膚ナキマデニ負ケタ。イツソ清々シイ位負ケタ。モウ、ヤマトヲ襲ツテ規制事実ヲ作ツテ私ダケノ物ニスルシカナイナ!!」

「既成事実を規制される言葉つてことでかけたのか?」

「…ネタバレガ早イ!!」

分からない訳がないだろうが! 一体俺がお前とどれだけ一緒に過ごしたと思つてる。語りたくなくて言つてないだけで結構一緒にいるだろうが!! それこそ、ある程度ならどんなこと考えてるか位分かるっつーの。

「オシドリ夫婦ダナ!!」

「知つてるか? オシドリつて子供を産むまでの間しか一緒にいないんだぞ? しかも最悪なことに産んだ後すぐに別のメスを見つけると求愛行動に出ることもあるそうだ。」

「…遊バレテ、捨テラレタ。ヤマト、私トハ遊ビダツタノネ!!」

悪ふざけしてるのか体をくねらせ、演技がかった声で言ってくる。ここで俺もふざけ

返すと取り返しをつかないふざけに発展するのは何時ものパターンだろうな。まあ、別に大した用事もなく平和的にのんびりしかしてないし時間も空いている訳だから乗っても良かったんだが敢えてここは真面目に返答しておこうかな？

ふざけすぎるのも程々にしようかなっていう気持ちになつてくれればいいかな。みたいな下心もあつたり無かつたり。下心っていうか算段っていうのか、こういうのって？

「いや、遊びでやってるんだからそれでいいんだろ？ それと捨ててないから。俺とヲ級の友情是一片たりとも変わることはない絶対なる、不動の関係だろう？」

「ヲ…。」

まるで絶望したとでもいうかのような表情だったが視界の隅にあるものが映りこみ気になったため会話を一時的に中断した。そこにはプカプカと浮き沈みを繰り返すピンがあつた。

普段なら別に気にしないのだが何となく気になつてしまつていた。それは何故か分からぬ。でも気になつてしまつたのでそのピンに近付き拾い上げた。只の興味本意だったがそのピンはここまで漂流するまでに時間がかつたようでありには藻が張り

付き日焼けたのかどうか判断出来ないが反射した光はくすんで黒く光っていた。

「ボトルシツプカ？」

「流石にそれは海に流さないだろ!!」

「イヤ、那珂ノ中ノ人ガ町ノ国際バリスタ弁護士ナンダガヤロウトシテタゾ？」

「町なのに国際なのか？バリスタなのか弁護士なのかもハッキリしないし、那珂の中つて何!!」

相変わらずヲ級はよく分からない事を言うときがある。これがヲ級のいう電波少女っていうのなのかもしれない。

「違ウカラネ？間違エテナイケドソウジヤナイカラ!!」

間違えてないなら合ってるんだろ？どういう事なんだよ…全く。そんな愚痴を心の中で呟くと拾い上げた小瓶をそつと左右に振ってみる。

カサ…つという音から中には液体以外の物が入ってる事は予測立てられた。ピンを塞ぐコルクを無警戒に摘まむと背中の方からニョキつと横から顔を出すヲ級が忠告

を入れてきた。

「中カラハナント!! 赤チャンガ入ッテイタノデス。」

「不憫すぎるだろ!!」

「ビンダケニ不憫…ウマイ!」

「うまくねえよ!! なんだその昔話チックな感じは」

「ヲ級トヤマトハ彼女ヲビン太郎ト名付ケマシタ。」

「彼女っていうなら太郎は止めてやれよ。てか、ビンに入るサイズの赤ちゃんって最早一寸法師の世界だよ!!」

ビン太郎…いや、ビンちゃんとかは何となく愛着が沸きそうなんだけど…流石にビンに閉じ込められた赤ちゃんって笑えないから。しかも漂流してたんだから確実におなくなりになってることが分かる。可哀想過ぎる!!

そんな事を考えながら俺は封を切ったビンを逆さまにして中身を取り出した。

「中身ハ手紙?…ッハ!! ヤマトガ今考エタ封ヲ切ッタッテイウノハ便箋ノビント瓶ヲカケタノカ!! 山田君座布団1枚持ッテキテ!」

「山田って誰？」

「ソナナコトヨリおうどん食ベタイ。」

そんなことらしい。まだ見ぬ山田さん……哀れなり。

ヲ級も大して気にしてない所を見ると単なる何時ものネタだったんだと分かる。山田にうどんってどんな関係性があるのかも俺には生憎と分からないがたぶん関係があるから言っただと思う。無駄に無駄がないのがヲ級のネタだからな。

ヲ級との小ネタもそこに巻いてあつた手紙を広げ中身を見てみた。

「……………」

「……………読めないんだが」

外国の言葉なんだが先ず英語ではない事は分かる。ロシア語でもない。漢字でもハングルでもないからアジア圏内の手紙ではないだろう。

ヲ級は分かるのかどうか分からないがただ、反応が薄くて分かりづらい。

「差出人ハドイツニ住ムレーデーベレヒトマーストイウラシイ。」

「読めるのか？…初めて素直にヲ級に感心したような気がするよ」

「ヤマトガ辛辣！」

猛抗議しながら両手をブンブンと振り回すヲ級に笑いかけながら冗談と言ひ落ち着かせると手紙の内容を教えてもらった。曰く、レーデーベレヒトマースさんは外の此処ではドイツ以外の世界っていうのが気になるらしい。最初は丁寧な挨拶と自己紹介から始まっていて礼儀正しい子であるのが窺える。文字も少女特有の丸っこい物だった。が読み安い文章構成だったことから生真面目な性格なんじゃないかというのが俺の予想である。夢見る少女：ではあるのだが只それだけなのでなく見聞や海を越えて関わりを持つという事を彼女は望んでいるようだった。

最後に「もしよければ僕と文通相手になつてくれませんか？出来れば貴方の慣れしたんだ祖国の言葉であると僕としても嬉しいです。」と書かれ、彼女の住む住所と思わしき数字や言葉が並んでいたとか：この子は人を信用し過ぎだと思う。俺は悪用しようとは全く思わないが世の中には悪用する人間が居るのもまた事実。騙されたりしないか心配になる。：これを流したのだから随分と前なのだから流石に今はやっていないだろうが忠告位はした方が良さそうだし。

そりゃあ、俺は悪い意味で目立ってしまったけどこの手紙を拾ってしまった以上返さない訳には行かないだろう？態々ドイツまでいく必要も現在の郵便技術ならぬし別に多少の暇潰し程度の物としてだが手紙を書いてみようと思う。

以上が俺が彼女：レーベ事、Z1、レーベレヒトマースとの文通の邂逅であった。

俺も彼女の国の言葉が分かるようになり、レーベと読んでほしいと言われた（書かれた）り、彼女が日本語での手紙を送ってくれるようになったりとなんやかんやで結構頻繁に手紙を交換していた。俺は基本的に提督さんの鎮守府、幸福湾鎮守府から郵便を送らせて貰ったりしている。だから、送るときは住所を鎮守府と書いている為に日本の海軍の人間だと勘違いさせた事もあつて謝罪文が送られた事もあつたが、それ以外は問題なく普通に俺とレーベは文通をしていたのだった。

時折ヲ級が俺が手紙を書いている姿を見に来て、羨ましそうにしていたりもしたが文字を書けないという事実を隠したかったらしくつい最近まではそれがずっと続いていた。今は俺が彼女に書き方を教えているためある程度の漢字、平仮名、カタカナまでなにかけるようになっていた。ただ、まだ使い分けが分からないらしく難儀しているようだ。

でも、俺はヲ級が手紙をかけるようになるのはあとちよつとだと思つている。…一生懸命少しずつ文字を書けるようになっていく姿を見るのは自分の事のように嬉しくなったりもした。ヲ級は笑いながら先生と呼んでくる時もあり、照れ臭くなつたがこんな日がずっと続いたらいいのに…なんて思いながら俺は守るべき物を再確認させられたんだ。

…もう良いかな？

これが全てだ。俺とレーベの関係は文通相手であつてちゃんと顔を合わせたのだから初めて。他のドイツの艦娘さんがたは知り合つて直ぐだ。だからこそ、今の状況は余計に不可解なんだよなあ…。

誰か教えてくれたりしないかな？なんてね

使者、あらわる。 その3

少し過去を振り返ったお陰で冷静さを取り戻すことに成功した。とはいえ、本日はどうやら俺に休息の時間は訪れないらしい。目の前には先程の不用意な発言により乱れている…。そして何よりも精神にキているのはこの二人だ。

「僕の事を嫌いにならないで…」

「ゆー、悪い子じゃないよ？信じて…」

ユーとレーベは涙目になって此方を見上げている。つまりは…まあ、察してくれると嬉しい。そして、俺はとても心苦しいです。ゆーとは…いや、レーベ以外とは此処で初めて言葉を交わしたわけだ。例え、知り合いで仲が良くてもやはり礼儀は守るべきだっただろう…。なにより、俺という人物をレーベは信用してくれたからこそ彼女はゆーやプリンツ達に紹介してくれたんだと思う。俺は、俺がその想いに応えないでどうするっていうんだ。

このままじゃ、ダメだ。

俺は改めて意思を固めると彼女達に向き直った。

「そそるわ…：ジュル」

「ちよっ!!御姉様!女の子がしちやいけないようなお顔になってます!!」

プリントは相変わらず突っ込みを入れることにおいて惚れ惚れする位の速さだ。尊敬する。そして、残念美人という言葉の意味をよーく分からせてくれるビスマルク。褒められたいのかバカにされたいのかたまに分からなくなる…と言っても出会ってからそんなに経ってない俺が思うんだから身近なプリントはもつとそう思ってるんだらう…。

慰めてあげても…

そして早くも心が揺らぎそうになってしまっていた。危ない危ない。

「ううん…：さつきまでの威勢はどうしたんだ?戦いづらいだらうが!シャキツとしろ!!」

「きつと何をやっても墓穴を掘るだけだと思うわよ。何もしないで流れに身を任せる方が楽だと、私は考える。ヤマトもそうしてみたら?」

完全に諦めてる?! マックスの目が死んでるんだけど大丈夫なのか?! 死ぬな! 傷は浅いぞ!! 同志よ、死ぬ事無かれ!!

あ、ドレッドノートは無視するだけだな。相手するのもなんか疲れちゃったよ。良いよね、しぐラツシユ、ぽいらツシユ…?

ーぽいつ?! 名前が違うっぽい!!

ーダメだからね?! 諦めちやダメだよ。頑張ろうよ、ね?

気のせいだろうか時雨の音が…末期だな。

でも、それでも元気が湧いたからヨシとする。ああ、諦めるなんて沖田艦長に顔向け出来ん!! 俺はヤマトだ、誇り高き沖田艦長の指揮の基、色を失った地球を青き星へと戻した一員だ。絶対にこの程度の壁じゃあ沈むもんか!!

相変わらず、どこかチヨロいことは理解しているけど、いつもの事かと納得すると立ち上がった。突然動き出した事でビクツツという反応をする心配症の二人に俺が切り替えた事を分かつて貰うため二人の頭をそつと一撫ですると他の面々に向き合う。

「うしっ！」

気合いは十分だ。完全に切り替わった。さつきまでへたれてた俺は成を潜め、戦闘用の意識になったのが良く分かる。明瞭な意識に、頭の回転が幾らか上がったような気がする。故に今なら行ける、そんな気がするんだ!!

「ああ、すまん。情けない姿を晒したが、こんな逆境何時もの事だった。気付くのが遅れたよ。」

改めまして俺がヤマトだ。この国へようこそ。…といっても俺から君達にしてあげられる事なんて大して無いんだけど、此処から一番近い鎮守府に道案内位なら出来る。その鎮守府の人達は皆イイ人だからだから君達なら直ぐに仲良くなれると思うよ。ドイツでも日本の良さを伝えられるように出迎えてくれるはずだからね」

結局は他人任せなことに我が事ながら笑うしか出来ない。悔しいとは思う。でも、俺はそれでいいとも思ってもいる。

適材適所：何時だか誰かに言われた、ような気がする。それは遠い過去の記憶か最近の出来事なのか、今は分からない。だけど俺はちっほけで何でも出来るなんて思い上が

れるほど大きな存在でもない。

だからこそこの笑いは己の不甲斐なさを憂うものであり、でも頼れる者がいる事の歓びに対する物である。

「ヤマトが言った鎮守府の皆つて幸福灣鎮守府つて噂のあの鎮守府の人達だよね！色んな噂が有るから僕楽しみだったんだよ。」

「ゆー、怖くない人達だと嬉しいな」

「まあ、ヤマトがそこまで評価するなら私も期待してあげない事もないわ。…でも、ヤマトの疲れの原因でもあるのよね？…どうなるかは貴方に預けるわ。」

「日本の文化は興味深いと聴くもの。楽しみにしてるわ」

「レーベが言ってる噂つて…でも、今なら皆さんと仲良くなれそうです！」

と、鎮守府に着いてもいないのに期待大なことにちよつぱり嬉しくなりつつ面々の反応を考察する。

レーベは俺との文通によりある程度は理解しているかもしれないがあつた鎮守府の噂などが遠くの国でも知られてるらしく無邪気にはしゃいでいた。

ゆーはおどおどしくでも期待に胸踊らせている感じだったかな？その心配は杞憂だ

から大丈夫だよと口にはせず心で呟く。きつと、俺が伝えるより己の目で耳で感じる方が良いだろうからね。

ビスマルクは意外って言ったら失礼だけど真面目な感想を言っていた。あと、最後だけなんかなげやり気味だったような気がするが問題はないだろう。

マックスは無表情……と言ってもヲ級や深海棲艦方の表情も読み取れるようになった俺に死角はなく、口角が上がっているのを見逃していない。顔に出すのが苦手な不器用な子なんだろう。

プリンツは最初は顔がひきつっていたが、新たな仲間が増える喜びの方が大きかったのか直ぐに嬉しそうにはにかんでいた。レーベとゆーとも違う天真爛漫さを表に出していた。

概ね高評価なように安堵の息を吐くと最後の問題児に視線を向ける。するとあちらも此方の視線に気付いたように冗談めかしてニヤニヤすると獲物を見るかのようにじつと此方の出方を見定めていた。

数秒のやりとりだったが俺が折れて話しかける事にした。俺のドレッドノートの第一印象ははつきりいって最悪だったが別に嫌いという訳でなく……なんていうか、理解が及ばない？という感じなのだ。

チグハグ、矛盾、兎に角何か当てはまらないようなそんなイメージしか浮かばない。

見た目は金髪のロングで碧眼で瞳の奥では真つ赤な闘志が燃え盛りながらその癖何処か悲しみの色を見せる。戦いが好きなようだが彼女の闘志が燃えれば燃えるほど陰が色濃く写し出される…ハッキリ言うとな歪な魂の持ち主だろう。彼女の過去…か、それは別の何かが原因か？今はまだ何も見えない。不思議な感じなのだ。

「ドレッドノートはどうなんだよ。」

少し仏頂面になりかけるが平静を装う。相容れぬ相手であつても寄り添う努力をしないでは何も変わらないから。

「む？…もういいのか。なあに、このドレッドの美しさに見惚れて居ただけだろう。妙に見詰められるとは思っていたがそういう事なんだろ？ふふん、ヤマトには特別ドレッドを視姦する事を許そう。」

ドヤ顔を披露するドレッドノート。そこはかとなくイラツという擬音が聞こえたよいうな気がしたが気のせいだろう。ああ、気のせいだ。俺が女性にイラツくなどあり得ないさアハハ。ドレッドノートが一昔前のセクシーポーズで俺に流し目をしてくるが知

らん。別に相手を観察する事で状況を優位に持っていくのは常套手段であって発育の良いスタイルに見惚れて居たなどという事は無かった。

だからこそ、わざとそういう言い方をしたドレッドノートに呆れているのだ…決して怒ってる訳じゃないさ。

「「目が死んでる（よ）（わね）（ます）…」」

なんでドレッドノートは俺をこんなに煽るのだろうか？あ、喧嘩したいんだっけ…？
そうか…ふふ、そうか…。

だが、さつきから何度もいう。これぐらいは慣れてるんだ。そう、慣れてる。対処法も心得ている。

「ドレッドノートは、本当に軍艦なのか？」

「…何？」

相手のリズムに乗らずリズムを崩し、作らせないそして相手を揺さぶり優位に持ち込む。そして、優位になった所でガツンと一撃必殺を浴びせる。時にその必殺を隙を作る

ための布石にもするが、それでもそれ以上の秘策を用意するものだ。常に一歩先から攻めることが大切である。

これは実戦で役立つ戦略の一つだ。

「国を背負い、表立つ立場にあるというのに君の口にする言葉は無責任な事だらけだな。……そんな事も言われなきや分らないのかと聞いてるんだ。」

「ドレッドともある私を侮辱するか！」

「違うね。君達は本国から視察の為に訪れた筈だ俺という一国にも引けをとらぬ勢力が一体どれくらいのを有しているのか、また友好を結ぶ事が出来るのかなど。なのにドレッドノートの放つ言葉は全て此方を煽るものばかり。これで確かに戦力を図る事は出来るだろう、が……それも一国（俺）を敵に回すことによつて、だ。そうなれば此処で君の独断によつて艦隊全員を危機に晒す事になる。更に本国も危機に追いやる訳だ。確かに君自身實力はある。だがそれでも限度がある。でも俺からしたらそれは思い上がりだろうな。」

……相手の力量も図れずして何が軍艦だ。舐めるなよ、小娘」

無茶と無謀は似て否なるものだ。そこには大き過ぎる位の隔たりが存在する。日本

という国はかつて大敗を喫した。相手は強大な相手であった。なのに、日本は互いに手を取り合う事が出来なかつた。相手の力量を見誤つたからだ。

実力をつけてきていたのは確かだつた。だが、そうして天狗になつた日本は陸、海と大きな力を分断させてしまつた。そうともなれば勝てたかもしれぬ戦いは此方の弱点が露見してしまつた次点で相手方に其処を突いてくれと言つているようなものだ。

今の彼女達、ドレットノートが正にこの例えに当てはまる。

だからこそ、古参の俺は彼女達が沈まぬように助言しなくてはならない。同じ過ちを繰り返させぬよう……

それが諭え厳しすぎる言い方だとしても、だ。それが一番為なるのだから……。

「まあ、言い方はキツかつたが何気無い言動、行動だとしても艦隊を危機にさらしてしまふこともある。逆に好転させる場合もある。だから充分な備えもないならば無闇な行動は慎んでほしいという事だ。俺が良いが鎮守府でそうだったら最悪戦争に発展しかねないんだ。そしたら折角出会えた君達とも敵同士になつてしまふかもしれない。それは悲しいから、さ。」

説教臭いのは嫌いなんだ。怒るより笑いたい。大切なものを心に抱いてそれで俺は

進んでいきたい。

でも、大切な人だった記憶を抱くより大切な人の横で一緒に歩いていきたいんだ。

「…そう、だな。このドレッドが間違っていた。多大なる無礼、すまなかつた！」

丁寧に頭を下げるドレッドノート。それを見て満足した俺は彼女に顔を上げさせると右手を前に出し、笑った。

「ドレッドノート、以下ドイツ艦隊の皆様を心より歓迎致します。では、ご案内致しますのでどうぞ此方へ」

「ふふ、聡明で力強い男性と本国には伝えさせていたどころ…ありがとう。」

手を繋ぐ俺と恥ずかしがっているドレッドノートを5人は微笑ましげに眺めていた。この時が今日、初めて俺が彼女達と分かり合えた瞬間だったような気がした。

使者、あらわる。

4

僕達ドイツ艦隊はヤマトを先頭に海路を進んでるんだけど最初の雰囲気からは想像出来ない位和やかな物になってる。大きく変わったって言ったら上から順番にドレツドノートさん、ビスマルク、ユー……かな？プリンツとマックスなんかは最初からヤマトとの付き合い方を分かっているというか……変わらないうちも通りに接してるようだったから代わり映えはしないんだよ。

んー……少し伝わりづらいかな？だったら最初から説明させてもらうね？そうすれば比較出来るだろうし分かるよね！

そうなるよ、そうだなあ……うん。今日の朝……は、後回しでも良いから……そうだ、鎮守府を出発の前の話になるけど付き合い合ってくれと嬉しいよ。

僕達は今から十数日前に沢山の人達に見送られながら祖国であるドイツを旅立つことになっていた。

目的は最近妙な噂が目立っている日本。僕でも知っているのは遠征中に見た流れ星についてや深海棲艦かもしれない一隻の艦に鎮守府が落とされたという噂位だけ他の皆はもつと知ってるのかも知れないんだけど僕は体験した事と提督さん自ら話してくれたもの以外は知らないんだよね。

流れ星の噂はお昼で太陽の明るさもあるのにそれ以上に青く光り輝く直線が宇宙に向けて飛んでいった…という感じなんだけど、これをやったのが一隻の艦であるという噂でもう一つの鎮守府陥落の噂も同一の艦がやったって聞いたんだよね。

その鎮守府は今、すっかり動いているらしいんだけど降服湾鎮守府って皮肉を言われているみたいなんだよ。けどその実どこの鎮守府より資源が豊富で深海棲艦とも戦わなくていい、更に上官からの命令すらないっていう独立化していて誰も諜報出来ないらしいんだ。だから恵まれた海域だつて言われてるんだ！幸福湾ってマックスは言ったよ？

どこの鎮守府でもその艦の対応にどうするかの会議続きで回ってないみたいなんだよ。だから僕達としても平和って訳なんだ。それに深海棲艦の活動も同時に沈静化傾

向で急ぐこともないからどの鎮守府でも同様に平和みたいなんだよね。その艦がもし深海棲艦でも平和になるんだったら僕としては嬉しいって思うよ。

…でもどうしてもまた深海棲艦が静かなんだらうね？少し気になる…。

でも、それとは裏腹に僕達鎮守府内の艦娘達は凄い盛り上がりがあった。なんでも話題沸騰の人物がテレビに出ていたらしい。鎮守府の内部を国民に知って貰う為の紹介が行われてる番組に急遽ゲストで登場したんだって。

僕はあんまりテレビって見ないから凄い事なのかよく分からないんだけどそればかりで大盛況なんだってさ。

テレビじゃないけど僕としてはマックスに見せてもらった映画でまだ告知段階なんだけど夜戦忍者の方が気になるかな？

黒衣を纏ってた夜戦忍者の師匠。わざと敵として現れて鍛えるんだ！最後には庇ってやられちゃうんだけどああいう告白ってやっぱり憧れちゃうよ。戦場の恋、自分の命さえ擲ってまで想ってくれる…僕はそんな人と恋人になりたいんだよね！

彼が誰なのかまだ情報が出てないんだけど幸福湾鎮守府の青葉監督っていう人が制作したってなってる。…幸福湾って、話題の映像も確か同じ場所だったような…

「それから今日から向かう行き先もよ。」

「あ、マックス!!」

目の前から相変わらず表情の乏しい……といつても僕は姉妹だし雰囲気とか言い方から分かるんだけどね! じゃなくて、曲がり角から又つと顔だけ出して生首モドキとなつてる。こういうお茶目な所が僕としては可愛いと思うんだよね、でも皆真面目だからジョークが伝わりづらいみたいなんだよ。……可愛いのに。

ん……? それより、今マックスなんて言つてた?

行き先? 向かう?

………。

……えっ!!

「そういう事。だから遠征の準備とか済ませて提督の所にヒトサンマルマル集合との事よ。……ちゃんと伝えたからね?」

マックスはこれで用が済んだということなのか僕の反応も見ず、質問とか色々あつたのに有無を言わずに行つてしまった。……準備するんだらうけどでも13:00つて……

あ、あと一時間ないよ!! きゅ、急過ぎるよ!! 僕も急がなくなっちゃ!

うわあ! あれとかあれとか... うわーん、準備間に合わなくなっちゃうよお!

提督の元にはどうにか間に合ったんだけど部屋に入ったのは僕が最後だったようでそこには先輩方がいた。

一番手前から順にゆー、マックス、ビスマルク、そして見知らぬ女性が横一列に提督の対面に並んでいる。僕は提督に一言謝罪を入れると一番端であるゆーの隣に並んだ。

『ああ、君達がこうして呼ばれたのは上からとある依頼が下ったからだ。今上層部でもめているこれからについてだ。まず国外であるここドイツでは判断材料があまりにも少ない。いや、無いに等しいと言っても良いだろう。』

提督はどこか困った顔で話している。

僕達には分からないけどたぶん上からの依頼っていうのがまた無理難題なのかもしれない……。この鎮守府は深海棲艦との戦いで最前線に位置する。そんな場所で提督をしている彼は部下？まあ、そんな彼の艦娘を務める僕らは自分で言うのもただけドイツで一二を争う練度でその上司である提督さんの腕はかなりの物なんだ！

だから普段はそんな表情は表に出さないんだけど……まだ判断出来ないかもしくは提督としては反対なのかのどっちかなのだろう。ううん……僕達が選ばれた事を喜べば良いのかそれともそんな危険な海域に挑むことになることを嘆けば良いのか……

こうして悩んでたからかな？不意に提督さんの口から出てきた名前は想像もしていなかった程の意外でありまさかこんな所から聞くと思っていなかったから思わず驚いてしまっていた。

それに上官が話している言葉を遮ってしまった上に私語、それも叫びに近いものをあげてしまっていた……。

うっ……懲罰ものだよお

で、無事提督さんの話も終わった…。

勿論何もなし…とはいかず、何故驚きの声を上げたのかを根掘り葉掘り聞かれちゃったんだ。それで提督さんには正直に全て話したんだけどそこは…ほら、その場にいた艦娘とはいえ女の子な訳で…あはは、はあ…

文通相手だから直接会った訳じゃないのにカツコいいの?!とか聞かれても困るんだよなあ…僕だつて最初のポトルメールが誰かに読まれるかなんて分からなかったんだから…。

あれは僕が初めて鎮守府にやって来た時にもし上手くいかなかったらどうしようっていう気持ちと相談できる人を作れないかな?…っていう打算的考えから始めたのに…誰かの元に行く可能性だつて一つしか出してないんだから相当低いつていうのに…

ま、まあ…だからこうしてヤマトの元に辿り着いたと知った時…返事が最近になって来たときなんかは運命つていう物を感じなかったわけでは無くて…その、ね?

うん、すつごく嬉しかったし、日本語だつていうのは少しして分かつて段々覚えられて、つてこれは言い訳にしかないかな?…出来ればヤマトに会いたいつて思つたしその…恋人になれたらあ…なんて文通を始めるようになって考えなくもなかった訳で…その、好きになつてたんだと思う。

「恥ずかしくて、誰にも言えないけどさ…」

「…どうかしたの？」

「う、ううん!! なんでもないよ! なんでもないからね!!」

「そう。」

上手く誤魔化せたかな? 思わずそっぽ向いちやったからマックスがどういう顔してるか分からないんだよね…そつとならバレないかな?

そつと、そつと…

ニヤニヤ

うう…スツゴいニヤニヤしてる。絶対に分かってるよ、あれは!! マックスに隠し事は出来ないなあ…

「内緒だよ! 他の人には絶対に言わないでね!! 約束だよ!」

「どうしようかしら。…ふふ、うゝそ。」

だから泣きそうな顔しなくて良いわよ。ヤマトさんと良い関係になれると良いわね？ 応援してる。」

僕ってたぶんマックスには勝てないって思うんだよお…。

イタズラっ子っぽい顔をしたあとに優しい瞳で僕を応援してくれたマックス。僕の事を一番理解してくれる僕の姉妹。

ヤマトとは仲良くなりたいたって思うけど…でもマックスとの関係が変わるのも嫌…ヤマトには悪いけどもし僕と…その、恋仲になったならその時は…僕だけじゃなくて、マックスも…愛して欲しいな。

って、まだまだそうなるって決まった訳じゃないけどさ！

なれたら…うん。なりたいたって！マックスと一緒に、三人で仲良くなりたいたって！」

「あー…うん。私もその気持ちは嬉しいのだけどあんまりそういう事は口にしない方が良いと思うわ。」

「…え？…つ！！」

照れてるマックスが可愛いなあとか考え事してたけど…え？今マックスは口にす
るって…？

別に食べ物をお口にしました訳でもないしそうなるとやっぱり声に出してたっていう事
で…それで僕が考えてた事っていうのは…ボンツっていう音が僕の顔から聞こえたよ
うな気もする。でも、恥ずかしさと顔の熱さと思考が停止してる。いやだってさ、そ
れはまだ見ぬヤマトに二股してほしいってようにも聞こえるよね？

「うあ…あう、あう。」

「ま…まあ、前向きに検討しておくわね。」

「こ、こころではご馳走さまって言っておこうかしらね」

僕達は互いに真っ赤になりながらヤマトとの出会いに想いを馳せることになる。そ
れはきつと僕達だけじゃなくあの場にいた皆が当てはまる。

提督さんも例外じゃなく、僕達が退室する直前にこう言っていた。

「無事、帰ってきてくれる事を望んでいる。出来れば君達…いや止めておこう。例え情
報を得られなくても構わない。ただ無事にさえ帰ってきてくれればね？」

笑っていたがアレは無理をしている顔だった。提督さんは最後まで悩んでいたんだ

と思う。どれだけヤマトという人物が出来ている人格者で安全だと僕が言っても直接提督さん自身が会った訳ではないし、それに性能的に人類には脅威になり得てしまうから……だから悩んでくれていたんじゃないかな？

提督さんの優しさに報いたいって感じたからこそ、この鎮守府は大きく強くなれたって思ってる。きつとそう思う艦娘の方々がいるから……ちゃんと戻ってきて提督さんを安心させてあげないとね！

「マックス、僕は応えられるかな？」

「……う……ええ、きつとね」

僕は提督さんの期待に応えたい。きつと、その気持ちはこの鎮守府で誰もが思っているであろう想いだと思ったから……

マックスにも僕の気持ちが伝わったようで主語が抜けてしまった言葉に返してくれていた。

あと少しで僕達は祖国であるこのドイツを発つ。だけど怖いっていう気持ちはない、あるのは心に小さく灯る温かな闘志と期待に応えるっていう目標だけ。それが僕にとつてはそれで充分なんだと思うよ。……あ、うん。

たぶん、ヤマトに会えるっていうのも大きいかもしれない。だ、だって文通相手なん

だよ！気になっちゃうのはしかたないじゃん！

「ウフフ…顔、真つ赤よ？ヤマトのこと考えてたでしょ」

「ち、違うからね！違うないけど、違うからあー！」

ニヤニヤと僕を見る、そして焦った僕がそう返せば余計に墓穴を掘りまた嬉しそうにニヤニヤするマックス。うう…僕ってマックスに良いように扱われてるよね…？い、い、つか絶対に形勢逆転させてやるうー！

って、いつまでニヤニヤしてるんだよお…うう…ちよつと恥ずかしくて泣きそうだよお……